

SEIJI
20卷

成寿

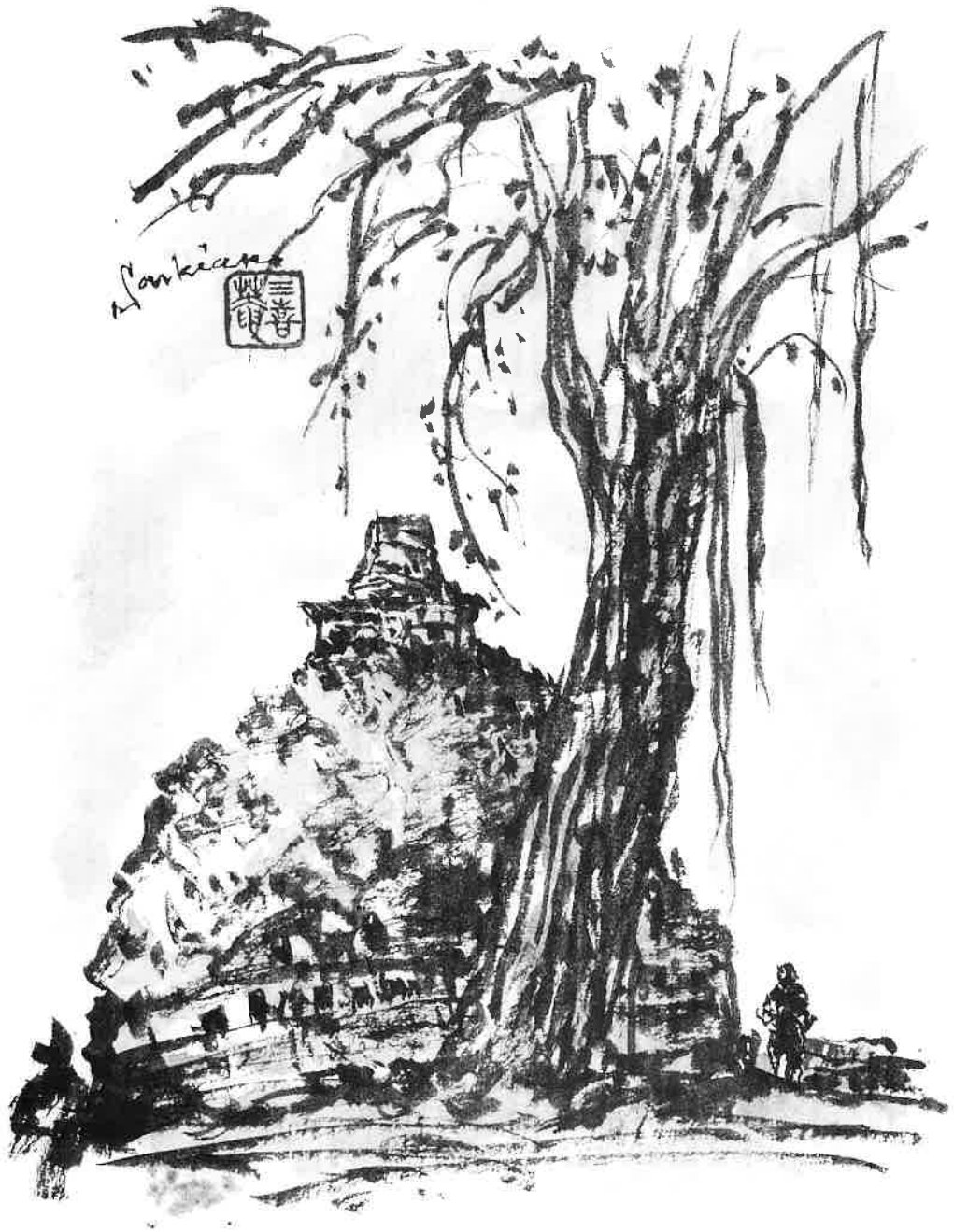
1993.

春季号

特別編輯
スリランカ

横濱善光寺刊
YOKOHAMA
ZEN KOJI





Sankeian
[Seal]

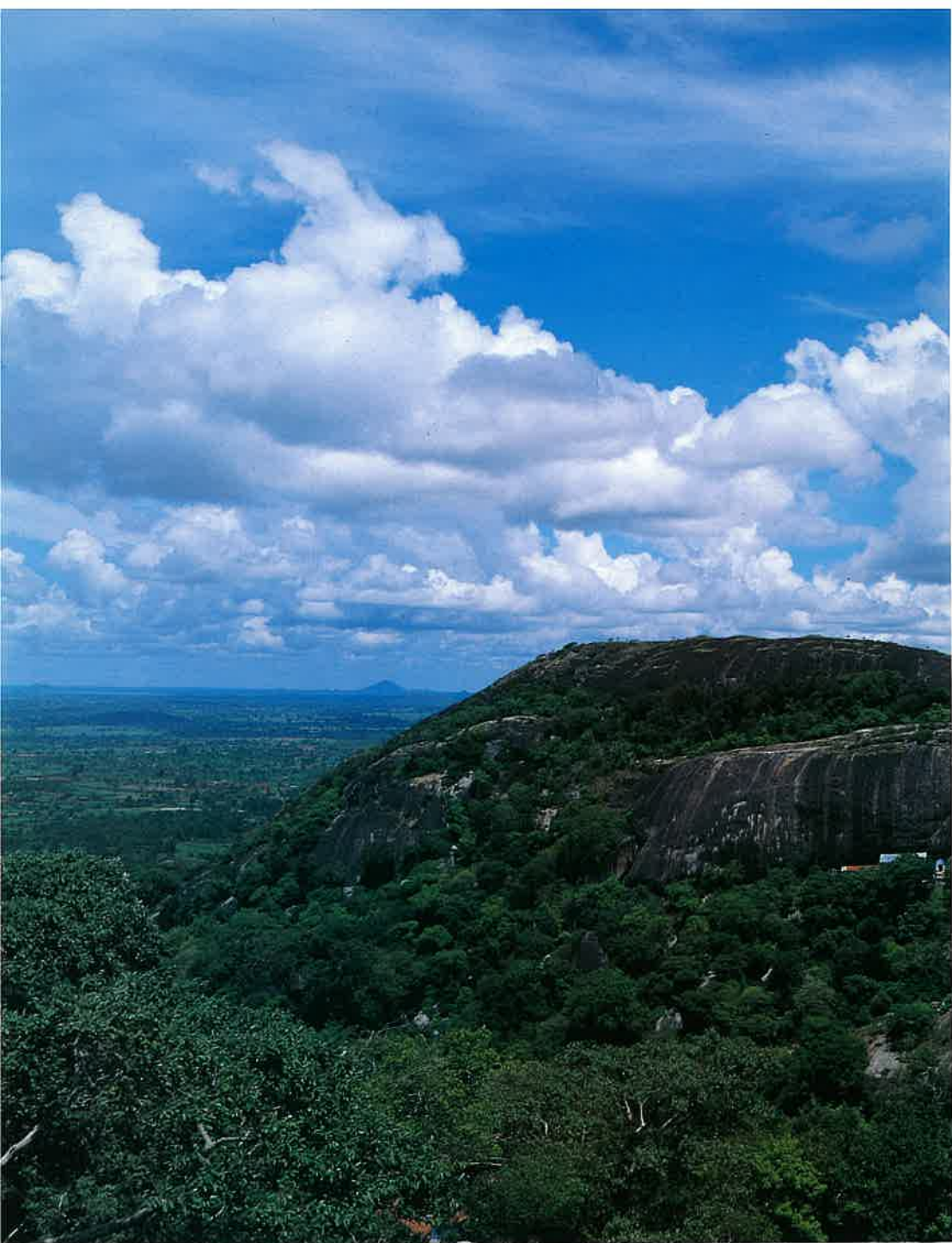
祈りの聖城—スリランカ—

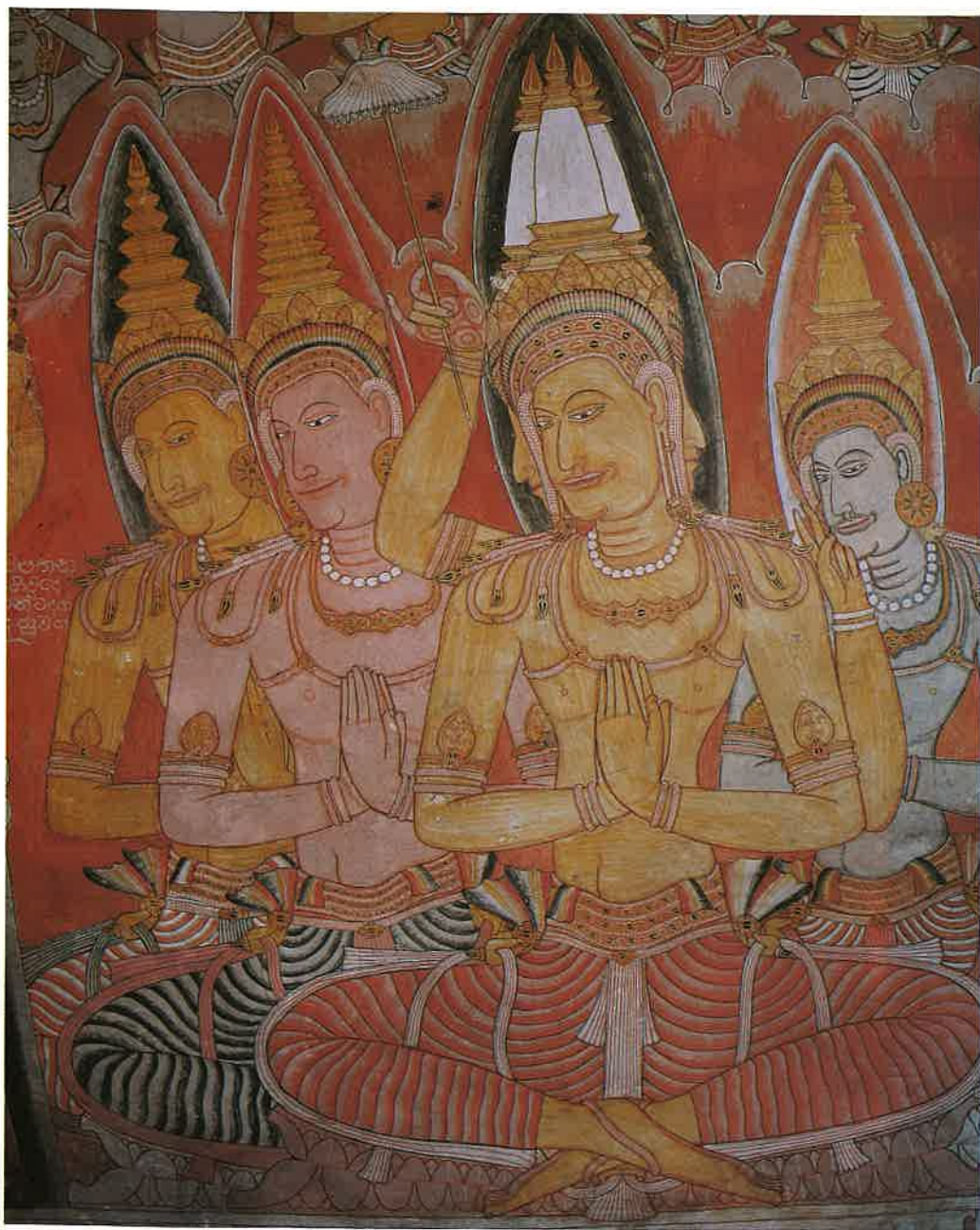


- ① ダンブラ岩窟寺院の中で、最も広い第2窟は、多くの仏像と全壁面に極彩の仏教画が描かれている。



② ダンブラ岩窟寺院は標高370メートルの岩山の中腹にあり、2000年間生き続けた信仰の場。





③ 四つの顔と四本の腕を持った梵天と帝釈天（右端）等が釈尊の説法を聞いている。ダンブラ岩窟寺院第2窟



④ 天人や仏弟子たちに説法する釈尊。ダンブ
ラ岩窟寺院第2窟。



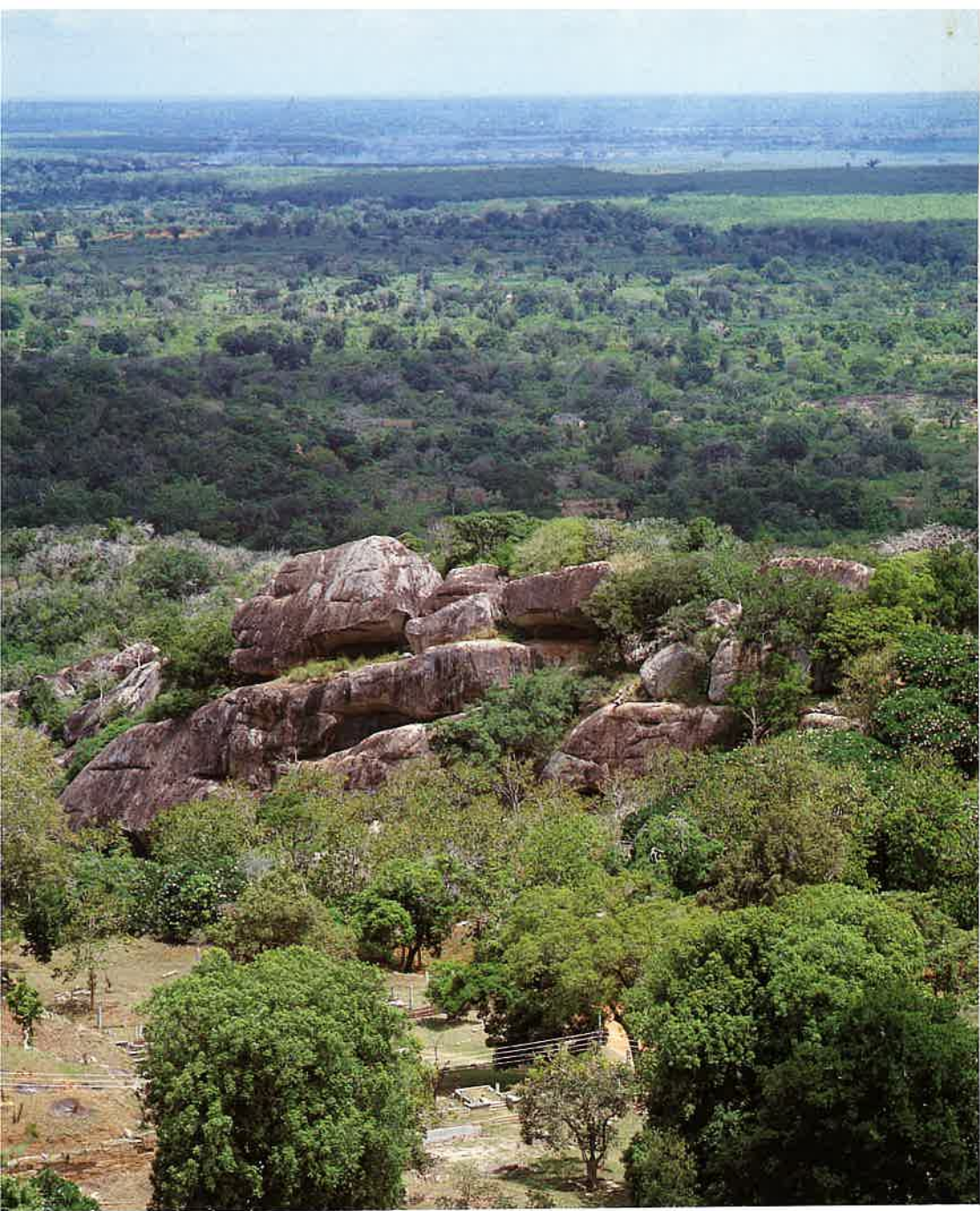
⑤ 聖地ポロンナルワの繁栄に貢献したパラークマバーフ I 世像。12世紀。

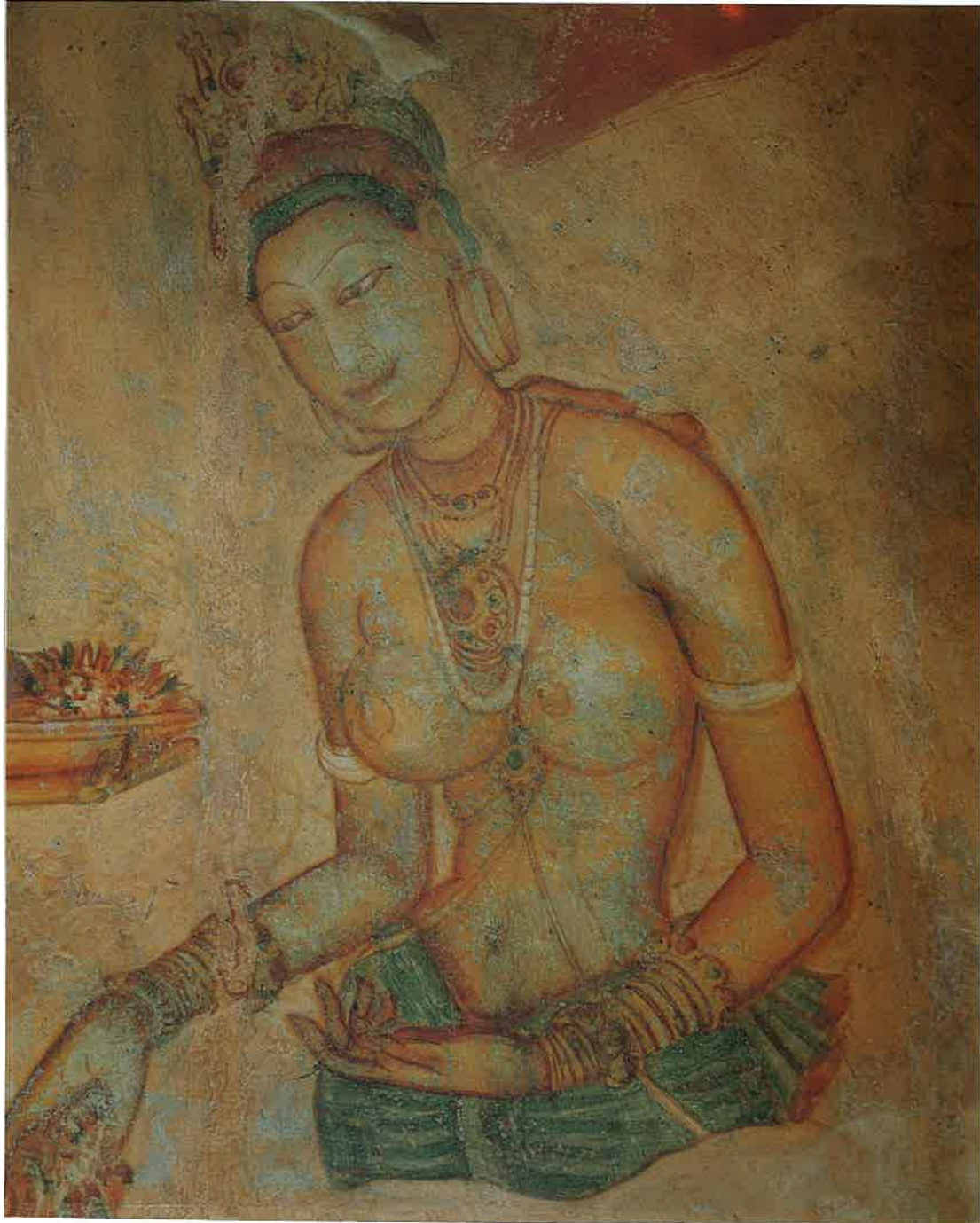


⑥ ポロンナルワのティヴァンカ・ピリマゲ祠堂の壁面に描かれた天人デワターの祈りの姿。



⑦ 聖山ミンタレー。アショカ王は前3世紀に、マヒンダ長老をスリランカに派遣し、この地で仏教を伝えた。右はカンタカ・セティヤ仏塔。





- ⑧ 聖山シーギリアに向かう岩壁に描かれた乙女たち。盆に盛った花は、お寺に献げるのであろう。清純な表情が美しい。





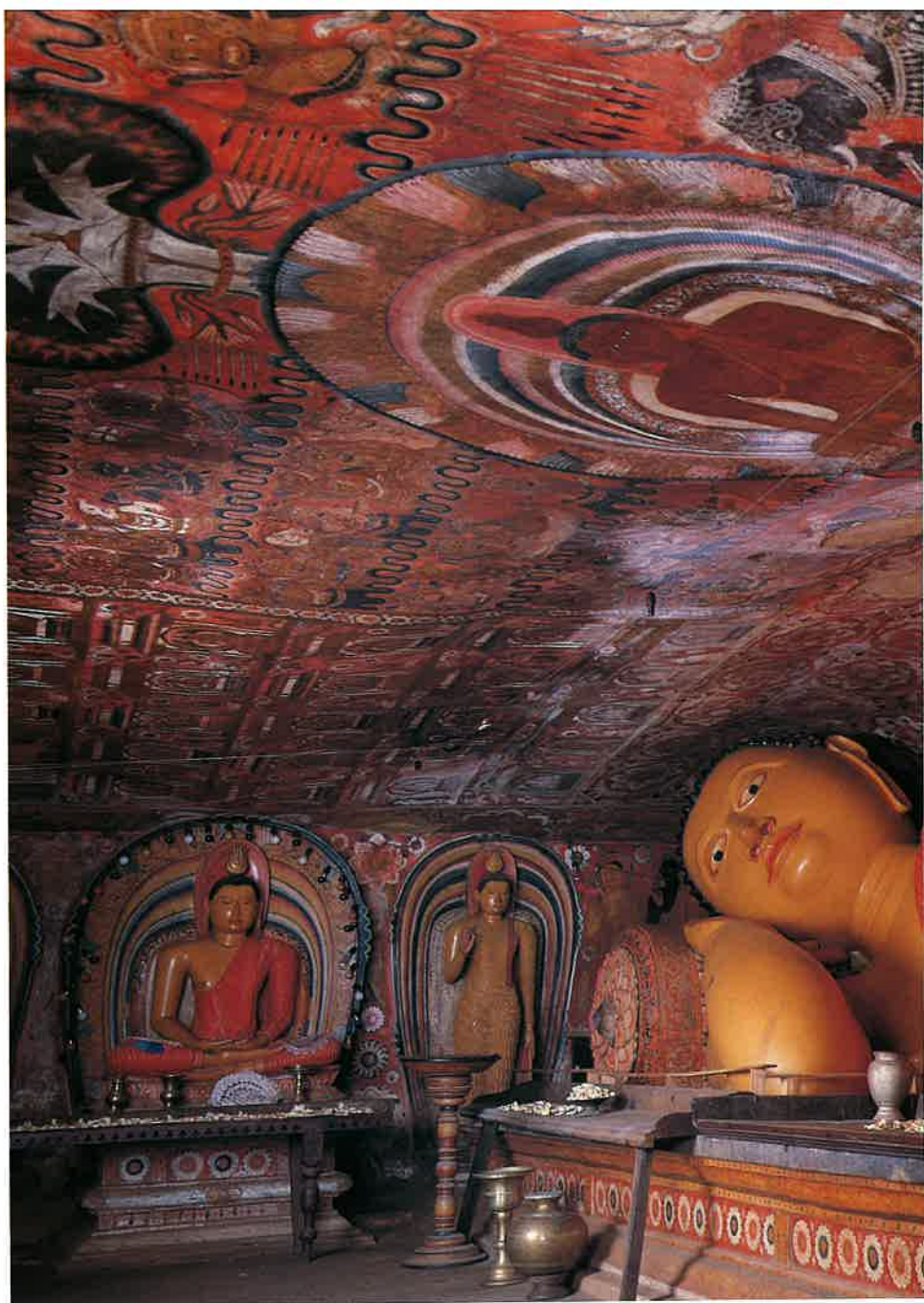
⑨ 9世紀頃のスリランカ南部には観音信仰が生きていた。ブドゥルヴェガラの菩薩たち。9～10世紀。

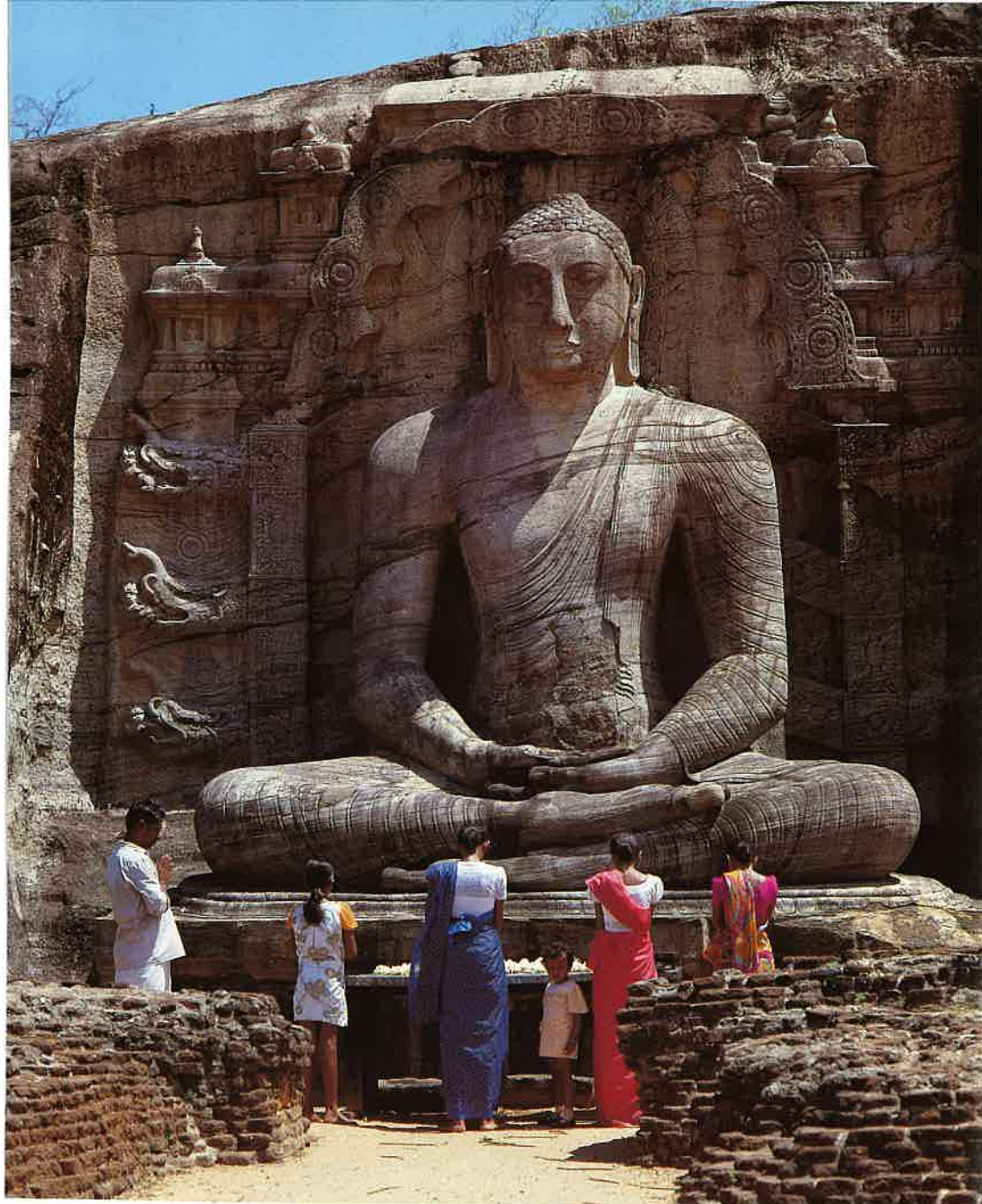


⑩ 自然石をくりぬいてつくられた、ガル・ヴィハーラ寺院の釈尊の涅槃像。



⑩ デガルドルワ岩窟の内部は色鮮やかな衣装をつけた涅槃仏を中心に仏立像、仏座像、壁面には仏や魔神たちが、所狭しと描かれている。





⑫ ガル・ビィハーラ寺院の禅定仏に祈るスリランカの信者たち。12世紀。

カラー	スリランカ	18
巻頭言	20
講演	● 明日を生きる	20
特集	● スリランカ訪問記	50
カラー	■ スリランカの旅	65
追悼	● 洞穴に栖む美女たち シーギリヤ・レデイの誘い	73
連載	● 謹んで驚見透玄老師のご遷化を悼み御法愛を深く感謝し奉る	87
連載	● いのちは永遠に今ぞ花咲く	94
留学記	● くらしの中で読む『正法眼蔵』	97
特別寄稿	● 忘れえぬ人々(2)	105
	● 黒田方丈さまは仏心の声を聴いていた	113
	● 日本に留学して	114
カラー	● 第九回海外派遣留学僧決定	120
	● 永平寺と総持寺祖院参拝の旅	121
	● 善光寺海外留学僧派遣育英会の総会	136
	● 愛知学院長小出氏が顧問に就任	140
声(新企画)	142
善光寺ニュース	150
読者のたより	158

題字・さし絵
グラビア

伊藤三喜庵
田村 仁

卷 頭 言

今から四十二年前、サンフランシスコ対日講和会議の際、セイロン（現・スリランカ）を代表して出席したジャヤワルデネ前大統領（当時・大蔵大臣）は、

人はただ、愛によつてのみ

憎しみを越えられる

人は、憎しみによつては

憎しみを越えられない

と、『法句経』の言葉を引用して、連合国側に“寛容と愛”の精神で日本を擁護すべきだと強調し、ソ連などが提出した日本分割案に強力に反対し、さらに対日賠償請求権を放棄しました。

これは今日の日本の繁栄を考える時、忘れてはならない大事なことであり、一昨年鎌倉大仏の左側に同氏の記念顕彰碑が建立されたのもそのためであります。

このスリランカに善光寺海外留学僧派遣育英会ではこれまで二名の留学僧を派遣しておりますが、今回スリランカ上座部仏教の比丘を日本留学僧として採用しましたので、これを機に、相互理解を深め、今後の友好親善の方途をさぐるべく、昨秋スリランカを訪問しました。

さいわい、仏教界の最長老を顧問に推戴することができ、また大統領とも親しく面接の機会を得て、当育英会の事業を伝え、高く評価していただきました。これはまことに意義深い成果で、今後の明るい進展が期待されます。

次に、当育英会の顧問として、運営にいろいろお力添いを賜わりました、前大本山総持寺祖院監院鷲見透玄老師が昨夏ご遷化なされました。茲にご報告申し上げますと共に深く哀悼の意を捧げるものであります。

最後に、『成寿』の掲載内容について、いろいろご助言も頂戴してありますし、逐次向上を計って参ります。何卒よろしくご協力のほどお願い申し上げます。

合掌



明日を生きる

善光寺住職
黒田武志

青春の夢

私は一昨年、心身の健康保持のため、かねてから念願の断食だんじきをしました。断食をしたあとには栄養を適度に補給しなければならぬのですが、食へすぎてはいけないと思って、お粥かゆとお味噌汁を主に口にしていました。胡麻ごまなどを

飯にかけて食べると栄養がとれるのですが、それも我慢して玄米と海藻だけにしていたのです。こうしたペースで二カ月も続けたら、ガリガリに痩やせてしまいました。六十七キロもあった体重が現在は五十四キロ。実に十三キロも減ってしまったのです。

身みが軽くなったのはいいのですが、困ったこ

とにズボンはダブダブ、上着はブカブカになってしまいました。そのうちに「黒田さんは癌だ」という噂が立ちはじめたのです。噂とは恐ろしいものです。大変なことになった、と思つて鍼と灸を毎日続け、何とか体重はもちなおしました。まあ私の失敗談です。

この年になつてもこんな失敗をしている私ですから、僧侶の修行を始めたころは失敗だらけでした。きょうはその失敗しながらの修行の中から、私が得たものをお話して、若いみなさん方の生き方に少しでもお役に立てたらと思います。

私は栃木県大田原市にある寺で生まれました。兄弟は七人。何しろ男ばかりの兄弟ですから、両親はたいへん苦勞しました。寺は大きいのですが、経済的には決して裕福ではありませんでした。父親の教育方針も「学校には入れてやるが、卒業したらいっさい面倒をみない。自

立する道を探せ」というものでしたので、必然的に自分の将来を真剣に考えざるをえなかったのです。

しかし、みなさんも同じだと思いますが、進学先や就職先の選択は、青春時代の実に大きな問題であり、夢でもあります。私の夢は東京の大学を出て学校の先生になることでしたから、かなり一生懸命に勉強をしたつもりです。

高校三年生の夏休みに、二番目の兄が海外で布教活動にあたる開教師としてアメリカへ渡ることになりました。私は世界のあらゆる国で勉強してみたいという憧れももっていましたので、「兄さんがアメリカへ行くなら、僕も一緒に行きたい」と兄に頼んだのです。すると兄は「お前は坊さんが似合う。親父にもそのことを話してある。そのほうがいいよ」と言うのです。

そしてその意見に従い、僧侶になるために東京の駒沢大学に入りました。そこで四年間勉強

し、卒業してすぐアメリカにいる兄に手紙を出しました。すると、こういう返事が来たのです。

「大学を出たぐらいでは、アメリカ人に仏教を説けるものではない。せめて大学院を出ろ」。そこで大学院に進み修了した時点で、また兄に手紙を送りました。しかし「大学院で二年や三年勉強したところで何にもならない。坊さんは修行が必要だ。修行しろ」という厳しい返事です。

そこで横浜の鶴見にある曹洞宗大本山総持寺へ修行に行きました。修行といっても、世間的にみるとまったく下積みの仕事です。当番に当たれば起床は午前二時。みんなが寝ているあいだに雑巾がけをし、みんなが起きて坐禪する前に火をおこします。そのうえ古参の雲水の部屋を掃除し、火鉢に火を入れておかなければなりません。

早くアメリカへ行きたいという気持ちでいっぱいなのは、僧侶の心構えをつくる大事な初歩

昭和37～40年 総持寺において



の修行も、まったくやりきれない気持ちで、いやいやながら勤めていたのです。しかし、この修行を終えないと資格がもらえません。何とかがんばって半年で資格を得ましたので、また兄に「半年修行して一応かたちは整いました」と手紙を出しました。しかし「お前、半年や一年の修行で何ができるものか」と大目玉を食らったのです。そう言われてみればまさにその通りで、いやいやながら半年我慢して資格をもらったところで、何一つ身につけていないのです。さらに手紙には「永平寺えいへいじに行け」と書いてあるものですから、これまたいやいやながら行くことにしました。こんな気持ちで修行しても何にもならないのですが、そのころの私にはまだそれがわかっていなかったのです。

逃亡者

当時、私は東京・品川の桐ヶ谷に住み、そこ

から大学に通っていました。兄弟が順ぐりに東京の大学に進みましたので、父親がそこに小さな寺を建てたのです。寺といっても本堂が八畳、その隣に六畳間があるだけです。ほんとに小さな寺で、参拝者も少なかったのです。

あれはたしか九月のお彼岸に入った次の日でした。夕方になりまして、もう誰も来ないだろうと思って夕食の準備をしていたのです。そのときガラツと戸が開き、本堂へ人が入ってきました。誰かなと思いつながら、台所から出て本堂をのぞくと、男の人が坐ってご本尊さまを一心に拝んでいたのです。気になったので「どうしたのですか」と声をかけますと、いきなり「私は殺される」と叫んだのです。

これはただごとではないと思って、訳を尋ねました。すると、おもむろに事情を語ってくれました。「実はきのう、仲間とともにある家へ借金を取り立てに行った、いや、行かされた。と

ところが、その家には金目のものはなく、めぼしいものといえばテレビとタンスと子どもの机ぐらのものなんだ。仕方なく、それらの物を運び出すことにした。かわいそうにと思ったが、強引にトラックに積み込んだ。そのとき母親と子どもたちが口を揃えて『あんたら鬼^{おに}だ、狼^{おおかみ}だ』と叫んだんだ。そんななまで言われて生きていくのはまっぴらだ。そう決心して逃げてきた。つかまれば殺される。そこで和尚^{おしょう}さんに相談に来た」と言うのです。

私は大学院を出て半年足らずのころでしたから、どうしてよいのか見当もつきません。それで「殺されては大変だ。どうしよう」と真剣に考えたのです。そして言いました。「あなたを救うには警察の力を借りるしかありません。いますぐ警察に行くか、暗くなってからにするか、とにかく警察に行きましょう。」

ところが、その人は「警察には始終、迷惑を

かけようして、これ以上お世話になったのでは申し訳ないから、逃がしてくれ」と深刻な顔で合掌して頼むのです。そこで私も男気を出して「わかりました。まかせなさい。しかし、つかまって殺されたらどうします」と尋ねると、「それでもいい」と答えるのです。「殺されてもいいと言うのなら、あなたは本当に私に命をくれますか」と続けて言うと、「あげます」と言ってナイフを取り出し、「ここで死なせてくれ」と叫ぶのです。

しばらく二人で思案したあと「どこか行く当てがあるのですか」と聞くと、「北海道へ行きたい」と言うのです。そのころは東北新幹線もない時代で、北海道へ行くには夜行列車に乗って二日はかかります。その人はお金を持っていませんでした。そこで、お彼岸のお経料が三万五千円あったので、そこから私の生活費を差し引き、三万三千円を手渡しました。

着ているものもヨレヨレだったので、私のワイシャツとズボン、そしてコートもあげました。ちよつとダブダブだけど、袖を折れば何とか着られます。背広は無理かもしれないけれど、ないよりはましだと思つてふろしきに包んでやりました。仏さまからもお供物をおろして持たせました。

そのとき私は何かジーンとこみ上げてくるものがあった、「何か思い残すことはありませんか」と尋ねたのですが、「ありません」と答えます。さらに「ご両親は健在ですか」と聞きますと、「いる、名古屋に」と言います。そこで私は「あなたがこの世で最後に会う人は私かもしれません。あなたが殺されたら、私はあなたのご両親にお会いして事情を話してあげますから、ご両親の住所を書いておいてください」と半紙と筆を出したのです。すると正座して筆を握ったまま、しばし黙考したのです。人間、せ

つばつまつたときの心境はこういうものかと、私はその姿を静かに見ていたのです。

「名古屋市中区……中村……」と書かれた半紙を受け取り、「これは私が預かりますが、もう一つお願いがあります。あなたが今日まで生きてこられたのも、ご先祖さまのお陰なのです。そのご先祖さまにお礼だけは述べていってください」と言つて、「中村家先祖代々之精霊」と塔婆たぼに書いてお経をあげてさしあげました。その人も一心に手を合わせていました。そして陽の沈むのを見て寺を出ていったのです。その姿もまた印象的でした。ボロボロの靴をはいて、荷物を抱えてターツと出ていったのです。

そしてそれつきり何の音沙汰もなく、私は非常に心配していたのです。殺されたかもしれないという思いが胸をよぎりました。すると私は大変な罪を犯したことになります。逃がすのではなかったと後悔しました。そしてこのとき、

いつの日かきつと全国を行脚して、菩提を弔ってやらなければならないという決意を固めたのです。

実は「宗祖をとおして釈尊に還れ」というのが私の誓願に似た気持ちでしたので、藤井日達上人のお力で全国各地に祀られている仏舍利塔を巡拝しようと常々思っていました。それがこの人との出会いによって、実現する運びになったのです。

托鉢行脚

その決意を胸にしつつ、私は永平寺に向かいました。

さて、禅僧が修行する道場を僧堂といいますが、その僧堂に入れてもらうには、まず「旦過寮」に入らなくてはなりません。旦過寮というのは、いわば僧堂に入るための準備教育をするところで、朝の三時から夜の九時まで、十八時

昭和38年 歳末助け合いで市民に募金を呼びかける



間も坐らされます。一般には一週間か十日ぐら
いの期間ですむのですが、私は「こいつは生意
気だぞ」とマークされたのでしよう、二週間も
入れられました。

朝は三時半に「振鈴」といって、起床の合図
の鈴が堂内に鳴り響きます。洗面もそこそこ
直ちに暁天坐禅、引き続いて朝のお勤めがあり
ます。そして夕食が終わりですと、夜の八時か
ら九時まで坐禅堂で坐禅、その他の時間は且過
寮で坐禅という日課です。

こうして僧堂生活の準備教育を受けるので
す、何をすることも先輩は教えてはくれません。
すべて自分で覚えなくてはならないのです。そ
して少しでも間違いがあると、怒鳴りつけられ
ます。すべて自分で覚えなくてはならないので
す。食事の作法から大小便の仕方まで、こと細
かく規律が設けられているのです。

このままではだめだ、早く娑婆に出て勉強し

ないと時代に乗り遅れてしまう——こう思っ
ているうちに体調を崩し、「延寿堂」と呼ばれる病
室に入れられたのです。修行ができなくて仕
方がない、東京へ帰ろうと思ひ、永平寺を出
ました。

でもお金がありません。仕方がないので、福
井の町の中を「羯諦羯諦、波羅羯諦、波羅僧
諦」と般若心経を唱えながら、托鉢をして歩き
回りました。そして夕方になって福井駅に戻っ
てきました。ちょうどそのとき、プラットホー
ムで汽車の発車を知らせるベルが鳴ってしまし
た。そうだ、あの汽車に乗って東京へ帰ろう、
布施をしていただいたお金で、とりあえず行け
るところまで行こうと考えたのです。

駅構内にはそのとき、上りと下りの二本の列
車が入っていました。福井は僧侶をとてても大事
にしてくれる町ですから、改札にいた駅員さん
も、袈裟に草鞋姿の私が切符を持っていないと

わかっていながらも「すぐ乗りなさい」と通してくれましたので、慌てて列車に飛び乗ったのです。座席に坐ってやれやれです。そしてきょう一日托鉢して、みなさんからいただいたご喜捨を応量器から出して数えはじめたのです。すると何と六百八十円も入っていました。昭和三十八年の話ですが、何とか名古屋までは行けます。名古屋で降りて、また托鉢をさせていただけようと思っていたのです。

そのとき車内放送がありました。「この列車は富山経由の直江津行きです。」何と名古屋、東京方面とは逆の、新潟の直江津へ向かう列車に乗っていたのです。これは大変なことになったと思つて、車掌さんに聞いたのです。すると直江津に着くのは十時ぐらいとのこと。そのころは寒い時期で身体に悪いと思つて、富山で途中下車することにしました。富山にはそのころ、自分の寺ではなく、よその寺に用僧といつてお手

伝いをしている大学時代の後輩がいたので、その彼を訪ねてみようと思つたのです。

八時半ごろ富山に着き、歩いていきました。寺では九時になると「開枕」といってみな休んでしまいます。「ごめんください、ごめんください」といくら叫んでも、なかなか出てきてくれません。しかし他に行くところがないのですから、帰るわけにもいきません。しばらくして「おーっ」という声が出て、若い雲水が戸を開けてくれました。それが私の後輩の松本君だったのです。

ようやく草鞋を脱ぐことができました。そして松本君に事情を説明すると、「あす托鉢をされたらどうですか」と言ってくれたのです。そこで次の日、朝の九時から午後の三時まで托鉢をしたのです。

富山は仏国ですから、一円、五円、十円と、どこの家でもご喜捨をしてくれます。応量器は

ご喜捨でいっぱいになりました。応量器は食器ですが、托鉢のときはこれを捧げ持つて、ご喜捨を入れてもらうのです。帰つて数えてみましたら、八百円ぐらいあります。翌日も托鉢しました。やはりたくさんのご喜捨をいただきました。そこで千円札に両替してもらつて、仏さまにおあげしました。いただいたものは必ず、まづ仏さまにおあげして、それを仏さまからいただくのです。

さらに松本君に「せっかくここまで来たのですから、総持寺の祖院がある能登まで行かれたらどうですか」と勧められました。大本山総持寺はもともと能登にありましたが、九十五年前に焼失してしまつたのです。そのとき永平寺が福井の山奥にあつて、総持寺が能登の突端にある、これでは地理的に片寄りすぎている、梶いを転じて福としなくてはならないということ、八十年前に横浜の鶴見に移転したのです。

それで現在、能登にある総持寺のほうを祖院といひます。その祖院にお参りしようと思つて行きました。もちろん托鉢しながらです。

こうしたいきさつで、殺されたかもしれない男の人の菩提を弔うための托鉢行脚が始まつたのです。「念ずれば花開く」といひますが、念ずる心が深ければ、道はおのずから開けてくるものなのです。不思議なものです。

自己との闘い

私は能登半島を一周したあと北陸、山陰地方を巡つて九州の熊本まで行き、山陽地方を通つて京都に至りました。毎日、たくさんのご喜捨を受けました。でも、いいときはばかりが続きものではありません。三日も四日も雨が続きますと、誰にもご喜捨をしていただけません。そうしますと、お金がなくなつてしまふのです。

京都はご存じのように、寺がたくさんありま

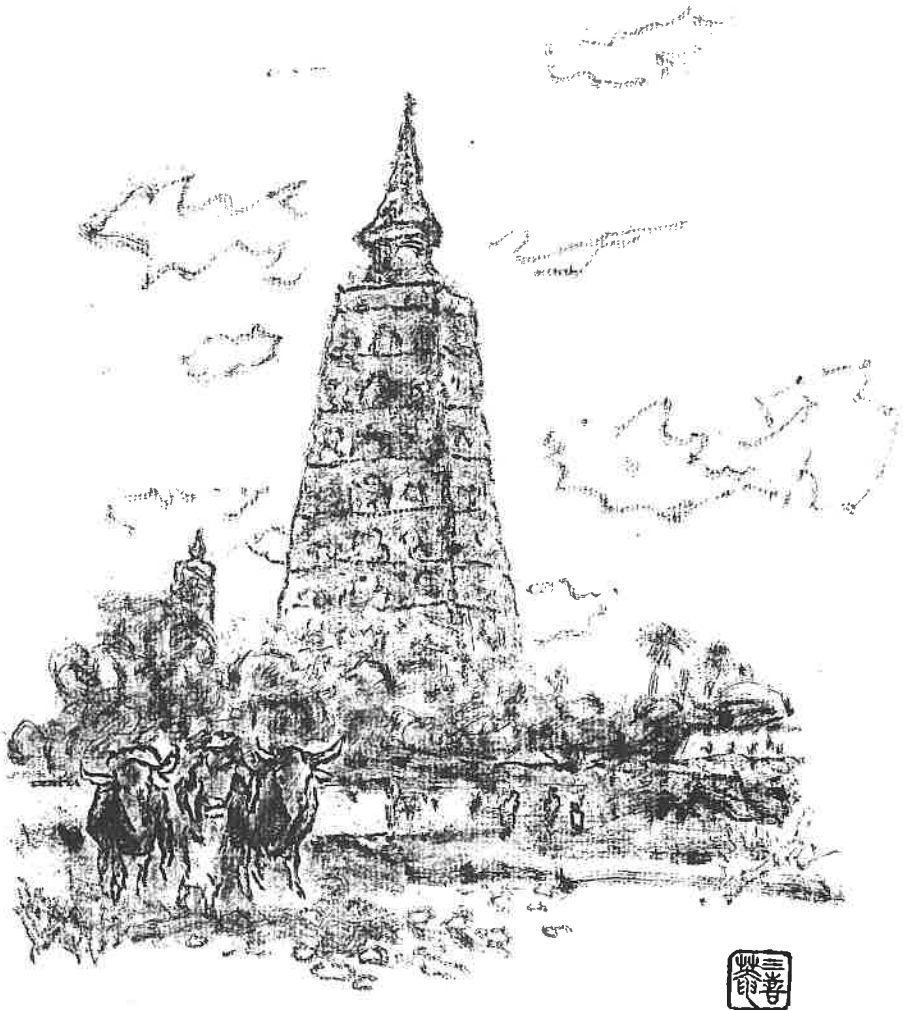
す。どこか泊めてくれる寺はないかと、あちこち探しました。ところが私は雨の日も風の日も托鉢を続けてきましたから袈裟はボロボロで、草鞋を履いているから足も汚れ放題で馬糞のような臭いがするのです。どこを訪ねてもいい返事はもらえません。仕方がないので、京都から少し離れた亀岡まで足を延ばしました。夜も八時半になっていました。三日も雨にあたっていますから、身体が冷え、疲れもたまっていたのです。網代笠をかぶり、杖をついてヨロヨロしていました。

もう歩くのも限界になったころ、やっと宿が見つかりました。「ごめんください、今晚泊めてください」と頼みますと、私があまりにも見すばらしい姿をしていたからかわいそうだと思っただけでしょう、「いいよ」という返事をもたらったのです。素泊まりの料金が二百五十円。そのとき私が持っていたお金は三百五十円です。宿代

を払いましたら、百円しか残りません。

「まず風呂に入らせてください」と宿のご主人にお願ひしました。「風呂？　いつ空くかわからないなあ」と言うのです。ということは風呂に入らせないということなのです。仕方がないから銭湯に行きました。当時、銭湯の料金は十六円。身体をきれいにして温まりましたら、今度はお腹が空いてきたのです。朝から何も食べていませんでしたので、お酒の一合瓶と十円のコッペパン一つと同じく十円のパターを買いました。残ったお金は二十五円。それを握って宿へ帰り、机の上に並べてみました。「いまの私の生命はたったの二十五円。何でこんなことをやっているのだろう。馬鹿だなあ」と自分で自分が情けなくなりました。

翌朝四時に起きると、また雨です。五時になってもやみそうにありません。六時になったら、さらに強く降ってきます。私はもう絶望感に陥



りました。二十五円では生きていけません。そこでしばし部屋の中で考えました。しかし、ない頭でもしぼってみるものですね。いい知恵が必ず出ます。私がそうですから。気がつきました。「そうか、なあんた」と思ったのです。私は僧侶です。僧侶の役目はお経をあげること、何もできなくても、まずお経をあげることだと気がついたので。簡単なことなのです。

そこで宿のご主人に「すみません、お経をあげさせてください」と頼み、お仏壇の前へ行きました。そして一生懸命にお経をあげさせていただきました。するとご主人が「雲水さん、お腹が空いているだろう」と言って、ご飯を食べさせてくれたのです。美味しかったですねえ。しかし、その満足感も束の間、私は宿のご主人にお礼を申し上げて、雨の中に飛び出してきました。網代笠に降りかかる雨が、しずくとなって応量器に溜まります。「ああ、こんなにご

喜捨がたまるといいのだが……」と思いながら、溜った水をこぼします。「羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦」と唱えては、水をこぼすのです。何を何回となく繰り返しました。

「羯諦羯諦」とは何かという、みんなて手を取り合って、悩み苦しみのない素晴らしい世界へ行こう、という意味なのです。ですが、私のことは誰も相手にしてくれません。立派な家の玄関に立っても、戸をピシヤリと閉められてしまいます。でも毎日毎日続けていると、腹も立たなくなってきたのです。

その日も朝から降り続いていた雨が、午後三時ごろにはあがりはじめました。さて、きょうの泊まるところをどうしようかと思案しながら歩いていると、女子校の前にさしかかっています。私がいま汚い格好をしているので、女学生たちは立ち止まって私を見つめています。ところが、ある一人の女学生が私の側へや

つてきて、応量器の中へ十円を入れてくれたのです。私は嬉しくなって、その場に土下座して感謝を申し上げたのです。

そうすると、周りにいた女学生たちが次から次へとご喜捨をしてくれました。応量器はたちまち、ご喜捨でいっぱいになりました。その瞬間、太陽の光がパット私の目に射し込みました。「そうだ、人間は簡単に死なないんだ」。私は思わず、天に向かって報告していました。何も不安に動ずることはない、仏さまに任せきつていけばいいのだ、と気がついたのです。それからというものは、怖いことも嬉しいこともすべて超越して、これでいいという心境になることができました。

こうしたいろいろな出来事を経験しながら、各地を行脚していたのですが、そんな中でも脳裏から離れなかったのは、あの「北海道へ行く」と言った人のことです。逃がさないで無理やり

に警察署に連れていけばよかった、悪いことをした悪いことをしたと後悔の念ばかりが起きて、お経をあげながら無事を祈っていたのです。

あるとき名古屋に足を踏み入れ、ご両親にお会いしようと思つて、紙に書いてもらつていた住所に向かいました。しかし、いくら探してもわからないので、交番に行つて尋ねたのです。ところが、その紙に書いてある住所はどこにもないのです。何とその人は詐欺師だったのです。自分はその人に対して悪いことをしたと思い、毎日一生懸命に供養をし続けていましたのに、何と騙だまされていたのです。

しかし、その詐欺師のお陰で、私は各地の仏舍利塔の巡拝ができたのです。騙されたお陰で、本当に尊い修行をさせてもらいました。私はこのとき呵か々かた大笑たしやうして、人生はこんなものだ、これが娑婆なのだ、と思いました。しかし、さすがに事実を知った瞬間には肩の力が抜けまし

た。いや全身の力が抜けたというのが偽らざる心境だったと思います。そしてここで、私の托鉢行脚は終わったのです。

年の暮れでした。そのとき三千円のお金があったので、それを朝日新聞社に持って行って、困っている人たちのために使ってほしいと手渡しました。手元に二十円残りました。十円のパンを一つ買い、最後に残った十円で電話をかけました。名古屋には三番目の兄のお嫁さんの実家があったので、東京へ戻るためのお金を借りようと思ったのです。しかしあまりに慌ていたので、電話番号を間違えてしまいました。仕方なく尋ね歩き、ようやく探しあてました。その家人から話を聞くと、アメリカから十年ぶりに帰国した兄が私を探しているというのです。

とにかくお金を借り、夜行で実家へ駆けつけました。そして兄たちがいる前で、こう言った

のです。「私は日本を一周してきました。ありとあらゆることをやってもきました」と威勢のいいことを告げたのです。すると大半の者は「いやあ、大したものだ」と褒めてくれたのですが、長兄だけは「お前、そんな大したことをしたのなら、ここに出してみろ」と言ったのです。ハッと思いました。出そうとしても何もないのです。そこで人生の修行の未熟さを悟ったのです。そして、これから明日に向かって真面目に一生懸命に生きようと、覚悟も決めたのです。それから修行のやり直しです。また総持寺へ行き、三年間の修行に入りました。

その総持寺で、私は実に素晴らしい出会いに恵まれました。大阪に「ナリス」という化粧品会社がありますが、創業者である村岡満義さんがあるとき、幹部社員を連れて総持寺に参禅されたのです。そのときの参禅指導係が私でした。若くて覇氣はきに溢あふれていたころですから、坐禅中、

姿勢の悪い人に遠慮会釈なく警策を当てました。

警策とは、坐禅中の僧の眠気や気の緩みを戒めるためなどに用いる棒で、長さは一・三メートルほどで、先のほうが板状になっています。

これには相手側も相当反発したようで、研究会が終わったあと私に向かって「会社に来て、参禅指導をしてほしい」と要請したのです。「よろしゅうございます」と返事して、約束の日時に参上したのですが、実はこれは私に対する仕返しへの参禅会だったのです。幹部社員が事前に申し合わせをして、全員が最初から最後まで警策を受けるために合掌しつづけていこう、そうすれば叩かなければいけないから、叩きつづける相手はきつと参ってしまうだろう、という作戦だったそうです。

何しろ全員が次から次へと合掌するものからです、私は休む暇もなく警策を当て、手には豆

昭和40年 インドの子どもたちと



ができて血は吹き出すといったありさまでした。それを見て村岡社長さんが幹部社員に注意をしたそうですが、この仕返しの坐禅会が逆に、私とナリスおよびその社員の方々を堅く結びつけてくれる機縁となったのです。

私は総持寺の修行を終えてインド仏跡参拝を思い立ったのですが、費用がありませんのでナリスに出かけ、村岡社長さんに「お金を貸してください」と頼み込みました。そのとき村岡社長さんは快く引き受けてくださったのです。私は天にも昇る喜びで、さっそく支度を整えてインドに出かけたのです。

無常の人生

いままでの話は私の体験談でありました。次には、いろいろな宗教、特に仏教に關係のある話を中心に進めたいと思います。

お釈迦さまは小国ながらも一国の王子として

生まれ、幼少のころから何一つ不自由のない生活を送っていました。内省的で感受性が強く、動物や植物にまで優しい思いやりを示すのでした。こうしたお釈迦さまの姿を見るにつけ、父王は、もしかしたら出家するのではないだろうかと不安の念を抱いたのです。そして何とかお釈迦さまの心を紛らわせようとして、夏、冬、雨期それぞれの季節に応じた住み心地よい三つの宮殿を造って住ませたり、多くの美女を側近くにはべらせ、歌や踊りで、お釈迦さまの心をなるべく外に向けようとはしました。

ある日お釈迦さまは、城を出て郊外の園林で遊びたいと申し出られました。お釈迦さまに物を深く考えさせまいと常々心を砕いていた父王は、快くお釈迦さまの希望を聞き入れて多感なわが子を考え込ませるようなことが起こらないように各方面に気を配りました。

ところが皮肉なことに、お釈迦さまが馬車に

乗って東の門から出ますと、間もなく白髪の老人に出会いました。身体はすっかり瘦せ衰え、杖にすがって喘ぎ行くその姿を見て、お釈迦さまは「あれはどういう人か」と馭者ぎよしゃに尋ねました。「老人です。生あるものはみな、この苦しみを免れることはできません」と言う馭者の言葉に、若いお釈迦さまは心を暗くし、園林で遊ぶ思いも消え失せ、早々に城に帰って物思いに沈むのでした。

それで次に出かけるときに、南の門から城を出ました。このときは苦しみもだえる病人の姿を見、馭者の「どんな人でも、この苦しみから逃れることはできません」と言う言葉を聞いて、お釈迦さまはまたまた憂いに沈むのでした。

そして三度目、今度は西の門から出たお釈迦さまは、ここで死者の葬列に出会い、肉親の嘆き悲しむ姿に接し、生あるものは必ず死ななければならぬことを知り、居ても立ってもいら

れない苛立ちいぢにかられ、直ちに城に帰って思い悩むのでした。

このように老、病、死の苦しみを初めてまともにごらんになったお釈迦さまは、残された北の門でいったい何を見たのでしよう。お釈迦さまはここで、やすらぎと静寂に満ちた、見るからに気高い姿の出家修行者に出会いました。そして深く心を打たれ、「世の中にこれに勝る者はない。私も出家して道を学ばなければならぬ」と、心密かに出家に思いを馳はせたのです。

人間の苦しみの代表的なものは、生・老・病・死の四苦です。なぜ苦しまなければならぬのでしょうか。その根源は無常です。無常というのは、この世のすべてのものは生まれ、壊れ、滅して何一つ常住不変のものはないということ。人生はまことに無常迅速で、紅顔の美少年はあつという間に白髪の老人となり、健康な身体は病魔に冒されて不随となります。命は草

葉に宿る露のごとくもろいのです。従って人生をまともに深く見つめる人は、人生のはかなさ、たよりなさに苦しむのです。

その苦悩を知り、それからの解脱（開放）を求めた人類最初の人、それがお釈迦さまです。

お釈迦さまが四カ所の門から出て、人生の苦悩に直接触れられた「四門出遊」の意義は大きいのでして、これがやがてお釈迦さまの出家の遠因となるのです。

お釈迦さまは、二十九歳のとき、最愛の妃と子どもを残して出家され、六年のご修行を経て三十五歳で悟りを開き、八十歳でお亡くなりになるまで、インド各地を巡錫して説法教化に終始されたのです。

私は、お釈迦さまの国インドに出かけ、仏跡巡拝をして、お釈迦さまのご生涯を思いながら、つくづく考えさせられました。「諸行無常」、つまり形あるものは時々刻々変わっていきます。

誰にでも青春はあります。私にもありました。しかし、青春は二度と戻ってきません。ですから素晴らしいのです。それゆえ素晴らしい本当に悔いのない人生を送らなくてはなりません。

徳川家康の十番目の子どもといわれる頼宣は、十四歳のとき大阪夏の陣に巡りあいました。もちろん初陣です。頼宣は先手の大将にしてほしいとせがんだのですが、家康は許しませんでした。やがて合戦の火ぶたが切っておとされ、頼宣は先手の大勝にしてみらえなかつたので、地団駄踏んで悔しがりました。その様子を見た老臣が「殿、殿はまだ十四歳でございます。これから先、合戦は幾たびもございます」と言つて慰めました。すると頼宣はその老臣をはつたとにらみつけ、「頼宣に十四歳のときが二度あるか」と叱責したのです。

家康はこれを聞いて、「いまの一言、槍一番にて候」と褒めたということですが、頼宣の「十

四歳のときが二度あるか」という一語は、ただいまの一瞬に武人としての生命を見出したものと言えます。

時は今 処ところあしもとそのことに打ち込む命
永遠のみ命

という東京・芝の増上寺の椎尾弁匠上人の歌があります。今日ただいまの一瞬に、一生懸命に打ち込んでいけば、無常の世の中にありながら、それは永遠に尽きることのない仏さまの大生命に通うものなのです。

また「人間万事塞翁が馬」という中国の諺ことわざがあります。国境近くに住んでいる老人、塞翁の飼育していた馬が逃げていってしまいました。人びとが慰めると、塞翁は「これがまた、どんな幸いにならぬでもない」と言って平気でいました。すると二、三カ月して、その馬が駿馬しゅんまを引き連れて帰ってきたのです。人びとがそれを喜ぶと、塞翁は「とんだ災いとならぬものでも

ない」と言いました。しばらくすると、塞翁の息子が馬から落ちて足を折ってしまいました。

人びとがまた慰めると、塞翁は「これが幸いにならんともかぎらぬ」と言いました。それから一年ほどして、この地方に戦争が起りました。

若者はみんな召集され、ほとんどの者が戦死したのですが、塞翁の息子は足の怪我けがから徴兵を免れることができたため無事でした。

つまり人生の吉きつ凶禍きうくわ福は定めがなくて、災いが福に変わり、福が災いとなることもあるということです。これもまた無常の一樣相です。ですから幸福の絶頂にあっても有頂うちやうてん天にならず、不幸のどん底にあっても非観せず、「時は今 処あしもとそのことに打ち込む命 永遠のみ命」で生き抜くことが大事なのです。

私はこの故事を、人生そのときを仏さまのお命を生きさせていただく心で一生懸命に生きていけばいいのだ、ととらえているのです。する

と不思議に心は絶対に通じるのです。

心のエネルギー

インドで仏跡を巡拝して人間の真実の生き方に眼を開いた私は、帰途タイに立ち寄り、ここで上座部仏教の僧侶として一年間の修行生活に入りました。上座部仏教は日本の大乘だいじよう仏教と違って、いわば戒律仏教で、僧侶は二百二十七もある戒律を固く守って生活しています。

例えば正午を過ぎると翌朝まで食事をしてはならないとか、女の人の衣服にお袈裟の端が触れるだけでもいけないとか、女の人から物を手渡して貰ってはいけないとか、いろいろ厳しい戒律かいりつがあり、それを固く守って生活するのですが、人間やる気になりさえすれば苦行も苦行でなくなりません。

こうしてタイでの修行を終えた私は、今度はアメリカの人にも仏教を説けるだろうと自信を

得てアメリカの兄に連絡を取り、兄の主宰する禅センターでアメリカ人とともに参禅生活を二年間行ないました。そしてアメリカから帰り、横浜市港南区日野町に善光寺を開創し、ナリスの村岡社長さんを開基さまにお迎えいたしました。思えば私のこれまでの歩みは、村岡社長さんに対する報恩行でありました。

つくづく思いますが、人間、恩を忘れては禽きん獣じゆうにも劣ります。恩を感じ、恩に報いる心で生活を築いていけば、必ず道は開けてくるのです。

昔、インドにナンダという、とても貧しい生活をしていたおばあさんがいました。八十歳になつて生おい先も長くはありません。そこでせめて一度、祇園ぎおん精舎しょうじやというところに行つて、自分を生み育ててくれたいまは亡き両親のために明かりを灯し、お釈迦さまのお話を聞いて、感謝の意を表わしたいと思つたのです。

ようやくわずかなお金を得て、油屋に行きま

した。しかしそのお金で買えるのは、わずかな量です。油屋の主人は「たったこれだけの油をどうするのですか」と尋ねました。ナンダはその願いを伝えると、油屋の主人は油の量を増して施してくれました。

ナンダは歓喜して一燈を点じ、仏前の多くの燈の中に献じました。夜が明けて、他の燈明はみな消えましたが、ナンダの小燈だけは赤々と燃え続けたというのです。

この物語は「長者の万燈より貧者の一燈」といわれ、真心のこもった寄進はたとえわずかでも尊いし、物の多少よりも真心が大切だということを教えています。

いま一つ中国の話をしみますと、黄檗宗を開いた希運きうんというお坊さんがいます。この希運きうん禅師のお母さんは、たった一人の息子に、一生懸命に修行して世の中に役立つ人間になりなさい、と僧侶になることを勧めました。ところが僧侶

は毎日厳しい修行をしなくてはなりません。息子に勧めはしたものの、お母さんは心配の毎日です。とうとう心労のあまり目が見えなくなつてしまいました。

それでもなお息子のことが心配になって、二十年の月日が経ったある日、家の前に看板を出したのです。看板には「修行中のお坊さんはわが家に泊まってほしい」と書いてあります。僧侶は草鞋を履いていて足が汚れていますから、泊まる場合には足を洗わなければなりません。希運きうん禅師のお母さんは僧侶たちの足を洗わせてもらっていたのです。なぜそんなことをしたのかと申しますと、希運きうん禅師の右足にはこぶがあつて、目が見えなくても足に触れば自分の息子とわかるからです。

たまたま希運きうん禅師がわが家の前を通りかかりました。どうしようかと思案しましたが、ひと目母の姿を見たいと思い、「ごめんください」と



声をかけたのです。しかしお母さんはもう二十年ものあいだ息子の声を聞いていませんから、わが子と気がつきません。希運禪師は足を洗ってもらいました。ところが右足のこぶを気付かれてはと思い、左足を二度洗ってもらったのです。

そしてわが家に泊まらずに密かに合掌して立ち去り、そそくさと渡し舟に乗ってしまいました。修行中の希運禪師にしてみれば、愛着の情にほだされて修行の妨げとなることを恐れたからでしょう。一方、近所の人から「あの人希運さまだよ」と教えられた目の不自由な母親は、「希運、希運」と叫びながら息子の後を追いました。そして誤って川に落ちてしまったのです。

雨が降っていて川は増水していたので、すぐに流されてしまいました。希運禪師はお母さんを探しましたが、見つかりません。松明たいまつを掲げて、夜中も一生懸命に搜索しました。しかし見

つけ出すことはできませんでした。

希運禪師は悲嘆のあまり大声で「一子出家すれば九族天に生ずと、若し然らざれば諸仏は妄語をなす」と唱えました。つまり一人が出家すれば、両親だけでなく親類縁者ごとごとくが救われるといわれているが、もしそうでなかったら仏さまは嘘を言っていることになると言い、そして「わが母多年、自心に迷う、如今花はひらく菩提林、当来、三会、もし相値わば、帰命大悲觀世音」と唱えて松明を川の流れに向かつて放り投げると、その消えゆく煙の中に母親が昇天する姿を見た、と伝えられています。

「お坊さんというのは、ずいぶんむごいことをするものだ。それではお母さんがあまりにもかわいそうだ」と思われる方があるかもしれませんが、本当に一生懸命に生きようとすれば、お坊さんならずとも、やはりこのようにならざるをえないのです。

うら若い女性の話をしてしましよう。ある学

校で、一学期の終業式の日、その年に新採用になったばかりの若い女性の先生の辞任式が行なわれました。「私はマラソンで日本代表になりましたので、教員を辞めます」と、驚く生徒たちにこの言葉を残して、着任後わずか三カ月で教壇を去ったこの先生は、中学二年のとき父親を亡くし、母親の細腕一つで育ったのでした。ようやく一人前になってホッとしていたその母親は、娘のこの突然の退職を許すはずはありません。娘もまた母親の気持ちを考えないではなかったのですが、マラソンへの夢を捨てることはできませんでした。ろくにあいさつも交わさず、まるで夜逃げでもするかのように、娘は許さない母親の許を去っていきました。

これは平成三年の夏、東京で開かれた世界陸上競技大会の女子マラソンで予想をはるかに超えて、見事銀メダルの栄冠に輝いた山下佐知子

選手の実話です。

京セラに入社して陸上競技部に所属した彼女のマラソン修行が始まったのですが、郷里の母親とは電話もせず便りも出さず、一言も口をきかない断絶状態が長いあいだ続いたといいます。その二年後の春、名古屋国際マラソンに初めて出場して四位に入賞し、平成二年の北海道マラソンでは二位、その翌年春の名古屋国際マラソンでは一位と、マラソン出場五回目で初優勝を飾り、世界陸上の女子マラソンの出場権を獲得したのですが、母への恩愛を断ち切った五年間のマラソン修行が、並大抵なみなたてのものでなかったことは想像に難くかたありません。しかし報われるときが来ました。彼女の心が母親に伝わったのです。

東京の会場に応援に駆けつけたお母さんは、スタートとゴールは会場で、折り返し点には品川まで電車で行き、帰りは電車の中で両手を合

わけて食い入るようにラジオにしがみついていたという事です。一時はわがままな娘の行動に腹を立てたお母さんだけに、その喜びはその分だけ倍加されたことでありましょう。

希運禪師は生前の母親を喜ばすことはできませんでしたが、その死を即成仏に導き、九族をして天に生ぜしめる報恩行を成し遂げたのです。「志あるところに道あり」といい、道はおのずから開けてくるのです。

アメリカにカーネギーという人がいました。大変な成功者で、カーネギーホールという文化の殿堂を造られた方です。

彼は最初ボーイラーマンの職に就いていました。その後、郵便配達員に転職しました。自分の受け持ち区域のことについては、何を尋ねられてもすべてわかっていたそうです。その真面目な勤務態度を見続けていたある人に「あなたのように努力をする人が、これから発展してい

く電気の技術を習得したならば、必ず世界一の成功者になる」と勧められて、彼は学校に入り技術を学びました。そして製鉄業を興し、世界一の富を成したのです。「石の上にも三年」といいます。三年という月日は実践力の強さ、継続の度合いを測る最小の目安で、三年続かないようではお話にならず、実践は三年以上の継続によって初めて実を結ぶのです。生命力を一つのこと集中し、これを積み上げていくところに、成長が約束されるのです。

カーネギーは人のために、人類のためになるような努力をコツコツと重ねていったのです。そういう素晴らしいエネルギーを、私たちはみなもっているのです。そのエネルギーを有効適切に活かしたいものです。そこに人間としての希望の未来があるのです。

日常の五心

私が住職を務める善光寺はゼロからの出発でしたが、お陰さまで順調に発展してまいりました。それで開創十五周年を期し、報恩行の一端として海外に留学僧を派遣して人材の育成を図り、仏教の振興、世界の平和、人類の進運にいささかなりとも貢献しようと思い、「善光寺海外留学僧派遣育英会」を設立いたしました。

最近の日本は、暮らしは快適になっていく一方ですが、いつしか感謝の心を忘れ、自分さえよければという自分本位の発想が強くなり、共に生きる、共に栄えるという大事な生き方を忘れて、自己の利益だけを追求するようになってきました。心と心の触れ合いも薄れて、対人関係はギスギスしているようです。

そこで「これではいけない。仏さまのお心とお徳を伝えなければ、日本だけでなく世界も破

滅の道を辿っていくにちがいない。仏教による人づくりを進めることこそ、私の使命ではないか。お釈迦さまのみ教えを世界に弘めよう、情熱をもって布教する宗教者を育てよう」という大誓願を立てたのです。

正直なことを申し上げて、私には財産など何一つありません。そのとき立正佼成会の「一食いちじきを捧げる運動」の展開にヒントを得たのです。

ご存じでない方もおられるかと思うので申し上げますと、立正佼成会では、信者の方々が月三回食事を抜き、そのお金をアジアやアフリカの恵まれない人びとに献金しようと「一食を捧げる運動」を展開しているのですが、私はこの運動を真似て、檀家のみなさんにこう呼びかけました。

「どうか、私のこの誓願を叶えさせていただけないでしょうか。毎日の食事のひと口分を辛抱して、そのお金を私にいただきたい。そうすれ

ば大勢の人が助かるのです。どうか私を助けてほしい。お力をいただきたい」と。もう理屈や理論を超えて、ただただお願いするだけでした。

一口為断 一切悪 二口為修 一切善 三
口為度 諸衆生 皆共成 仏道

これは私たちが食事を頂戴するとき、「五観の偈」の次に唱えるものです。「ひと口お食事をいただいたなら、あらゆる悪いことはしない。ふた口食べたら、よいことはどんなに小さいことでもする。三口食べたら、生きとし生けるものをことごとく濟度し、みなともに正しい仏の道を成就する」ことを誓うのです。そういう誓願をもって、食事をいただくのです。曹洞宗では、毎日の食事も大切な仏道修行ととらえていますので、ひと口分のお金を献上することは、まことに尊いことなのです。

毎食わずかひと口分という十円程度のお金です。一年で一万円ほどですから、これは容易に実行できることですので、賛同者の輪は広がっていきましました。

この私のささやかな歩みは、昭和六十二年、フランスのパリ第一大学で開かれた第二回日仏セミナーにおいて発表する機会を与えられ、お陰さまで大きな反響を呼びました。

こうして檀家の方々の協力によって発足し運営されている「海外留学僧派遣育英会」は今年で八年目を迎え、昭和六十年から毎年留学僧を派遣しています。現在、インド、スリランカ、タイ、韓国、アメリカ、イギリス、フランスに留学中で、さらに中国および韓国からの人たちが日本へ受け入れてあります。日本人だけでなく外国人を含め、九カ国に三十四人を派遣しています。

派遣はまだ七回ですから、その力はまだ微々

たるものですが、「継続は力なり」で、十年二十年の後には素晴らしいパワーを發揮することでありましょう。いや、今日すでにその兆候が出てきました。

フランスから来日して禅修行に励んだバシユ・ルース・浄信じやうしんという尼僧さんが修行を終えてフランスに帰り、一昨年からフランスに禅道場を開設する準備を進めていましたが、このほど開設の目安がつかしました。まことにうれしいことでもあります。

仏教は転迷開悟てんめいかいご、迷いを転じて悟りを開く教えであります。そして迷いとは、自分中心のものの方、生活態度から生まれてくるものです。ですから、己を空しゅうして生きることが悟りに至る道です。

道元どうげん禅師ぜんじが次のような言葉を残されています。

「仏道をならうというは、自己じこをならうなり。

自己をならうというは、自己をわするるなり。自己をわする、というは、万法に証せらる、なり。万法に証せらる、というは、自己の身心しんしんおよび他己の身心たごのしんしんをして脱落せしむるなり」

これをわかりやすく言うと、仏法を学ぶということは自己を学ぶということであり、自己を学ぶということは無我になることであり、無我になるということは周囲のものと同調することであり、周囲のものと同調することとは自分と他人の分け隔てをなくすことである、ということことです。

自分を投げ出して無我になれば、相手と一体になることができます。それは難しいことではありますが、簡単にまとめるならば「日常の五心」といって、することは次のことだけでよいのです。

一、すみませんという反省の心

一、はいという素直な心

一、お陰さまという謙讓の心

一、私ががしますという奉仕の心

一、ありがとうという感謝の心

これはみな自分を投げ出して無我になったところから生まれてくる心であり、実践であります。この中の一つでもいいのですから、実践してみてください。きつと人生は変わってきます。明るくなってきます。

そして仏教について勉強したいという気持ちがありましたら、私の寺を訪ねてきてください。困ったときでも結構です。いつでも寺に訪ねてきてください。お待ちしています。みなさんは今後の世界を担う尊い命なのです。今後の大いなるご健闘を祈っています。

（神奈川県港南警察署で行なわれた若年者特別講習会の講演に加筆）





スリランカ訪問記

善光寺海外留学僧派遣育英会
常任理事

佐藤俊明



コロンボまで

十月二十六日、月曜日、快晴・無風・適温、まさに「いい日旅立ち」である。

途中クルマの渋滞もなく、予定より早く成田空港に着く。集合時刻まで間があるので、「ツアー確認書」を取出して見ると、まず、ツアー・ネーム「黒田パーティ・スリランカ・ツアー」とある。

善光寺海外留学僧派遣育英会ではこれまでス

リランカに二名の留学僧を送ったが、今回、愛知学院大学院に在学中のスリランカ比丘を留学僧に採用することになった。この機会にスリランカとの親善友好を深める途を模索しようではないかと、黒田理事長と常務理事の私の前々からのコンビに、今回は顧問の伊藤喜三郎先生が加わって三人がツアーを組んだ。それが黒田パーティである。

ツアー確認書にひととおり目を通し終って、
「もうそろそろ到着されたかも知れん」と席を

立ってエアランカ航空の受付近くに足を運ぶと、黒田理事長と伊藤先生夫婦の姿が見えた。挨拶を交わして、

「伊藤先生、奥様も一緒にですか」と問うと、「いや、ぼくが『ちよつと淋しいねえ』といったら、『しょうがないわねえ。では送ってあげよう』と、急にここまで出て来たんですよ」と。

「なるほど！ 燃えてるわけだ」と思ったのは、いま読売新聞朝刊に津本陽の「万次郎の生涯 椿と花水木」が連載されており、その挿絵、「伊藤三喜庵」とあるが、三喜庵とは実はほかならぬこの伊藤喜三郎先生なのである。毎日夕方に作家の原稿が届き、夜十時過ぎから絵を描きはじめ、翌朝バイクの集配に渡すという生活がすでに五カ月も続いている。八日間も海外に出るとなると、おおむねの筋書は承知しても、前以って描いておくんではその日その日の文章にびったり合った絵となるかどうかは保証の限

りではない。

「十六、七枚描いておきましたよ。力を入れて描いて来たから大丈夫ですよ」と。

これが日本人の平均寿命を二つクリアした人の話である。燃えてなくては出来る仕事ではない。

三人そろったので早速荷物積み込み手続きにはいる。飛行機はコロンボ直行、エアランカ四五五便、十三時五分発。この飛行機は日曜日の夜コロンボを飛び発って月曜日の十一時五分成田に着き、二時間翼を休めてまたコロンボに向かうので、私たちの帰国は次の月曜日十一月二日となる。

たった二時間だけの休憩では準備も整わなかったのか、離陸は一時間近くも遅れたようだった。

上空に達して間もなく飲み物に続いて食事が出た。「アジア系の航空会社の中では機内サービ

スもい」と案内書に書いてあるとおり、機内食はなかなかいい。食事終つて時計を見ると午後三時三十分。日本、スリランカは時差三時間三十分なので、スリランカ時間でいうとちょうど正午。正午といえば私たち空港ラウンジでコーヒーを飲みながら搭乗開始を待っていた時刻なので振り出しに戻った感じがしなくもない。いまはいったい何処にいるのだろう。恐らく台湾上空あたりか。行けば行くほど遅くなる。なんだかタイム・スリップを味わう旅になりそうな気になる。

食事が済むと、アルコールがまわってきたせいか機内は途端ににぎやかになった。座席で隣同士話し合うもの、座席を立て話し合うもの、まさに「ふれあい広場」といった風だった。こうした雰囲気の中で、パナガラ・ウパティッサ師と会えたのはまことに有難い仏縁だった。この人は駐日スリランカ比丘の代表であり、イン

ド大菩提会の日本支部事務総長だった。

黒田理事長は育英会の資料を手交し、スリランカ訪問の目的を熱っぽく説明した。師も深く感じ入った様子で、滞在中の日程の消化に全面的に協力する旨約してくれた。

遅れて離陸したのであったが予定より少々早く七時十分(日本時間十時四十分)、スリランカの空の玄関カトウナーヤカ空港に着いた。

空港には遠藤先生ご夫妻が出迎えてくれた。

遠藤先生はコロンボ在住十六年、「仏教のスリラン化」を中心テーマとして研究に精進され、ケラニヤ大学で仏教学大学院講師としてパーリ学を担当しておられる新進気鋭の学者である。奥さんはスリランカの方で、第二回留学僧中野良教師はこの遠藤夫人にパーリ語と英語を学んだという。

空港からコロンボまでは三十二キロ、迎える車に乗ってホテルに着いたのが九時過ぎ、日本

時間ではえば午前〇時を過ぎているので、さすがに瞼が重くなる。

遺跡巡拝

スリランカというところ、シンハラ族とタミル族との争いが一時はげしかったことを思い出す。シンハラ族は国民の約七割でおおむね仏教徒であり、タミル族は二割弱でその多くはヒンドゥ教徒である。

紀元前五百年頃、アヌラーダプラ一带はヴィジャヤが統治していた。彼はシンハラ族の先祖といわれている。

仏教は紀元前二四七年六月の満月の日、インドの仏教王アショーカ（阿育王）の息子マヒンダによってこの王朝にもたらされたと伝えられている。また、アシヨーカ王の王女マヒンダの妹サンガミッタが、インド・ブツダガヤの菩提樹（その木の下で釈尊が悟りを開いた）の分け

枝をもつて来たのもその頃で、その菩提樹はブツダガヤの菩提樹と同じようにいまも青々と茂っている。

仏教はこの国の全域にひろまって今日に及び、タイ・ミャンマー（ビルマ）など東南アジアの各地に伝播するまでに成長を遂げ、シンハラ人の間で精神的支柱として定着し、仏教はほぼ国教化している。

それだけにこの国の人々は古い仏教遺跡の現在することを無上の誇りとし、これが保護に力を注いでいる。

仏教遺跡は全島いたる処にあるが、中でもスリランカの最中央部、アヌラーダプラ、ポロンナルワ、キャンデイの三都市を結んだ三角形の内側は、世界有数の大遺跡群が現存する地であり、「文化三角地帯（カルチュラル・トライアングル）」の名をもつて広く知られている。

ここにある遺跡の多くは、その規模、歴史的

及び美術的価値において非常に重要なものであり、さらに注目すべきは、これらの遺跡が、単に参観だけではなく現在でも敬虔な礼拝の対象となつてゐることである。

遺跡は紀元前三世紀頃から続いた歴代の王朝が造りあげてきたものでそれぞれ特色があり、アヌラーダプラのように、はじめ北にあつた都が、インドからの侵略者によつて逐次南下を余儀なくされ、次々と遷都を続けたその跡を刻んだものでもある。そしてそこにはいろんな伝説が語りつがれ、興味津々たるものがある。

その物語の一例を示したものが文末に掲げる「シーギリヤレデイの誘い」である。

遺跡巡拝は北へ行つて南下しよう、というところでホテルを出た車はまず途中ケラニヤ大学に立寄つた。この大学には前述の遠藤先生ご夫妻が奉職しており、また第二期留学僧の中野良教師はここで五年間学ばれたし、さらに育英会講

師森祖道先生が一昨年七月から九月までパーリ学仏教大学院に客員教授として招かれており、縁の深い大学だからである。

ちょうど登校時で、学生が三三五五校門をくぐつていたので、いっしょにカメラに納まつてもらつたりしたが、実に素直ないい青年たちだつたことが特に印象深かつた。

彼らと別れて車は一路北上し、十時過ぎ、巨象が水を浴びている池のほとりのレストラんで休憩をとつた。

いま、池と書いたが、スリランカに来てまず気付いたことは池が多いことだつた。これは、古来歴代の王朝が大規模な灌漑用貯水池を造り、水路を整備し、農業の振興につとめて来た跡である。

シーギリヤのカツシャバが父王の王座を奪い取り、「隠してある財産を全部出せ」と迫つたとき、父ダッセナは無言でカラヴェヴァ貯水池に



カッシャバを連れて行き、貯水池を指さし、「これが私の財産のすべてだ」といって息子に殺されてしまうのだが、この一言によってでも、彼らがいかに灌漑に力を注いでいたかがわかる。そして今日も多分にその恩恵に浴しているのである。

さわやかな木蔭で巨象の水浴を眺めながらお茶を一服してまた北上を続け、午後一時過ぎシーギリヤ・ビレッヂに着く。昼食をとって休憩。暑さを避けて四時過ぎシーギリヤ・ロックに登り、七時少々前に帰る。(文末の物語を参照されたい)

夕食の時、四人の楽士がそれぞれ楽器をかきならし、歌をうたって各テーブルを流してまわった。興にのつた三喜庵先生、ナプキン・ペーパーにスケッチをはじめた。黒田理事長また得意の美声で楽士に和したため、ホール中の注目を集め、「愉快な日本人トリオ」になった。

翌朝、スラリンカ最古の都アヌラーダプラに向かう。かつての繁栄を象徴するかのように町のあちこちに点在するダゴバ（パゴダ）は天にそびえ、数々の彫像はみな柔和なほほえみをたたえている。

次に、阿育王の王子マヒンダがアヌラーダの王に仏法を伝えたという土地、王子の名に因んで名付けられたミヒンタレーはぜひ巡拝したいところだったが、時間の都合上割愛せざるを得ず、釈尊の髪を祀っているという。山の上のダゴバ、マハ・セナ大塔を遠く望み見てポロンナルワに向かった。

ポロンナルワは十世紀から十二世紀にかけてシンハラ王朝のあった都で、その全盛期には、タイやビルマからも僧侶が訪れるほどの仏教都市だったという。客殿跡もあれば閣議場の柱のレリーフ、裁判所跡なども残っている。

ここで有名なのはガル・ヴィハーラ（寺）に



ある仏陀釈尊の坐像・立像・涅槃像である。特に涅槃像は、「應に度すべき所の者は皆已に度し訖つて、沙羅双樹の間に於いて、將に涅槃に入りたまわんとす。この時中夜寂然として声無し」と遺教經に述べられてあるとおりの穏やかな表情で実に素晴らしい。

さて、涅槃像のわきの立像は、従来阿難尊者とされてきた。両手を胸に合わせているので、お釈迦さまの涅槃に接し、じつと悲しみをこらえている姿に見えなくもないし、そのように説明されてきた。しかし最近これは阿難像ではなく釈尊像だという反論がある。私もそのように拝観した。その理由は、両手を胸に合わせているのは經行の際の捐手（叉手）の変型であり、眼は四十五度の角度で大地に視線をおとしており、足は左足が半跌倒に出ており、而も仏さま以外に乗ることのない蓮台に立っておられるからである。

涅槃像の前を立ち去り難い思いであとにしたのは日も暮れかかってからだだった。車は既舎に向かう悍馬のように疾駆したが宵闇迫り、真暗闇の中を走ること二時間、八時過ぎシーギリヤ・ビレッヂに着いた。ホテルの支配人やコック長など遅く帰って来た「愉快な日本人トリオ」を心から歓待してくれた。

仏跡巡拝第三日目。ダン普拉の石窟寺院に向かう。ここにはスリランカ最大の石窟寺院がある。それは高さ約八十メートルある岩山の頂上近くの洞窟寺院で、洞窟は五窟に分かれ、百体以上の彫像や塑像がならび、天井および壁画にはくまなく壁画が描かれてある。

修行者が悟りを開こうと瞑想を重ねていた自然の洞窟に、紀元前一世紀の頃から壁画が描かれ、仏像が彫られ、今世紀のはじめまで二千年にわたって掘り続けられてきたというもので、すべては仏陀釈尊像であり、スリランカの人び

との釈尊に対する信仰敬慕の念の強さがうかがわれる。

午後キャンデイのホテル・トパスに着く。黒田理事長は休む間もなく、パナガラ・ウパティワサ師と連絡のため、ショーカンジ幼稚園におもむく。

キャンデイの町は標高三百メートル、なだらかな山々に囲まれた狭い盆地にある。前述のように北に栄えたシンハラ王朝が、インドからの侵入者に追われて南下し、最後に辿り着いたのがこの地で、人口わずか八万のこじんまりした町である。ここに有名な仏歯寺がある。

四世紀のはじめ、インドから運ばれた釈尊の左の犬歯が王権の象徴として代々継承され、四百年前の寺にもたらされ、仏歯寺と呼ばれて今日に至っている。いよいよ明日仏歯寺参拝である。

第四日目。仏跡巡拝の最後、いよいよ仏歯寺

参拝である。

パラガラ・ウパティツサ師の連絡により、再度打合せのためショーカンジ幼稚園に赴く。「正観寺」と書くのだろうか、四国の真言宗のお寺の寄進によって建てられた三階建の幼稚園である。この日は金曜日で、この週に生まれた園児のお誕生会が開かれていた。お坊さんが二人来園し、読経、法話をし、終って園児たちが大きな声で長々と唱えごとをしていた。何だろうと、思って訊ねると、五戒（不殺生戒・不偷盜戒・不邪淫戒・不妄語戒・不酤酒戒）を唱えているのだとのこと。子供向けにどのように訳しているのか、残念ながら聞き漏らしたが、無宗教教育の日本とくらべて、さすが仏教国という感を深くした。

さて、パナガウ・ウパティツサ師は私たちの仏歯寺参拝の段取りをととのえ、案内してくれた。賑々しく鐘や太鼓の打ち鳴らされている堂



幼稚園児たち

内に、人々は仏歯供養のため生の花々を捧げて合掌する。しかし仏歯を見ることはできない。

仏歯は、寶石を散りばめた金製の豪華なダゴバの奥深く納められている。さいわい私たちは、そのダゴバの真前に花を供えて合掌する機会が与えられた。

「これは永平寺様の御寄進によるものです」という説明を耳にしたときは、ああ、お参りできてよかった」としみじみ感じ入った。

ついで仏歯寺貫首パリパーネ・チャンダーナ・ンダ大僧正に面接。黒田理事長は以前国際会議で同席したことがあるとのことで、大僧正も「顔に見覚えがある」と懐しそうに話しておられた。二十七日からの仏跡参拝は以上をもって終了した。

大統領と堅い握手

飛行機の中で黒田理事長から手交された善光

寺海外留学僧派遣育英会の資料に眼を通したパナガラ・ウパティッサ師はたいへん感動し、「せっかく来られたのだから」と、時間の許す限り、この国の要人に会う機会を設けてくれた。

まず、キャンディ地区の州、セントラル・プロビンスの知事公舎を訪れ、知事のP・C・インブラーナ氏に面接の機会をつくってくれた。

J・R・ジャヤワルデネ前大統領が、一九五一年九月、対日講和会議にお国の代表として出席され、「アジアの将来にとって、完全に独立した自由な日本が必要である」と、ソ連などが主張した日本分割案に強力に反対し、さらに対日賠償請求権を放棄されたことに対し、私たち日本人は心から感謝しております。昨年、講和条約締結四十周年を記念し、現在の自由国家・日本の大恩人というべきジャヤワルデネ前大統領を顕彰して、鎌倉大仏の境内に記念碑を建てたのも日本国民の感謝の気持ちのあらわれの一部

であります。

と、黒田理事長が述べると、州知事は、「いや、私たちがこそ日本に感謝しております。前大統領、講和会議に出席したときは大蔵大臣でしたが、あの発言は時の大統領が指示したもので、国民全体の気持をあらわしたものでした。あの発言がお国との親善友好を深めるよすがとなったことを聞いて、たいへんうれしく思います。」

と述べられ、約三十分ほどなごやいだ雰囲気のもとに過ぎし、記念写真に納まって別れた。

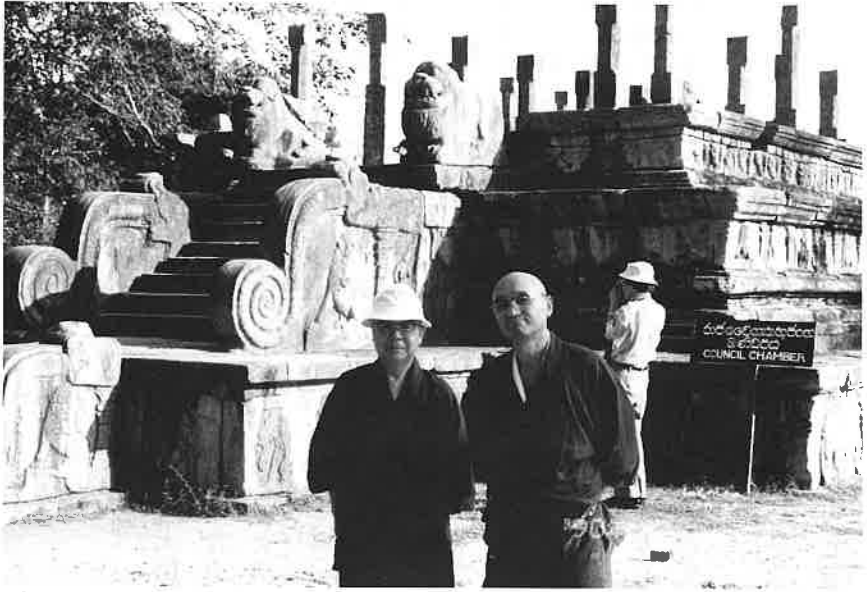
これでキャンデイ地区での用も済んだのでロンボに戻った。翌日、パナガラ・ウパティッサ師から、エネルギー省大臣が来園されるからぜひ来園してほしいとの電話連絡が入ったので吉田幼稚園に向いた。

この幼稚園は、東京在住の吉田医師ご夫妻の寄進によるもので、パナガラ・ウパティッサ師

は園長先生である。園長室を訪ねると、エネルギー省大臣サラット・チャンドラ・ラージャカルナ氏はすでに来られ、私たちを待つておつてくださった。国が小さいからというのではなく、日本の大臣の物々しさとはたいへんな違いで、お互い親しい隣人といった風で、肩書抜きで話し合えるのは実に素晴らしい。

この大臣とは、建築家伊藤喜三郎先生との間に共通の話題もあり、スリランカの国策遂行上の問題点についていろいろ意見交換がおこなわれ、大臣も満足して帰られた。

大臣との会見終つてパナガラ・ウパティッサ師は、私たちを大菩提会会長のところ案内してくれた。大菩提会会長ヒデイガレー・パナティッサ大僧正はスリランカ仏教界の大御所で、黒田理事長は、スリランカの僧さんを留学僧に採用したこの機会に育英会の顧問に推戴したい旨を述べると、すでに育英会の内容を承知して



ポロンナルワにて

いた様子で、快く承諾してくだされ、「明日私の八十一歳の誕生祝いに大統領が来られるから紹介しよう」と約してくださった。

十一月一日、午後九時過ぎ大菩提会会堂に出向き、ヘデイガレー・パナティッサ大僧正の応接室に通されると、緋の道中衣をまとった岩井清雅新大乘宗座主大僧正阿闍梨とその随員がおられた。同じ日本僧として親しく話し合っていると、次々に来室される人々の中に、パキスタン大使ラリス・S・マイトリーパーラ氏がおられ、伊藤先生と名刺交換をして、「お顔存じてます」という。伊藤先生はかつてパキスタンの病院を設計され、長く滞在されて大統領とも親しく、大統領室に写真が掲げられてあるとのことであった。

大統領は十時に来堂され、まず本堂でご本尊に献花、献灯して祈りを捧げてのち応接室に歩を進められた。報道陣がつかかけ押しかけ、く

ぐり抜けるのに容易でなかったが、ようやく大統領の前に出ることができて、黒田理事長が育英会の資料を手渡し、挨拶を述べると、エクスサランサー・R・プレーマダサ大統領は大きく頷き、資料を左手に持って高く掲げて一同に示し、何やら言っておられたが、周囲が騒々しく聞きとれなかった。恐らく賞揚か激励の言葉を述べられたのであろう、右手で黒田理事長と堅い握手をかわされた。

残念ながら、報道陣のカメラの放列に阻まれ、その劇的瞬間をカメラに納めることはできなかった。しかしその夜帰国の途につき、空港のラウンジで、九時四十分頃、テレビを見ていたら、ニュース放送の時刻となり、その一瞬がはつきり映し出されていた。

むすび

このたびのスリランカ訪問はまことに有意義

だったと思う。仏跡を巡拝できたこと、そして一部の人に対してはあったが「善光寺海外留学僧派遣育英会ここに在り」ということを深く印象付けたこと、さらにまた育英会の運営が国際親善のため有効適切なものであることを感取することができたからである。

スリランカは貧しい国である。だからこそ「正親寺幼稚園」とか「吉田幼稚園」といった風に日本名のついた幼稚園がある。その他にもいくつかの施設のあることを耳にした。これらはいずれも一個人、一カ寺の寄進によるものである。これは素晴らしいことだと思ふ。豊かな国日本の国民の一人として国際親善に可能な力を注ぐことは奥床しいことであり、富める者の当然のつとめではなからうか。幼稚園をつくるのと日本ではたいそうの金額を必要とするのだが、この国では予想以上の低額出費でことが運ぶのであるから、心ある人の奉仕を望んで止ま

ない。

折も折、帰途空港ラウンジで、教育文化交流推進委員会の小西代表と同席する機会を得た。

この会の会員は、教育里親として、特定国の特定里子を持つシステムである。たとえばスリランカの子供を里子とするのである。それは、「私を見守る日本のこの人がいる」という安心感を彼の国の子供に与えることであり、日本にいる私たちにとっては、スリランカに自分を慕ってくれる子供がいるということになり、国境をこえた素晴らしい人間関係を生み出すものであり、会員は年間三万六千円を分担すればいいというものである。わずか四万円弱の金で国際親善に貢献できるとなればこれは有難いことである。関心のある方は左記に連絡されたい。

〒181 三鷹市中原2-16-9

電話 ○四二二一四九一三八〇八

教育文化交流推進委員会

さて、善光寺海外留学僧派遣育英会は、善光寺総檀徒の力の結集によって運営されている善光寺独自の可能な範囲においての国際親善友好推進事業であり、時宜に適したものであることを痛感し、誇りを持った次第である。



スリランカの旅



ヘディガレー・パナティッサ大僧正とともに(右端はパナガラウパティッサ師)

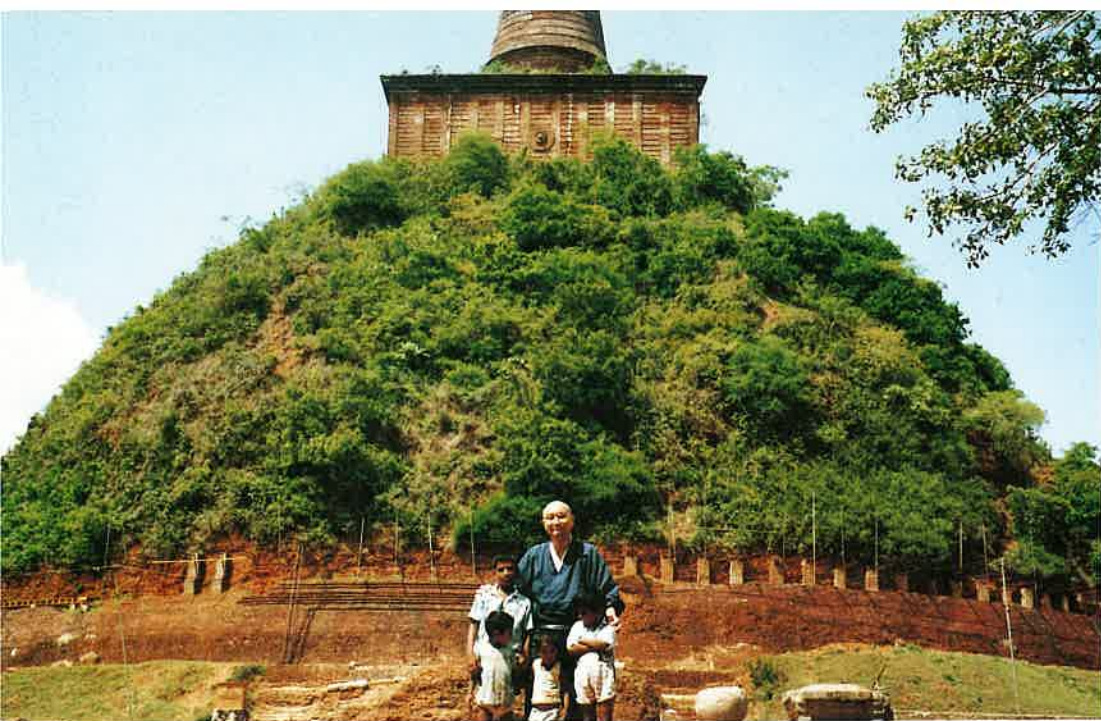


◀ エクスサランサー・R プレーマダスサ大統領



キャンディ 洲知事公舎にて中央はP・C・インブラーナ知事





アマラーダプラ・アバヤギリ大塔の前で



スケッチする三喜庵画伯

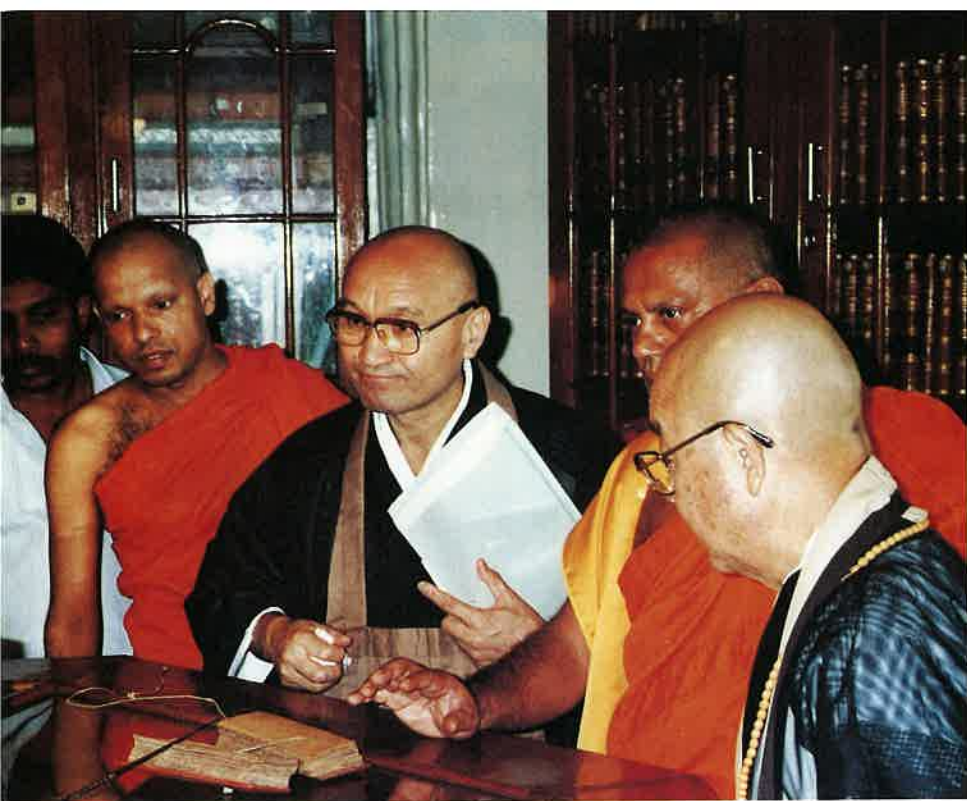


紡績手作業



ダンブラ岩窟寺院にて





仏歯寺経蔵にて



仏歯寺貫首パリパーネ・チャンダーナンド大僧正(中央)



空港に出迎えてくれた遠藤先生とともに



ケラニヤ大学にて登校する学生とともに

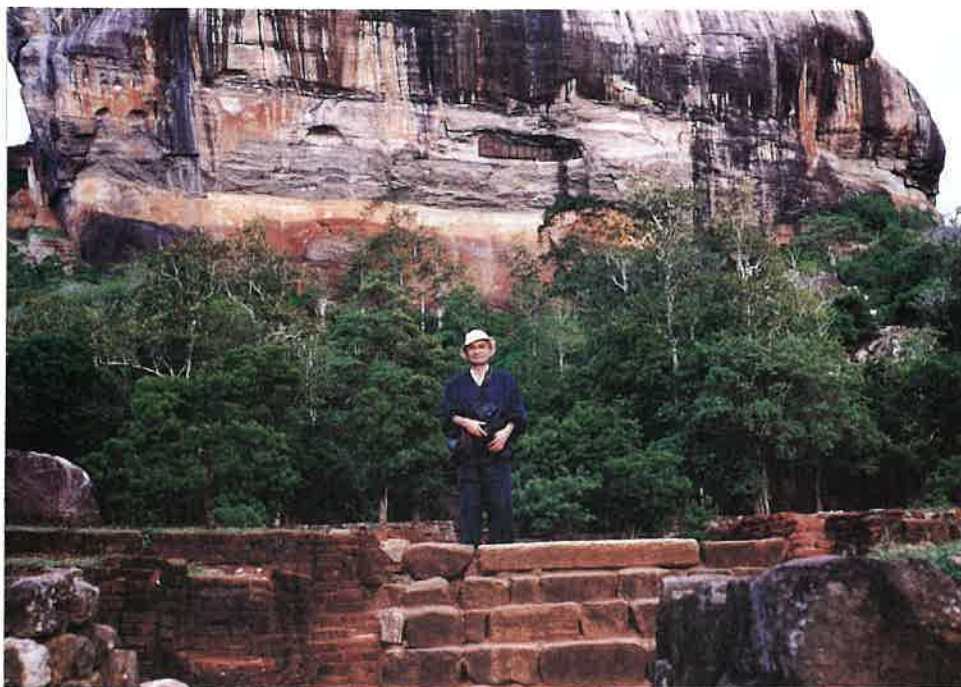


幼稚園を訪問して大歓迎を受ける





幼稚園で大歓迎の住職



シーギリアにて

洞穴に栖む美女たち

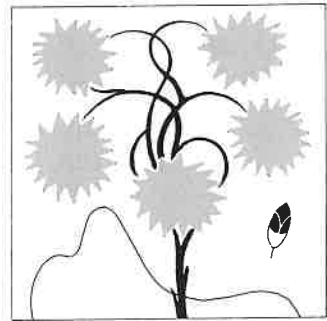
シーギリヤ・レデイの誘い

日本の山々を見て育っている私たちには、類
型的な山の姿が脳裏に描かれてるためか、海外
に出て時に想像を絶する山容に出会っておどろ
くことがある。

ここスリランカのシーギリヤ・ロックもその
一つで、山貌魁偉。あたかも核爆発直後のきの
こ雲のように、巨大なエネルギーを内に秘めた
姿で、ジャングルの中央に空に向かってほぼ垂

直に切り立っている。周囲の緑を寄せつけない
かのような、荒々しく赤茶けた肌のこの岩山は、
その高さ二〇〇メートル。

このおどろきの岩山の頂上に華麗な宮殿を建
てた狂気な王がいた。その名はカッサヤバ。彼
は父、ダッセナ王を幽閉して王位を奪い、殺害
したが、腹違いの弟モガラナの復讐を恐れて、
要害堅固なこの岩山の頂上を己が棲家とした。



しかし、父を殺した罪のおどましさにおびえ、モガラナ来襲の強迫感に責め苛まれる日々だった。

恐れていた日は遂にやってきた。モガラナの軍勢が押し寄せてきたのだ。カッシャバは城を出て迎え撃ったが、彼の乗った象が沼地にはいり、足を取られて動きがとれなくなってしまう。そこを包囲されてカッシャバはあえなく自害して果てた。

爾来幾星霜、周囲をジャングルで囲われ、人を寄せつけないこの岩山、その頂上に宮殿跡が発見されたのは、彼の死後一四〇〇年、イギリスの植民地時代にはいった十九世紀も後半にはいつてからのことである。そして――、
一八七五年、この岩山を望遠鏡で眺めていた一人のイギリス人が、はるかに洞穴らしいもののあることを見取った。幾度も望見しているうちに、光線の具合で、洞穴の中に岩肌らしいも

のとは違った色彩のようなものに気付き、好奇と探求の念に駆られ、胸躍らせて絶壁をよじ登り、洞穴に辿り着いた。

壁面にすばらしい美女の群像が描かれていた。

これが「シーギリヤ・レダイ」と呼ばれる、スラリンカを代表する芸術作品として、いま全世界に広く知られているものである。

カッシャバ王が殺害した父王ダッセナの鎮魂のために、この美女たちを壁面に描かせたといわれるが、彼女らは当時どういった人物なのだろう。

彼女らはいずれも雲の上に半身をあらわし、天花を持つている姿なので、天人を描いたものようである。しかし、なまなましく個性的な容貌や、身につけた豪華な装飾品を見ると、宮廷に仕えた女たちではなからうか。

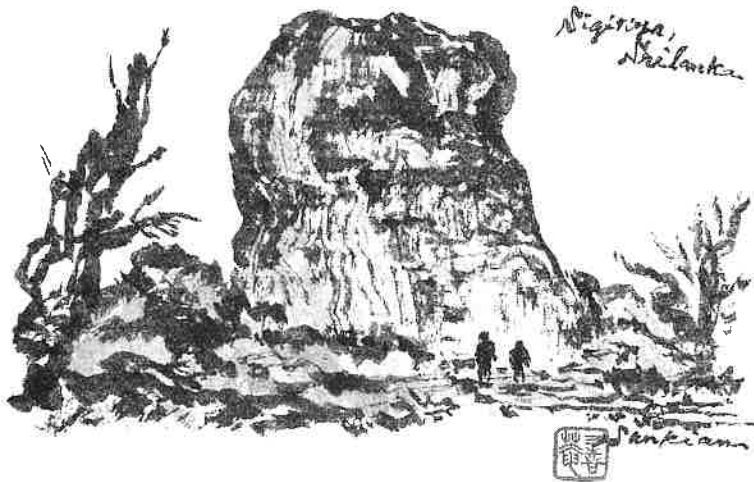
よく見ると、うっすら残っているとところもあ

り、いまは二十二体しかないがかつては五百体も描かれていたという。花を捧げ持ち、あるいは花をめぐるこの天女たちの姿は、この国の人びとが夢見てきた極楽世界だったのだろうか。

わざわざこの壁画を見にきた老画伯伊藤三喜庵氏と知り合った私は、誘われるまず、シーギリヤ・ロック登攀に同伴したのだった。

カッシャバ王の築造した城は、シーギリヤ・ロックを本丸としてもろもろの防備施設をととのえた堅固なもので、外周は石垣で囲まれ、南に開けた正面は、「蓮の水路」（ロータス・チャネル）という名の外濠でガードされている。「蓮の水路」と、名前は優美だが、当時は大鰐を放つて敵に備えていたという。

外濠の手前で入場券を求め、橋を渡って中庭にはいると、現地人がびったりくっついてそばを離れない。はじめは「うるさいなあ」と思っ



ていたが、急な石段を一步一步登るにつれ、腕をささえ、腰を押し上げてくれる彼らのヘルプは、老いの身にはありがたいものとなった。

石段を登りはじめて三十分もすると、垂直に切り立った岩壁の底部に着く。そこに、周りを金網で囲んだ鉄製のラセン階段があり、これを登りつめたところが洞穴の入口で、一歩中に足をはこぶと奥の壁面にシーギリヤ・レデイの姿が眼にはいつてくる。

五世紀の作品とはとても思えないほどの色彩、妖艶な姿と神秘的な表情を見つめていると、夢幻の世界に吸い込まれてゆく。

三喜庵画伯が仔細に観察し終るのを待って、洞穴の前を左手に進むとミラー・ウォール（鏡の回廊）にはいる。この壁は真珠のように白く輝き、鏡の役目をしているところからそう名付けられたという。

ここを通り抜け、岩山の北側に進むと広場が

あり、そこに、ライオンの太い両足と大きな爪にはさまれた宮殿の入口がある。かつてはライオンが大きく口を開けてすわっている全体像だったという。階段をのぼってゆくと、ライオンの口中に吸い込まれるような感じになっていたとのこと。

ライオンの大きな爪先から二十メートルほど離れた前方に、大きな建物を思わせる遺構があり、そこに腰をおろし、涼しい風を汗だくになった全身に浴びていると、疲れを忘れて生き返ったような気持ちになった。そこで、

「先生、どうですか。頂上までいってみませんか」

と声をかけると、三喜庵画伯は、「ぼくは疲れたから失礼する。ここでスケッチしてるから、どうぞ」と。

私も疲れてはいたが、何か目に見えないものが私を呼んでいるような気がしてならず、

「それではちよつといつてきます」

と、一人で登攀することにしたが、何しろ急斜面、あえぎあえぎ、どうにか頂上に辿り着いた。

頂上は、面積二ヘクタール近くもあろうか。

王宮、兵舎住居、プールというようなものがあったのだろうか、その形跡が見える。

四方が見渡せるが、聞えてくるのは風の音だけ。暑さを避けて夕方に登ってきたので人影はまばら。手ごろの石に腰をおろし、日のかげりはじめた美しい四囲の景観にみとれていると、心地よい涼風に誘われて、ついうつらうつらとしてきた。

のどの乾きを覚え、〃湧水でも……〃と見まわしていると、近くの岩かげに白髪の老人がしゃがんでいた。ちよつと頭を下げて会釈をすると、

「何をさがしているのかな」

と、訊ねるので、「水です。のどが乾きました」と答えると、老人は無言のまま、手招きして歩き出した。ついてゆくと何やら洞穴の入口にきた。中はほとんどまっ暗。

老人が躊躇している私を促すので、私も勇を鼓して暗闇の中を歩いて従った。トンネルのような道を出ると、そこには原始的な石造りの小屋があった。老人の住いなのであった。

小さな部屋に通され、椅子代用の石に腰をおろすと、そばの石に、菓子器代りなのであろう、大きな木の葉を五、六枚重ねた上に木の実のようなものが載っている。

老人は、それを指さして、「食べなさい」という。一つつまんで口にいれると、のどの乾きはおさまり、すっかりくつろいだ気分になった。

「どこから来たのかな」

「はい。日本からやってきました」

僧形の私を見て察したのであろう。

「仏陀の遺跡参拝じゃな。それは結構なことじゃ。仏陀は偉大じゃ。この国は、仏陀の教えで救われ、仏陀の教えで栄えるようになったのじゃ。仏陀の教えは今もこの国の人々の心に生きてるのじゃ。」

ところで、仏陀の教えがはいつてくる前のこの国の生い立ち、ご存知かな」

「いいえ、存じません」

「では話して進ぜよう」

老人は孫に昔話を聞かせるような和やいだ表情で語り出した。

「この国はインド大陸の突端からこぼれ落ちた一滴の涙のような小さな島じゃ。昔はインド大陸と地続きじゃったそうな。この島の大きさ、知ってるかな」

「はい、日本の北海道をひとまわり小さくしたほどの島と聞いてますから、大体見当はつきます」

「そうか。じゃ続けよう。」

この国の歴史はインドを抜きにして語れんのじゃ。

昔、インドのヴァンガという国に一人の美しい王女が生まれた。五歳になったとき、父王が仙人を招いて占ってもらうと。

『王女さまはライオンと結婚なさいます』

というお託宣じゃった。

おどろき、恐れた父王は、王女を門外に出さぬよう細心の注意を払ったのじゃが――。

才気煥発の王女はいよいよ門の外の世界に好奇心を募らせることになったのじゃ。

王女は成長してますます美しくなった。ある日、父王が鹿狩りに出かけるというんで、王女は父王に連れて行ってほしいと頼んだのじゃが、父王は聞き入れてくれなかった。

すると王女は、前から準備していたんじやな、ボロを身にまとい、髪をほどき、顔に泥を塗り、

乞食同然の姿に変装して、誰にもとがめられずに裏門から出たんじゃ。

あちこち見ながら街を歩いてゆくと、牛車のキヤラバンが休憩しておった。人々の生き生きとした動きを見てみると、これまでの生活ではかつて意識したこともなかった活力が漲ってくるのを覚え、ひとりでに足が動きキヤラバンの中にもぐり込んだのじゃ。誰一人、あやしむものもなかったのので、そのままキヤラバンに加わっていつしよに出発したんじゃが、ララーという森にはいったとき、たいへんなことが起きたんじゃ。

突如としてライオンがあらわれ、大騒ぎとなり、人々はくもの子を散らしたように逃げ失せた。

ただ一人逃げ遅れた王女の前にライオンがやってきた。しかし不思議なことにライオンは王女に危害を加える素振りを見せなかった。それ



どころか、王女の顔を大きな舌で舐めずりまわしたのじゃ。すると天性のすばらしい美貌が、泥まみれの中からあらわれたんじゃ。

ライオンは美しい王女をみて、食欲などは消え失せ、胸に燃える恋の炎に気付いたようじゃな。

ライオンは王女を洞窟に連れ込み、食事を与え、どこからか衣服を持つてきては着せ、水浴にも連れてゆくといった風に、忠実な侍女のようにかしずいたのじゃ。

ライオンは心から王女に恋い焦がれたのじゃ。こうなつてはライオンの情が通じないわけではない。いつしか王女の胸にも恋情が募りライオンと王女は結ばれ、洞窟の中でめおとの生活にはいったのじゃ」

「ちよつとお聞きしていいですか」

「なんじゃ」

「ライオンというのは、本当のライオンのこ

とですか。それとも、野性的な逞しい男性のことですか。それとも、部族の名前のことですか」

「そういう詮索はあとまわしじゃ。まずわしの話を聞かっしやれ」

「はい、すみませんでした」

「どこまで話したんじゃったかな。ああ、そう、そう。めおととなったライオンと王女の間にも双児が生まれたんじゃよ。男の児と女の児じゃ。男の児はシンハバーフ、女の児はシンハシーワリーという名前じゃった。

シンハというのはライオンのことじゃ。

二人の子供は母親同様、人間の姿をしていたので、母親は子供たちを人間に近付けまいと常々心を砕いたんじゃが、そうなるとうますます人間の世界を垣間見たくなるのが人情で、子供として同じことじゃ。ことに兄のシンハバーフは、人間の生活に強い関心を示すようになった。

ある時、山道に牛車のキャラバンがとまっていたので、彼はそれに近付き、つぶさに観察すると、自分たちの生活と全く違っていることに気付いて、彼は家に帰るなり母親にたずねたんじゃないよ。

「私たちはなぜ洞窟で暮してるの？」

「お父さんはどうして普通と変わっているの？」

「なぜ人間らしい普通の生活をしないの？」

矢継ぎばやの息子の質問に母は適切に答えられなかった。

シンハバーフは成長するに従い、いよいよ洞窟の生活を嫌い、父を疎ましく思うようになって。そして、母に人間の生活にもどろうと迫るのだが、母は首をたてにふらなかつたんじゃない。シンハバーフは、「お母さんはお父さんを愛しているから人間の生活にもどれないんだ」と感じ、ついに父を殺す計画を樹てたんじゃない。

秘かに周到な準備をととのえ、父の帰りを岩

かげで待ち伏せし、弓矢を放って射とめたのじや。かわいそうにライオンは仆れ、やがて絶命した。これを知った母は半狂乱になり、夫ライオンの亡き骸に泣きくずれたのじやが、シヨックのあまり自ら命を断つてしもうた。まことにむごい話じや。

そこでシンハバーフは妹のシンハシーワリーを連れて人里にくだるんじゃない。とある村にはいて、村人と話をする、村人たちは二人の話を聞いて、その母がヴァンガの王女であることを知っていたので、二人を王の許に連れていった。

王は二人をたいへんかわいがってくれたのじやが、やはりいざらいこともあつたじやろうて、シンハバーフは妹と供の者を連れて、ヴァンガの国を去り、シンハプラという町を造って、そこを治めたのじやが、妹のシンハシーワリーを妃としたて、三十二人の子供をもうけたという

ことじゃ。さすがライオンの子供だけあるのう。

その長男がヴィジャヤというのだが、これがまた手に負えない乱暴者でのう。

ヴィジャヤは成長するにしたがい、暴力はふるう、盗みはする、女をかどわかす、たいへんな悪党になったんじや。これでは父親は臣下に示しがつかなくなる。そこで父親は涙を呑んで、七百人の供の者をつけ、船を仕立てて国外に追放したんじや。

その船の辿り着いたのがこの島でのう。インドに近い北西部のタンメンナー（注 いまのマナー）に上陸したんじや。一同は揺れる船旅を続けてきたのじやて、陸にあがって揺れ動かぬ大地に感動して大地に手をついたのじや。すると手が赤銅色に変わったそうな。この島をタンパンニというようになったのはそのためじや

「タンパンニですか」

「そうじや。赤銅色の手ということじや」

「また不思議なことに、ヴィジャヤの一同が上陸した日は、仏陀の涅槃の日じやったそうな」

「すると二五〇〇年前のことですね。そのころから仏教がこの国に伝わるご縁があつたんですね」

「そうじやなア。一同、長い船旅で疲れ、海岸で休んだが、困つたことに水がない。そこへ一匹の犬がやって来た。

ヴィジャヤは、犬がいるからには人間がいるにちがいない。人間がおれば水があるはずだと判断し、二名の者をして犬のあとをつけさせた。三人は森にはいったが、いつまで経つても戻つてこない。

不審に思ったヴィジャヤは、屈強な部下数名を連れて、注意深く森にはいつてみると、小さな沼があり、その近くで一人の若い娘が糸取車をまわして糸を紡いでいた。

『わしの部下がここにきたはずだ。どこにいる？』

と、ヴィジヤは詰問するようだった。

女は沼の方を指差し、両手で水を汲みあげて飲む仕草をして、*「水を飲め」と、すすめる風だった。*

ヴィジヤは、女の態度に不自然なものを感じ、周囲に目くばりをしながら沼の水際に足をはこんだ。すると、沼にはいった足跡はあるが、沼から出てきた足跡がない。

「これは毒水の沼だ。あの女が毒を投げ入れたに相違ない。」

そう直感したヴィジヤは女のところに戻し、長い髪の毛を左手でひっぱり、

『わしの部下を殺したな。なぜ殺した。言わぬと殺すぞ』

と、右手の刀を女ののど元に突きつけた。

女はふるえあがって、毒殺したことを自白し

て、助けを乞うた。

この女はヤクシヤ（夜叉）と呼ばれる悪鬼の一族の主領の娘クヴェニーだった。

クヴェニーは毒薬を隠し持つて、侵入者を毒殺する秘技をもつて一族の安泰をはかっていたんじやが、ヴィジヤの威嚇に屈し、ヴィジヤに忠誠を誓い、ヤクシヤの一族を罠にかけて毒殺してしまふんじや。

こうして原住民のヤクシヤを滅ぼしたヴィジヤは、クヴェニーを妻に迎え、ジーワハツタという名の男の児と、ジーサーラーという女の児をもうけるんじや。

この島を平定したヴィジヤは、五、六年経つと、王としての貫録をつけるため、インドに渡り、身分の高い女性を連れてきて妃にするんじや。かわいそうにクヴェニーと二人の子供はいたたまず家出をして山にこもるんじやが、クヴェニーは裏切の罪で殺されてしまふのじ

や。

いやはや、なんとも救いがたい話じゃ。

このヴェジャヤがシンハラ王国を建設するんじゃない」

「シンハラというのはライオンのことでしたね。シンハラというのは……」

「ライオンを殺した者という意味じゃ。」

聞いてのとおりの話じゃ。とても人間の仕業とは思えぬおぞましいことばかりじゃ。

このヴェジャヤの子孫が人間として品位を高め、この島の自然のように美しく豊かな文化を築きあげるようになったのは、インドから、あのアショーカ大王の息子マヒンダがミヒンタレーにやってきて仏陀の教えを伝えてからじゃ」

「それはいつごろのことですか」

「紀元前、二五〇年ごろのことじゃ。この時は、王と臣下、住民たちが七日間で八五〇〇人も仏教徒となり、あつという間に仏教は全島に



ひろまったということじゃ。

仏陀はシンハラ王国の人民の救い主であり、繁栄のもととなる心の在り方を教えてくれたお方じゃ。だからこの国の人々は仏陀の教えに深く帰依し、仏陀の遺跡を大事に保護し、恭敬礼拝を怠らないのじゃ。

このことをよく頭にいれて仏陀の遺跡を巡礼なされや」

ここまで話すると、老人は長い煙管を取り出して煙草に火をつけ、腹いっぱい吸込んで、フウッと、紫煙をくゆらせた。

「話が終つたのだな」と思ったとき、ふと私は中国の古典『神仙伝』にある次の話を思い出した。

晋の時代王質という人が山へ薪を採りに出かけたところ、岩屋で四人の童子が碁を打っていた。おもしろそうなので観戦していると、一人の童子が棗の実を一つくれた。それを口に含ん

でいたら少しも空腹を感じなかったの、ずっと観戦していた。

やっと一局終つたので、「どれ、帰ろうか」と、ふと、腰に差した斧を見ると、不思議なことに、斧はすつから錆つき、柄は腐っていた。

「変なこともあるものだ」と思いながら家に帰ってみると、すでに数十年も経っており、近所の者たちはみな死に絶えていたということだった。

もとより私の腰に斧のあろうはずはないのだが、腰に手をやり、「斧は」と思ったとき、私の右手には斧ならぬミニ・カメラが握られていた。カメラのデータを見ると、「九二・一〇・二八」とあった。タイム・スリップはしてなかった。それでも何か安心ならず、急いで階段をおりて、例のライオンの広場までくると、三喜庵画伯がおいしそうに煙草を吸っていた。

「どうも、おそくなりました」

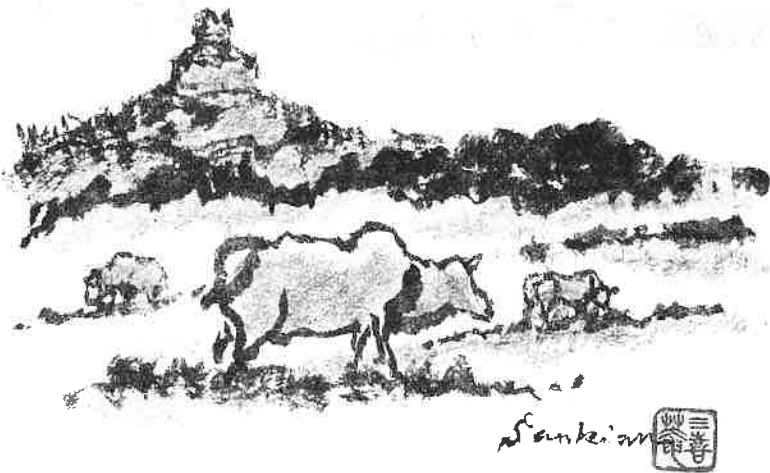
「いや、いや、いまスケッチを描きおえたところですよ。こんな風にできました」

それは、神秘感を漂わせる岩山の風景だった。

「これはすばらしいですね。私はいま、この絵の奥にひそむ夢幻の世界に遊んできたんです。あとでお話いたします」

「ぜひ聞かしてもらいましょう。もう間もなく日が落ちますから、まずは早く帰りましょう」

三喜庵画伯とともにミラー・ウォールの回廊を戻り、洞穴の前でシーギリヤ・レデイに別れの挨拶をし、夢ともうつつともつかぬ思いでラセン階段をグルグルまわりながら岩山をくだった。



謹んで鷲見透玄老師のご遷化を悼み 御法愛を深く感謝し奉る

善光寺海外留学僧
派遣育英会理事

東

隆

眞



昭和五十九年一月十五日、横浜市善光寺で、善光寺海外留学僧派遣育英会の設立準備委員会が開かれた。

このとき集合した顔ぶれは、鷲見透玄老師（大本山總持寺祖院監院）、佐藤俊明老師（山形県宝泉寺住職）、奈良康明博士（駒澤大学副学長）、黒田武志老師（善光寺住職）と私（駒沢女子短期大学学監）、それに新美昌道老師（東京都福厳寺住職）が幹事として加わった。

このとき、黒田老師より基金が贈呈され、会を代表して鷲見透玄老師が受領された。鷲見老師は、黒田老師のこのたびの発願に双手をあげて賛同し、深く共鳴するところがあつた。その様子が、鷲見老師のおだやかな片言隻語、鄭重をきわめる一挙手一投足にうかがわれ、強い印象となつて、いまでも残っている。



鷲見老師と黒田方丈（昭和38年）

善光寺海外留学僧派遣育英会理事（第一号選出）鷲見透玄老師には、平成四年八月三十日、病名心不全、世寿八十二歳をもつて、名古屋国立病院で、ご遷化になつた。謹んで哀悼の意を表するものである。

昭和三十三年から同三十八年のころ、大本山總持寺單頭として雲水の教育に専念しておられた鷲見老師のもとに、僧堂（昭和三十七年春より約半年間大本山總持寺本山僧堂安居、昭和三十八年春より二年間同特別僧堂安居）に安居して、親しくご接化をいただくようになったのが黒田老師である。更に、鷲見老師は、昭和三十九年より曹洞宗北米開教総監として渡米、同四十六年に帰国されるまで、海外での禅の宣揚に辛苦された。ちようど、昭和四十二年秋から昭和四十四年春まで、時を同じうして、アメリカに渡つた黒田老師は、白人のみを対象として開



教に挺身していたご実兄の前角博雄老師（ロサンゼルス禅センター仏真寺主管）を訪ね、また總監のロサンゼルス北米別院禅宗寺主管鷺見老師の主宰する火曜参禅会の運営、指導を補佐したのであった。

このように永きにわたる深い道交、親交が土台となって、相互の信頼がより確かなものとなり、年齢の差こそあれ、肝胆あい照らす以心伝心のきずなが生まれたのである。

後年、入院加療中の鷺見老師は、医師に内密で黒田老師に電話を通じ、破格の親密な交歓があったのも一再ではない。そして、鷺見老師は、ひとえに育英会の存在を喜び、発展と充実を祈願された。その念力は、育英会の原動力となって生きていく。

私が鷺見老師にはじめて拝肩をえたのは、昭和二十九年の早春、大本山總持寺僧堂に安居するため、東海道を托鉢行脚して東上の途中、名古屋市市泰増寺に立ち寄ったのがきっかけである。その当時、泰増寺は、戦災のため急造の仮屋であった。境内には瓦礫が山のように積みあげてあった。お寺には、四十歳なかばの老師のほか、老師のご母堂とお弟子の若き日の鷺見弘明師のお三人が住んでおられた。私は、ご母

堂から、あなたは透玄のお弟子になりなさるがいい、と、しきりにすすめられた。老師と弘明さんと私は、作務のあと、銭湯に行ったりして、とうとう三日間ばかり滞在してしまつた。爾来、およそ三十七年のあいだ、老師は、いろいろのかたちで、私を用いていたいたり、お声をかけていただいたり、お教えをいただいたり、文字どおり可愛がつて下さつた。ご遷化の直前にお会い出来たのはなりよりのよろこびと思つている。育英会を通じて、驚見老師と黒田老師とのご縁が出来たのも、ふしぎなつながりというほかない。深く深く感謝申しあげる。

ここで、各種の資料にもとづいて、老師の略年譜をとりあえずまとめしておく（誤りなどがあれば、後日他の機会をえて訂正したい）。

明治四四年一月二〇日 愛知県名古屋市で出生

大正七年 得度

昭和一一年三月 駒沢大学仏教学部禅学科卒業

昭和一二年 曹洞宗大本山総持寺能登別院専門僧堂安居

昭和一四年より同一六年まで 奈良県法隆寺勸学院で佐伯定胤和上に師事して唯識、俱舎学を学ぶ

昭和一八年 愛知県名古屋市中区・泰増寺住職

昭和二二年 愛媛県瑞応寺専門僧堂単頭就任

昭和三三年 曹洞宗大本山総持寺本山僧堂単頭就任。東京都渋谷区長泉寺土曜參禅会の

指導にあたり、昭和三八年以降、黒田老師が時にこれを補佐する

昭和三五年 インド仏蹟巡拝

昭和三九年より昭和四六年まで 北米開教總監部總監、ロサンゼルス北米別院禪宗寺主管となる

昭和五三年六月より平成四年五月まで 曹洞宗大本山總持寺祖院監院

平成四年八月三〇日午後五時八分 ご遷化。この間、泰僧寺をはじめ昌福寺（新潟県）、乾坤院（愛知県）、禪宗寺（アメリカ）の伽藍を新築、再建、復興す

愛知県、石川県をはじめ全国各地の要請に応じて、講演、老人福祉、青少年指導などにあたり、仏教会長などの役職も兼ねる。また愛知学院の教壇に立ち、駒沢大学でも学生の指導にあたる。京都府舞鶴市桂林寺住職三川啓明老師の法を嗣ぐ。号は養拙。能山會會長。曹洞宗師家。曹洞宗権大教正。曹洞宗大本山總持寺西堂。日本仏教学会會員。国際仏教興隆會理事。インド・マハ・ボデイ・ソサエティ終身會員。善光寺海外留學僧派遣育英會理事。遺弟は一二人。隨身は四員。密葬は老師の遺言で行わず、九月二日、ご自坊の愛知県宇宙山乾坤院（老師は乾坤院独住十一世）で本葬が行われた。

昭和五十五年、金花舎は、A5版一千二百余頁の大冊『現代仏教を知る大事典』を刊行した。このなかに、「現代仏教人名録」の項があり、求められるまま、私は、驚見透玄老師のプロフィールについて、次のように書いた。

北米開教総監部総監としてアメリカへわたる(昭和39年7月)



「老師は、眉目秀麗、音吐朗々という語がぴったりの美僧で、法衣姿がよく似合う。詩偈、書、語学、随筆、茶道など、往くとして可ならざるはなく、加うるに近代的知性も豊か。洗練された多才ぶりは、群鶏の一鶴である。こう言ってしまうと、あたかも世智弁聡の長けた世間僧のように聞こえるかも知れないが、とんでもない。

駒沢大学で禅学を修めたのち、法隆寺勸学院で三年間にわたって唯識俱舎を学び、僧堂生活、雲水教育に専念すること多年、北米開教総監の重任を果たし、尾張の名刹・乾坤院を見事に復興したという経歴が物語るとおり、その足跡は一貫して仏教僧侶としての本道を歩んできた。しかも自らを決して語ることはない。世事に通暁して、人情の機微こまやかなこの独身僧は、当今、曹洞宗を代表する顔である。

総持寺を能登から鶴見に移転することを断行した一世の傑僧・石川素童禪師の孫弟子にあたるから、いま大本山総持寺祖院監院の要職にあることは、不思議なめぐりあわせと言えよう。総持寺にとってなくてはならないお人である。能登は仏国で、僧侶に対する期待も大きいだけに批評も厳しいが、

老師の評判はすこぶるよい。学に偏ならず、行にとらわれず、ただ祖風を慕って、黙々と寒素に徹する老師の日常底は、現代仏教の誇りである。自信をもって「この人を見よ」といえる数少ない宗師家のひとりである」。

あれから十数年を経過したが、驚見老師は曹洞宗を代表する顔であり、現代日本仏教の誇りであり、「この人を見よ」といえる数少ない宗師家のひとりであったという私の老師に対する賛仰のきもちは変わらない。大寂定中、今後とも、老師の変わらぬご指導を願うや、切なるものをおぼえる。

（文学博士。駒沢女子短期大学副学長。駒沢学園女子中学高等学校長）

いのちは永遠に今ぞ花咲く

円福寺東堂 藤 本 幸 邦

成寿誌上御尊母様。御他界を知りました。

九十歳の天寿を全うされ 御尊父白純師に仕へ寺門を再興され 立派なお子様を八人も育てられ 全く良妻賢母婦徳の鑑と存じます。

お人柄については追悼のことばを拝し偲び 申し上げ居りますが 太祖大師御遠忌の砌 白純老師が焼香師として御登山されし折御挨拶をいただき また光真寺の御施餓鬼に説教師として随喜申しました折お世話様になりました。「幾人ものお子様が皆仏門に入られましたがどのように教育されましたか」という私

の質問に 御母堂様は「ただ仏さまの御恩を忘れてはいけないよと常に言い聞かせて育てました」とのお答えでした。

私の師である父藤本全機は宗務行政にかかわり 本庁の各部長をつとめ総持寺出張所の監院ともなりましたが 若き頃長野市の曹洞宗中学林の教師であり その生徒の中に御尊母様の父上臥龍山興国寺堂頭の前角老師が居られた由 そのような御縁で当時御尊母嘉様が高等女学校の技芸の教諭を務めて居られよき嫁ぎ先を頼まれていたと察しられます。

御尊母様とそっくりの小柄な前角方丈様が極めて謙虚にご挨拶をなさり 父とお話をなさって居られたお姿を今も印象にとどめております。たまたま宗務院の極く親しい友人であつたと思われる松本と記憶する老師から白純師の伴侶をとの依頼に臥竜山の前角師によきお嬢さんが居られる事を紹介し 早急に円福寺にて御見合という事になつたらしく私は未だ中学生でしたが体格の立派な見上げる青年僧の白純師が訪ねて来られ一泊される小僧としてお給仕役を務めました。父も母も立派な白純師にすっかり感服し賞讃おく事なくこの御縁がまとまるよう張り切っていました。翌朝嘉様がお一人で訪ねて来られました。「ごめん下さい」と玄関に入られた方はさしたる化粧もなさらぬ小さい女の先生らしき人でした。父は一所懸命にとりもちをしたようですが 御二人だけを座敷に残して「こ

れは困ったあんなに小さいとは」と白純師の偉丈夫の如き体格に比して余りにも小柄な嘉様の対照についてすすめる言葉を失つたようです。

後に白純師が母に語られたところによると白純師が「小さいですな」というと嘉様が「いなければやめましょうか」とか「お断わりになっていいですよ」とか言つたとのこと。プライドは高かつたのですね。

その夜白純師は信濃の寒さにか緊張の故か風邪をひかれ高熱を出され母は三日程看病申しあげました。帰られる時に「こんなに松本師や藤本師にご迷惑をお掛けして とてもお断り出来ませんからいたたく事にきめました」と啞々として父母に申出られた事を中学生の私は覚えています。思えば縁は尊いものです。その小さな母上から大きな偉大な御子様方が生れたのですから 私は白純師

から少年雑誌をいただいた事をおぼえています。思えば遠い少年時代の記憶の一こまです。月下氷人をつとめた父も母もそして白純師も嘉様も今はこの世には居られません。白純師の宗門に於ける また日本仏教会に於ける偉大な功績については蔭ながら承知申し居りましたが 小生にとっては雲の上の存在であられましたので 幼い中学生の思い出の中にある在りし日の御二人の御縁が結ばれた御見合の記を申しあげ追悼の記といたします。

過ぎゆきし月日は

今に帰らねど

いのちは永遠に

今ぞ花咲く

謹しみて御母堂様の御冥福を念じ申し上げます。

藤本幸邦老師

明治四十三年 長野市篠ノ井、円福寺に生まれる。現在、養護施設円福寺愛育園・円福幼稚園、円福保育園理事長を兼任

昭和五十六年勲五等瑞宝章受章、昭和五十九年仏教伝道文化賞受賞、アジア難民救済途上国学童支援の「円福友の会」を主宰、

曹洞宗ボランティア会顧問

平成四年外務大臣表彰受章



くらしの中で読む『正法眼蔵』

——面授の巻—— その一

成興寺住職 小倉玄照

「面授」というのは、師と弟子とがまのあたりに対峙してぴったり一枚の境地になることを言います。「面授」はもちろん師の側からの表現です。弟子の側から表現すれば、「面受」になります。「面稟」とも言います。

師が面授し、弟子が面受し面稟すれば、師のいのちが弟子にそっくりそのまま伝わることになりませんが、宗門ではそれを「嗣法」と言います。或いは「伝法」とも言います。

『正法眼蔵』 嗣書の巻には、

「佛佛に嗣法し、祖祖かならず祖祖に嗣法する、これ証契なり、これ単伝なり、このゆるぎに無上菩提なり、佛にあらざれば佛を印証することあたはず、佛の印証をえざれば佛となることなし」

と断定されています。佛のいのちを相続することは、佛弟子にとつては一大事だということがこの一節からも承知できるとでしょう。

道元禪師は、中国へ渡り、天童山の如浄禪師の下で修行生活をされたのですが、帰国に際し

て、如浄禪師から、

「一箇半箇を接得して吾宗をして断絶致さしむることなかれ」(『建搢記』)

という厳命を受けられました。もつともこのことばの前段には世俗のことに関わることなく、「深山幽谷に居して」ということが示されて、いるのですが、これはあくまで方法論ですから、居すべき深山幽谷が消えてしまつても「吾が宗をして断絶致せしむることなかれ」という遺訓は生き続けると考えてよいでしょう。実際、道元禪師は、ほとけのいのちの相続ということの重大性を生涯かけて説けつづけられたのです。これから参究する「面授」もそういう巻の一つです。示衆されたのは、寛元元年(一一四二)十月二十日。都から越前の山中に居して「我が宗をして断絶致さしむることなかれ」という遺訓を胸に暖めながらの示衆であつたと考えてよいでしょう。

なぜ、嗣法ということが、或いは面授面禀と
いうことが一大事となるのでしょうか。それにつ
いては、本文を拝読して行く間に明らかにな
るはずですが。早速に本文を拝読いたしましょう。

正伝と面授

「その時、釈迦牟尼仏、西天竺国靈山会上百
万の衆中に、優曇華を拈じて瞬目す。時に摩訶
迦葉尊者、破顔微笑す。釈迦牟尼仏言はく、吾
に正法眼蔵涅槃妙心あり、摩訶迦葉に付属す、」
これすなはち、仏仏祖祖、面授正法眼蔵の道
理なり。七仏の正伝して迦葉尊者にいたる。迦
葉尊者より二十八授して菩提達磨尊者にいた
る。菩提達磨尊者、みづから震旦国に隆儀して、
正宗太祖普覚大師慧可尊者に面授す。五伝して
曹谿山大鑑慧能大師にいたる。一十七授して先
師大宋国慶元府太白名山天童古仏にいたる。

大宋宝慶元年乙酉五月一日、道元はじめて先師天童古仏を妙香台に焼香礼拝す。先師古仏はじめて道元をみる。そのとき、道元に指授面授するにいはく、仏仏祖祖面授の法門現成せり。これすなはち靈山の拈華なり。嵩山の得髓なり。黄梅の伝衣なり、洞山の面授なり。これは仏祖の眼蔵面授なり。吾屋履のみあり、余人は夢也未見聞在なり。

〈現代語私訳〉

「そのとき、釈迦牟尼仏は、はるかな西の国インドの靈鷲山の道場に在して、百万の修行者たちを前に、優曇華の一枝を手にしてまばたきをされた。すかさず摩訶迦葉尊者は相好をくずしてほえまされた。釈迦牟尼仏は、〈わたしのいのちの本質（ほとけのいのち）は、今そっくりそのまま摩訶迦葉に伝えられた〉と仰せに言った。」

これがつまるところ、仏から仏へ、或いは祖

師から祖師へと、ほとけのいのちが親しく伝えられて来た消息である。無限の過去から七代の仏（釈迦牟尼仏を七代目とする）によって正しく伝えられて迦葉尊者にいたったのである。迦葉尊者から二十八代を正伝して菩提達摩尊者にいたったのである。菩提達摩尊者は、みずから中国に渡って来られて、正宗太祖普覚大師に面授した。その後、五代を経て曹谿山大鑑慧能大師にいたった。それから十七代の面授を経て、先師である大宋国は慶元府の太白名山天童山の古仏如浄禅師にいたったのである。

あれは忘れもしない大宋宝慶元年乙酉五月一日のことであった。わたくし道元は、天童山の方丈の間である妙高台で、先師である如浄古仏に焼香し、礼拝をした。先師の如浄古仏は、はじめてわたくし道元をみたのである。そのとき、道元を指さし、親しく顔を見つめながら、〈仏から仏へ、祖師から祖師へと面授されて来たほ

とけのいのちは、そっくり汝に伝えられた」と仰せになった。これはそのまま靈鷲山における拈華そのままである。嵩山の得髓であると言ってもよい。或いは、黄梅の伝衣であり、洞山の面授でもある。つまるところ仏祖が、ほとけのいのちを親しく面授することである。これは、わたしどもの宗門にのみ伝わっていることであって、門外の人は、夢にも見聞したことはあるまい。

いのちを伝える

この十年ばかり、私は保育園の運営に専ら力を注いで来ました。ところが、そんなことは禅門の修行者としては本筋のものではあるまいという人が相当にいます。

しかし私は、家族を放擲して六年間も永平寺で修行生活をさせてもらった罪ほろぼしのため



に、保育を天職のようにして日夜それに献身する家内を援助して保育の仕事に関わっている間に大変なことに気づきました。かつての貧しい農耕社会に於ては、誰もが親として自然に湧きいずる我が子を愛しむ情感のままに子どもと関わっていたれば、子どもは大概順調に育って行きました。

ところが、工業社会になって状況はすっかり変わって来たのです。豊かで、便利な世の中が出現したために、意外なことに子どもを育てることがとてつもなくむずかしいことになってしまったらしいのです。

工業社会の子育てが危機的な状況にあることは、私ども人間の未来にとってきわめて危険な兆候だと私は受けとめています。しかし、出家は本来そのようなことに関わる必要はない、文明が崩壊しようと、人類が滅亡しようと一向に頓着することなく、只管に仏祖の古規に従って

修行生活を続けていけばよいのだ、という意見には根強いものがあるのです。

私が縁あつて三年間預かつた弟子も、その考え方から一步も抜けきれませんでした。坐禅や読経には、目の色を換えて熱中するのですが、保育のことにになると、命ぜられたことをあたかも片づけ仕事のように何の感動もなく処理するだけでした。きっと、

「俺は、こんなことをするために出家したのではない」

という潜在意識をじつと封じ込めて、師匠の私に不承不承従っていただけなのでしょう。

私のところへ押しかけて来たとき、山ほど抱えていた精神安定剤らしき薬を私はすべて没収しました。最初の内、彼は陰鬱な顔つきでした。彼が居ると、周辺の人たちはみな、何だか重苦しい雰囲気になりました。

しかし、畑を耕し、野菜を中心とした保育所

の給食を食べ、子どもと遊ぶ生活を続けている間に、彼は徐々に健康を回復しました。結核は要観察者でしたが、二年目の夏、無罪放免のお墨付を保健所から貰いました。近所の人たちも驚くほどに明るい顔つきにもなりました。ところが、何とか自立して生活できるのではないか、という自信のようなものが彼の内部に生じたとき、保育を中心に営む日常の生活を不満とする潜在意識が肥大してしまつたようです。ほぼ満三年を迎えた木の芽どきに、発作的に私の眼前から消えて行きました。彼は、保育と坐禪が深いところで連なつていることがどうしても臍はらおち出来なかつたのです。

仏道修行は、個人的な苦悩を克服するためになされるものではありません。そのところが多くの人に誤解されていると思います。

動物行動学では、いのちの本質を遺伝子という概念で捉えた上で、いふなれば「遺伝子」の

容器といつてもよいような「肉体」は、崩壊し易いので、肉体が元気な間に遺伝子は、自らのコピーを作つてその永続性を保とうとするのだ、と考えるようです。(リチャード・ドーキンス『利己的な遺伝子』紀伊国屋書店)

これは、仏道における「単伝」とか「嗣法」という思想を自然科学の手法で展開した理論のように私には思えます。いのちの本質を「利己的な遺伝子」と捉えるドーキンスの考え方は、仏法となじまぬではないかという意見は当然生じるでしょう。しかし、禪門では「煩惱即菩提」を説くのですから「利己的な遺伝子」の発想も、その延長線上にあると私は読みとつています。そのことについては、機会があればまた論じてみたいと思います。

ともあれ、無常の世を無常の身心が、わがいのちの永遠の存続を願うという煩惱を肯定しつつ生きる―これが仏道修行の根っこにある大命

題なのです。これをもし否定したならば、仏道の修行は意味をなさなくなってしまうのです。

道元禪師は、出家の功德を力説されました。しかし、これは出家することによって個人的な煩惱を捨て、安樂の境涯に至ろうとめざすものではありません。

「三世の諸仏の所証なる阿耨多羅三藐三菩提、金剛不壞の仏果を証する」(出家功德)ためにこそ出家するのです。つまり、永遠の過去仏から相続した、阿耨多羅三藐三菩提(いわく言いがたき「ほとけのいのち」)を相承し、それを未来永劫に伝えるためです。

だからこそ

「若無過去世、応無過去仏。若無過去世、無出家受具。」(もし過去世無からんには、まさに過去仏なかるべし。もし過去仏無からんには、出家受具なけん)。

という諸仏如来の偈の重要性を『出家功德』

の巻では力説されるのです。過去世も来世もないのだ、存在するのは今だけだ—という考え方は、仏教の無常觀を肯定してはいてもその修行生活は仏道のそれとは言えなくなる、と仰せになるのです。「この偈は、外道の過去世なしといふを破するなり」(同書)

だから、出家は「面授」によって師匠からほとけのいのちを相続したならば、必ずそれを自分の弟子に伝えなければなりません。

宗門には在家得度ということもあります。これは、家庭を維持して、「人間のいのち」を単独して行くことの重要性を道元禪師が認識しておられたからにほかなりません。在家のままの得度は、「ほとけのいのち」を師から面授することは不可能であり、ましてやそれを弟子に面授する資格も義務もないのです。(在家者はなぜ「ほとけのいのち」を面受出来ないのかという点については、また後ほどふれたいと思います。)そ

ういう意味では、在家得度は受けただけれど、終生独身のままで出家の縁もなかったという人かもしれない、よき師から得度したとしても、自ら面受面授することはあり得ないことになりま

すから、仏縁は薄いと申してよいでしょう。

近年の出家は、寺に生まれ、寺に育ち、肉の親から面受するのが普通です。「人間のいのち」を相続すると同時に、「ほとけのいのち」も単伝して行くわけです。道元禪師の時代の純粹出家の面授面受到に比較すると、それは墮落だという人があるかもしれません。しかし、私は、時代の流れの中でそういう状況が出現しているのですから、あながちにそうとも思いません。

仏弟子として墮落を責められねばならないのは、わが弟子に面授嗣法しないことです。それほどに道元禪師の法孫にとって面授は重大な問題と言えます。

私は、三人の子を育てています。(人間のいのち

ちの相続)。長男には、何とか面授して法(ほとけのいのち)を嗣がねばならぬと念じています。出家と在家の両面を備えた私のような立場で「在寺」と名づけているのですが、在寺の立場で「面授」の巻を拝読いたしますと、在家の人の「人間のいのち」の相続、つまり、「子育て」としても示唆を受けることが多いのに感じします。

今、日本の子育ては、すでに述べましたように全体的に危機的状況にあります。在家の子育てがきちんとなされていないことは、出家の土壤が疲弊していくことにつながります。私が保育に専念するのも一にそのこととかわわっているのです。

著者紹介 小倉玄照(おぐら げんしょう)

一九三七年 岡山県に生まれる。一九六〇年 駒沢大学仏教学部禅学科卒業。一九七三年 曹洞宗大本山永平寺講師。現在 岡山県苫田郡加茂町 成興寺住職

インド留学記

その9

忘れえぬ人々

(2)



教授 岩
大 教
沢 助
島 金

売春宿での交渉の達人T

私にはないが、インド留学にあたって次のようなアドヴァイスをしてくれた先生がいたという。「若くして単身一年二年とインド留学するのだから、セックスのことでいろいろ悩むこともきつとあるだろうと思う。インドでセックスをどうするのかよく考えておいたほうがいい

よ」と。インド留学後この話しを聞いて、「なんて人間でいい先生だろう。私もこんなアドヴァイスを受けてからインドへ行きたかった」と思った。

ともかく、このアドヴァイスにあるような問題が起きるかも知れない、などということは全く念頭にもなくインドに来てしまった私の場合には、経験的な形でいろいろと紆余曲折を経て

しまうことになるのであるが、その最初がTとの出会いだった。

Tは北インドのビハール州出身の博士課程の学生で、寮でも同じ階でよく遊びに行ったり来たりしていた。いいやつなのだが、目元に好きな感じがあつて、「こいつは好きものに違いない」という印象を与える奴だった。

留学後半年位は、異なる環境、慣れない言葉と人々、なかなかついていけない授業等々と余裕がなく、性的な欲求自体があまり湧いてこない感じだった。だが半年ほどたつてふつと余裕がでてきたときが危なかった。日頃からわい談相手のTと話しているうちに、ついつい盛り上がってしまったのだ。「よし、シティー・ポストの裏へ行こうぜ」(プーナ市の中央郵便局の裏手がいわゆる赤線地帯になっているのである)ということになったのである。

こういうときは、なんと言うか、男どうしの

間では、いったん盛り上がったらもうおりられないというか、そこでおりたら男がすたるというか、そんな雰囲気があるもので、エイツとくりだすことにした。それに日本では、小説や映画で遊廓や赤線地帯について知ってはいても、売春禁止法以降の世代としては現実には全く知らないので、好奇心満々でもあった。

シティー・ポストの裏に着いた。細い路地の両側に二階建ての建物が並んでいる。二階はベランダ形式になっていて、そこから女性たちが路地を通る男たちに声をかけている。日本の映画で見た赤線地帯とそっくりだ。なんだか気分が浮き浮きしてくる。路地に立っていると、日本で言えば「やり手ばあ」だなどという風情のおばあさんが近づいてきた。Tの交渉が開始される。もちろんヒンデイ語だ。あとでなんと言ったのか聞いたら「われわれはジェントルマンであるからして、いいところに案内するように」

と言ったとのことであつた。こんなところに来
てジェントルマンもねえだろう、と笑つてしま
つた。

どうも一階よりも二階のほうが高級のよう
で、二階のほうに案内された。二階に上がると
すぐに、ちよつと広めの部屋があり、そこには
レザーばりのソファアがいくつか並んでいた。
待ち合い室なのだろう。男たちが何人が座つて
おり、女たちが相手をしていた。奥のほうから
男と女が出てくると、入れ替わりに待ち合い室
の男と女が入っていく。好奇心にかられて奥の
ほうを覗くと、ベット一つおけるくらいの広さ
の小部屋が五つほど並んでいた。大きな部屋を
ベニアで仕切つて作つたもので、小部屋には天
井はなく、音は筒抜けである。友達連れて来た
のだろうか。隣の男と声を掛け合つて男の友情
を確かめあいつつ行つていると思われる声が聞
こえてくる。なんて即物的な世界なんだろうと

ゲンナリした。日本の小説や映画で想像してい
た情緒的世界とは全く異なつていた。あれだけ
盛り上がりつても気味の悪いことに思えてきた。

さらにこのような気分最後に追い打ちをかけ
たのは、ソファアに寝ていた三、四歳の女の子
だつた。「こんなところでセックスしても子供が
生まれることがあるんだ」と思つたらもう駄目
だつた。盛り上がった男の友情は袖にしてサツ
サと逃げ出すことにした。Tたちが先に小部屋
に入ったのを見計らつて金だけはいら（十五ル
ピー＝四五〇円）、Tたちを表で待つた。逃げ出
したと言ふわけにもいかず、盛り上がりつて表に
でてきたTたちに適当に話しをあわせながらの
帰り道は、全く二重に最悪の気分だつた。

日本語の名人ゴーカレ

留学後まもなく、寮に一人のインド人が訪ね
てきた。日本語をとつても流暢に話すインド人だ。

「日本語を初めてどれくらいですか」と聞くと、「一年ちよつと」だと言う。その答は、英語を十年やっても喋れないで困っていた私には驚異だった。即座に尊敬してしまうことにした。それがゴーカレー (Vivek Gokhale) との最初の出会いだった。ただ敬語だけはまだ不自由のようで、日本人にとってはちよつとぞんざいな日本語を喋っていた。

プーナの日本人の中には、「日本人をつかまえては日本語の練習をしている」とか、「無礼なやつだ」と言つてゴーカレーを嫌う人もいたが、私にはそんなことは気にならなかった。私も日本では留学生をつかまえてタダでさんざん英会話の練習をしてきたほうだし、アメリカ人やイギリス人にたいしてすぐ、「あなた方は生まれたときから英語を喋っているんだからうまくて当然じゃない。ネイティブ・スピーカーじゃないものが苦勞して英語で喋つてんだから、多少変

な英語でもちやんと分かれよ。こつちが聞いて分かんなかったら分かるように喋れよ。それが礼儀じゃないか。あなたたちが日本語喋るときにはこつちはちやんとそうするからさ」とわめきたくなつてしまうほうなので、彼のぞんざいさは全く気にならなかったのである。

留学中二年ほどつきあつているあいだに、教えないのに彼の日本語はどんどんうまくなつていった。見るまに敬語もきれいに使い分けるようになり、語学を体得するということがういうことかというような見本のような存在だった。漢字も独学でどんどんマスターしていった。しかし最後まで、インド人特有のおしつけがましさのところは消えなかった。そこだけがインド人が日本語を話しているという感じのするところだった。

ところが、その後年かしてインドで再び会つたとき、あのおしつけがましさのようなもの

Sankian



はすっかり消えていた。すくなくとも日本語を話しているかぎりにおいてはそうだった。聞いてみると、一年間日本に研修にいつてきて、日本との技術提携をしている会社で通訳および技術文書の翻訳者として働いているとのことである。日本にきたインドの留学生で日本語がうまくなった人もそうだけれど、日本語をマスターするということは、言葉の背後にある敬語体系や柔らかく曖昧な物言いなど、単に言葉を修得するということを超えて、言葉の背後にある人間関係のもちかたをはじめとする文化を修得するという面があるようで、インド人がその立ち居振る舞いすべてすっかり日本人になってしまおうのである。日本人になってしまおうというのが言い過ぎなら、少なくとも日本人好みのインド人になってしまおうのである。

従って一方では、今問題になっている外国人労働者の問題も、日本語を文化的背景込みでき

つちりマスターさせるようなシステムを作れば、このゴーカレー氏に見られるように、ある程度は日本国内での文化摩擦の問題は解消するのではないかとも思われるのだが、しかし他方では、少なくとも私はゴーカレー氏のような語学の達人にはなりたくないと思った（もちろんなれもしないだろうけれど）。つまり、インドの言葉を話しているときのゴーカレーと日本語を話しているときのゴーカレーという二人の人格がいるような気がして、そうはなりたくないと思うのである。私はあくまでジャパニーズ・イングリッシュで勝負しよう。どうしてもこうしか思えないのである。

ベトナム人留学生M

寮の私の斜の前の部屋にベトナム人学生Mが移ってきたのは、留学後半年ほどしたころだった。なんとなく雨蛙に似た顔の、笑うと目元が

くずれてひとなつっこい感じになる学生だった。インド政府の奨学金をもらって、イピドに社会学を勉強に来たとのことであつた。ベトナム（当時の南ベトナム）は第二次世界大戦以前はフランスの植民地だつたこともあつて、当時はアメリカの影響下にあつたものの、あいかわらずフランス語のほう盛んだとかで、英語はこれでもいいだろうかと私が心配になるほど喋れなかつた（ただし一年くらいで、授業も含めてほぼ支障がないほどになつた）。

インド人の人あたりの強さと違って、日本人と顔も似ていて物腰の柔らかいMにははじめからとっても親しみを感じた。部屋に遊びに行くと、お茶をだしてくれるのだが、それはインド的な紅茶ではなくて、緑茶だつた。日本とは違って、お茶をこさずにそのまま茶碗に入れ、その上からお湯を注いで、お茶が茶碗の下に沈むのを待ってきわらずみを飲むという飲み方だつ

た。ときには、そのお茶に花なんかを浮かべてだしてくれるのだが、そのへんの感性が、とても中国的というか日本的というか、とにかくすつかり気に入ってしまった。

また、ベトナムは大乗仏教の禪が盛んとかで、Mも禪寺で修行したことがあつて、漢字がよくできた。英語では語彙不足で話しが通じないところは漢字で補つて話しをした。日本人とベトナム人が漢字で話しが通じるなんてとても意外だつた。なんだか、中国文化圏に属する両国は……なんて感じて、やっぱり中国文化って偉大だつたんだ、などと思つた。

しかしそんな平穏な日々は長くは続かなかつた。Mが暗い顔をしていることが多くなつてきたのだ。ちょうどベトナム戦争が終結に近づいてきた頃で、家に手紙を出してもぜんぜん返事がこないとのことであつた。そんな日々が続いたのち、ベトナム戦争が終結した。ベトナムは

共産主義の国になったのだ。カンボジアの大使の息子だとか言つて羽振りの良かった留学生はすでにインドから消えていた。おそらくフランスへ渡つたのだろうということであつた。南ベトナムが資本主義国であり続ければ、Mがインドで学んだ社会学は帰国後役に立つたかもしれない。しかし国の情勢はまったく変わつてしまつたのだ。相変わらず本国の家族との連絡はとれないと言ふ。いったいMはどうするのだろうか。ひと事ながらとても気になつた。

ある日Mが部屋を訪ねてきた。これからは社会学では駄目だから農学をやるといふのだ。それもインドでは今後資金的に継続の見込みがないので、まずフランスに知り合いを頼つて行くといふのである。フランスに行く金があるのかと聞くと、パンチガニ（プーナ近くの避暑地）にあるモラル・アーミー（第一次世界大戦以降に、二度と戦争が起きないようにと、武器によ

る武装ではなくて道徳による武装を説いてヨーロッパで成立した組織）の援助で、フランスに渡るのでとのことであつた。

もし私が同じ立場だったら、ふと考えた。日本と連絡がとれなくなつただけでパニック状態だろうなと思つた。とてもこんな風に冷静に、今後のことを考えて進路を変更し、ちゃんと手を打つていくということなどできないだろう。これまでさまざまに外国に虐げられてきた国の人間はこんなに強いのかと感心した。決して怒つたり呪つたり騒いだりしないで、きちんと次のことを考えている。風にそよぐ葦の強さとも言おうか。ベトナムがアメリカに勝つた理由がなんとなく分かつたような気がした。

その後Mからは、オランダで農業の勉強をしているという便りがあつたきりで、連絡は途絶えてしまつた。今も風にそよぐ葦の強さで元気に生きていることを信じている。

成寿第十九号に寄せて。

アンコール・ワットは気温四十度のま
ばゆい静寂に包まれていた。黒田方丈さ

まは、石

畳の西参

道を歩み

ながら、

静寂の中

に潜むい

くつかの

戦乱の足

音を聴き逃さなかった。のみならず、剣

戈、銃声、叫喚の隙間から聴こえる、十

二世紀以来の読経の声をも逃さなかつ

た。清らかな泉のように湧いてくる仏心

の声を、方丈さまは合わせた掌で聴いて
いた。「遺跡の修復は、仏心の救済なのだ。

そのため

にこそ、

人材を育

てなけれ

ばなら

ぬ」。

黒田方丈さまは

仏心の声を聴いていた

赤間 義徳

遣留学僧

海外派

という大事業の確信を深めながら、方丈
さまは中央塔を正面に仰ぎ、仏法の王道
を踏み締めていく。

日本に留学して

—日本の仏教と国民性について—

みなさん、おはようございます。韓国留学僧の李煥秀と申します。きょうはみなさんにお会いできたことをほんとうにうれしく存じます。

善光寺のご住職様が「海外留学僧派遣育英会」の理事長として世界仏教文化交流に大きな役割を担っていらつしやるのは私どもの韓国仏教界にも広く知られておりまして、ご住職様の大きなお力添えに深い感謝の気持ちを申しあげる次第でございます。

私は今、東洋大学において華嚴経入法界品を

中心にした仏教文学を勉強しております。将来は学者のような態度より詩人のような態度で生きて行きたいと思っております。

きょうは私が一九八九年の四月、留学のためにソウルから東京へやってまいりましてから私が見て来た『日本の仏教と国民性』についてお話を申しあげたいと思います。先ず、私が日本に来て経験した大事なことが三つございます。そのことからお話を申しあげたいと思います。

一つ目は大本山永平寺に入りまして日本の禪

東洋大学文学部
印度哲学科三年

李^イ

煥^{ズウン}

秀^{スウ}

(韓国曹溪宗)

宗のお坊さん達と一緒に修行をやってみまして日本の禅宗の修行方式を理解することができたということでございます。すべてのお坊さんの方々が厳しい生活の中で真面目に修行していらっしやるのを見まして深い感銘を受けました。

そして、大法良典単頭老師にお会いしまして道元禪師と永平寺の歴史について詳しく教えて頂き、非常に良い勉強であったと思います。西暦五五二年、韓国から日本に仏教が伝来されて以来、日本仏教史には立派な和尚の方々が出ていらっしやり、日本民族の精神的支えとなつて来たと思います。その中でも道元和尚は日本民族の魂として尊敬されていると思います。

韓国仏教と日本仏教が異なつたところはどこかといえますと韓国仏教は自分の宗派の祖師より仏教の教祖であるお釈迦様を崇めている反面、日本仏教はお釈迦様より自分の宗派の祖師をいっそう崇めているのではないかということ

でございます。そして、韓国禅宗と日本禅宗の修行方式で異なつたところは韓国の禅堂は作務があまりなく毎日坐禅を十時間以上続けておりますが、日本の禅堂は坐禅時間が短く作務時間が大変長いということでございます。

二つ目は日本の△労働者の世界▽を理解するために千葉県にあります清水建設の建設現場に入りまして日本の労働者達と一緒に一週間労働をやってみたことでございます。

そこでは二人が一組となつて鉄板を積み上げる作業を担当しました。私は三神さんという方と一組になりました。白髪のかなり年輩の方でお見かけしたところでは六十歳を越えておられるようございました。仕事中、彼は全然休まず、汗を流しながら一生懸命に働いておられます、その姿を見まして人生はいつもあのように勤勉に生きて行かなければならないという大きな人生の教訓を得ました。華嚴経入法界品の

中で善財童子が仏法を求めするために五十三人の善知識を尋ねます。ここで問題はその五十三人の善知識の方々みんながお坊さんではなかったということとでございませう。その中にはお坊さんをはじめこの世の中で生きて行くすべての人間が入っています、これは仏法がお経の中にだけあるのではなくこの世の中のすべての人生の姿が即ち仏法であるという意味だと思ひ、あの白髪の労働者は私にとって人生のすばらしい先生だったと思ひます。

『正法眼蔵随聞記』の中で述べられている典座教訓が道元禪師に大きな衝撃をあたえたのと同じような体験であつたのではないかと思ひ、人生をいつも勤勉に生きて行けという大事な教えでございませう。

三つ目は少数民族の人権と差別問題を考えるために東京から船に乗つて北海道へ行き、二風谷というアイヌ民族が二千五百人ぐらい住んで

いる村に入つて十日間アイヌ人達と一緒に生活してアイヌの言語と文化・歴史を勉強してみました。アイヌ人の顔は日本人とは全然違ひ、多分ロシア人と似ているのではないかと思われました。そして、みんな日本語で話していましたが、発音が日本人とは全然違ひました。そこで私は萱野茂先生というアイヌの民族指導者にお会いしまして、アイヌの文化と歴史についていろいろ教えて頂きました。アイヌは日本列島の原住民として日本民族よりもっと長い歴史をもつていて別々の言語と別の文化と別の歴史をもつ全然別の民族であることがよくわかりました。

日本のすべての方々を知っているかはわかりませんがアイヌ人達は日本に対して被害者意識を強くもつていました。明治時代に日本が北海道のアイヌ民族の土地を侵略し、自分の国にしたことによつてアイヌ人は日本の国民となりま

したが社会の中でアイヌ人に対していろいろな差別が行われていると聞きました。この差別は法律上はまったくないのであり、ただ精神的な差別を意味します。今、北海道には三万人ぐらのアイヌ人が住んでいます。彼らは川での猟で生計を立てている人々が多いです。この前、日本人達がその川を取り上げてしまった事件が起こりましてアイヌ人達が訴訟をおこしたことがあります。少数民族の生計の基盤を取り上げてしまうことは世界的な経済大国であることを自慢している日本としてはちょっと遠慮した方がいいのではないかと思います。

このあいだ、日中国交樹立二十年を迎えてNHKの取材班が中国に入り、中国人達に「日本人の印象はどうか」と聞いた結果、多くの中国人達が「日本人は礼儀正しいが度量が狭い」と答えていました。この問題についてちょっと考えてみたいと思います。留学生にとっては、自

分自身の学問の研究が大事なのですがそれに劣らず、その国の歴史と文化・民族性を理解することも非常に大事なことではないかと思えます。

私が日本に来て最も印象深かったのは日本人の親切なところと礼儀正しいところであり、これは日本民族が昔から勤勉に、誠実に生きて来たその結果だと思えます。お店の店員、区役所の公務員、火葬場の職員、タクシーの運転手など、ほとんどの社会人の方々が親切にしてくださいます。大学の日本事情の授業で先生が「日本の経済が発展した理由にはいろいろあるだろうが、最も大きな理由は一九五〇年の朝鮮戦争のためであり、これを考えると日本は韓国に対して深く感謝しなければならない」とおっしゃいました。それを聞いて私は朝鮮戦争とともに、日本国民の勤勉性があったため日本の経済が発展したのだと思えました。

そして、日本人は他人より自分の利益を特に重視する性格が強い。ため多くの外国人が「日本人は度量が狭い。理解する心が無い。心が狭い。」というふうにかんがえてはならないかと思ひます。今、日本で行われている外国人差別の問題は、日本人より性格が荒い外人と、その荒い性格が全然理解できず全ての外国人から指紋を取つてゐる日本人の両方に責任があると思ひます。日本人の方々の前で大變失礼なお話でございますが、同じ国民でありますアイヌ人に対しての差別及び偏見意識を捨てて、少数民族の人権を尊重しなければなりません。多数民族は少数民族を尊重することが国際社会の倫理を確立する最も大事なことだと思ひます。日本の国民の意識の中にアイヌ人に対する偏見意識が残つてゐる限り、外国人差別の問題は絶対に解決されないと思ひます。

日本人のアイヌ人や外国人に対する差別はア

メリカ人の人種差別の問題とはその概念と性格が全然違ひます。

物質文明の社会の中で本来の自己を失つてしまつたまま生きて行く現代人を本来の崇高な人間性で回復させるのが今日のすべての宗教家に与えられた大切な思想的課題だと思ひます。私が一番もつていた哲学があるとしたら、それは縁起説による調和の哲学でございます。J・P・サルトルのアンガジユマン理論も縁起説の現代的解釈だと思ひます。

私は日本仏教がお釈迦様の教えを社会の人々に広く知らせると同時に日本社会の差別問題を解決するための役割を果たすことを望んでおります。

私は今年八月、韓国の東海岸のウルルンドという小島に行き、二十五人ぐらいの観光客と一緒に小船に乗つて島の周囲を回りました。

その日は風が強く、波が高くなりました。船が

物凄く揺れ、一緒に乗っていた人々はおそらく事故が起ころるのではないかと思ひ、恐れておりましたが船長は全然恐れず平気で航海を続けておりました。船長の仕事をじっくり見ていますと、彼は波の性格がよくわかつており、波を見ながら速力をあげたり下げたりしながら航海を続けているのがわかりました。

私は船長のその姿を見て事故は起こらないと確信を抱くようになりました。

有能な航海者は風と波をいつも利用します。

有能な人生の航海者は苦難と逆境をいつも利用します。人間は一輪の花のような存在であると思ひます。自分自身をもっときれいに、もっと美しく表現しようとするからです。

私が外国に来て留学をしているのも、詩を書いて行きたいからかも美しい一輪の花として生きて行きたいからかも知れません。

韓国のある偉い禅師のお話の中に、

『山は山なり、水は水なり。』というお言葉がございます。これは公案としていろんな解釈ができるでしょうが、私はこういうふうと考えてみました。

教育の専門家は教師であり、政治の専門家は政治家であり、学問の研究の専門家は学者であり、労働の専門家は労働者であり、農事の専門家は農夫であり、航海の専門家は船長であり、修行して衆生を濟度する専門家は坊さんであります。

山は山であり、水は水であります。

一切衆生はみんなが自分の分野の専門家であります。我々はみんな自分の分野の専門家であるのだから自分の仕事に使命感をもって堂々と生きて行かなければならないと思ひます。山は山であり、水は水であります。

ご静聴、どうもありがとうございます。

◆第九回海外派遣留学僧が決定◆

本会では第九回育英生として五名採用決定致しました。

平成五年四月より関係先に派遣いたすことになり、スリランカ、バングラデイシュが新たに加わり十六カ国に四十五名となりました。

尚二月六日（土）に辞令伝達式を執り行う予定です。

氏名	国籍	派遣先
藤田一照	日本	アメリカ（ヴァレー禅堂）
キリメテイヤネ ヴイマラワンサ	スリランカ	日本（愛知学院大学院）
李鍾徹 <small>イジョンチョク</small>	韓国	インド（マイソール大学院）
李泰昇 <small>イテスン</small>	韓国	日本（駒沢大学院）
スワガタン チャクマ	バングラデイシュ	日本

永平寺と繪持寺祖院参拝の旅



ガイドの説明に耳を傾ける…兼六園



永平寺での朝食



諸堂拝観





大本山永平寺勅使門前にて

東尋坊にて





大本山総持寺祖院三門前





金沢兼六園にて

杓底一残水
汲流千億人

意義深い三日間の旅

永平寺と総持寺祖院参拝の旅

第一日

「五年越しの念願がようやくやうやくかないました」という伊藤婦人会長さんの述懐は、この旅行に参加した一同のよろこびを集約したものだつた。

平成四年九月三十日、新幹線も遅れるかと思うほどの土砂降りの雨だつたが、実はこの雨、本山参拝に出発する者の俗塵を洗い流してくれる身代り不動明王の少々手荒い慈悲の雨だつたように思う。それが証拠には誰一人遅刻する者となぐ、列車に乗った頃はすっかり晴れ上がり、爾来快晴のもと快適な旅を続け、身代り不動明王の化身のような方丈さまのリードで全員法悦にひたつて帰ることができたからである。

八時五十九分新横浜発の列車に乗り込

んだ一行五十名は米原で北陸線に乗り換え、十二時十七分福井駅に到着した。本山上山まではまだ間があるので、北陸海岸随一の名所東尋坊にバスを走らせ、昼食・観光のち永平寺に向かった。車中、添乗員の永島君が、「いよいよこれから永平寺に向かいます。お山の中の注意事項を申し上げますが、皆様覚悟のほどはよろしうございますか」という。一瞬車内にひやりとした空気が走り、ついでそれを打ち消すかのような笑い声があがった。「信仰と観光、同じコウでもこうまで違う」これはガイドの言葉だが、この一瞬から車内の空気は一変した。

四時少し前、永平寺門前に着く。

ここで私（佐藤俊明老師）は五十年前のことを思い出した。私が修行中のこと、永平寺では「眼蔵会」といって『正法眼

蔵』の提唱を聞く会が年に一度設けられているが、岸澤老師の提唱の中にこんな話があった。海軍大学の学生が永平寺で参拝した。一行より遅れて、夜、福井駅に到着した講師の一人の金子中佐は、駅前からタクシーに乗った。ところが永平寺口まで来ると、運転手は「これからさきは行かれませんか」という。「約束が違う」と、金子中佐は怒り出したが、運転手は平あやまりにあやまるだけで、さっぱり埒があかない。「それじゃ、代わりの乗物をさがして来い！」ということになり、運転手は人力車を連れて来た。金子中佐は人力車に乗り換えたが、「けしからん、けしからん」といつている。岸澤老師コメントして曰く、「人力車にはもう金子中佐はいない。乗っているのは天地いっぱいのけしからん奴だ」と。

やがて人力車が永平寺に近付くと、谷

川のせせらぎあり、老杉あり、車夫は黙々としてあえぎながら車を引いてゆく。この素晴らしい光景に、「天地いっばいのけしからん奴はだだんだん小さくなつてく」る。やがて永平寺の下乗碑の前に着くと車夫は、「車はここまででござえます」と下乗をすすめ、提灯を持って案内してくれる。参道の両側のうっそうとした老杉、葉陰からほのかにもれてくる月の光。「もうこうなると、けしからん奴はすっかり姿を消し、黙々として歩むは天地いっばいの清浄身のみ……」と。

ましてや永平寺参拝を五年越しの念願としてようやくここに辿り着いた私ども一行には、「峰の色 谷のひびきも みなながら わが釈迦牟尼の 声と姿と」(道元禅師) となつて感じ取られるのであつ

た。

正門の石の門柱に、

杓底一残水 (杓底の一残水)

汲流千億人 (流れを汲む千億人)

と刻まれている。

これは、道元禅師が日ごろ水をお使いになるとき、必要最少限の水を器にとり、柄杓の底に残つた水をもとの谷川に戻されるのを常としておられた。不審に思つた侍者がその訳をたずねると、「児孫が水に不自由しないように」と答えられたという故事を謳つたものである。水のようにふんだんにあるものでも、なおかつ有難い、つまり有ることが希である、その希有なるものがたまたま与えられたその恵みによるこび感謝し、能う限りこれを最高度に活用し、その余徳をば後の世の人びとのためにふり向けるという尊いお



心、このようにして道元禪師の残された
仏法の水が七百五十年を経た今日、いま
なお数限りない多くの人びとの心の渴き
をいやしているのである。

大勢の参籠客にまじって建物の中に吸
い込まれてゆく。当初は、瑞雲閣の宿泊
定員に合わせて一行四十名を限度と打ち
出したのだが、応募者七十数名に達して
しまった。諸般の事情を考慮して五十名
で打切らざるを得なかったが、それでも
十名は瑞雲閣からはみ出してしまったの
で、これは吉祥閣に泊ってもらったこと
になった。宿泊場所が二カ所に分かれたの
で、事務局はたいへんだった様子。

五時、貫首禪師様がお会いくださると
の侍局よりの通報に接し、方丈さんと私、
蒔田師と富永事務局長、婦人会伊藤会長
と中村副会長、山口青年会長と新井事務

長の八人が拝問することになり、不老閣に登った。

丹羽禅師様は八十八歳の高齢だが矍鑠としておられ、二十三日からの御征忌(道元禅師の開山忌のこと)で、全国末派の寺院が本山に出仕して報恩の誠が尽くされる。この間、全国寺院の代表が貫首禅師に代わって焼香する。二十三、二十四日は二祖国師、孤雲懷奘禅師の示寂祥忌、(二十八日と二十九日は道元禅師の示寂祥忌に相当している)を勤め終えられたばかりで、「高祖様も昨日承陽殿にお帰りになられたばかりです」と仰せられ、「高祖様の七百五十回大遠忌も十年後に迫っておりますので、それまでに一日でも近付けるよう精進したいと思っております」と決意のほどを披瀝され、そして「善光寺さんはまことに尊いりっぱなお仕事

をなされ、常々感服しております」とその労をねぎらわれました。方丈様は、「現在十カ国に四十一名を派遣いたしております」と前置きして育英会の現況をかいまんで報告され、たいへんなごやかなふんいきのうちに拝問は終わりました。

拝問終了と休む間もなくすぐ夕食となり、佐藤典座老師指導のもと雲水が腕によりをかけた本山ご自慢の精進料理に舌つづみを打ちました。

休む間もなく六時五十分からは吉祥閣二階の二百畳敷大講堂で坐禅、引続き法話。坐禅指導と法話をされたのは小野崎秀通老師。この方は、方丈さんが会長をつとめる日本パクナム会の副会長で、やはりワット・パイナムで修行された人。永平寺では海外経験豊かな人材を起用し、国際化の充実をはかっている様子で、

正伝の仏法の海外進出、指導者育成が望まれるところである。

ついで映画をみての研修があり、八時三十分修了。九時開枕（消灯）となり、第一日の日程を無事終了した。

第二日

さすがに緊張して眠れないのか、となりの部屋では二時ごろから話し声が聞える。三時ともなると、洗面所にゆく足音がしきりとなり、眠ったり目覚めたり、また眠ったりしていると雲水の「起床です」という声がかして目が覚めた。なるほど時計を見たら三時五十分、振鈴（起床の合図）十分前である。

一同洗面のおえるのを待って大光明蔵に案内される。畳二百九十八枚の大広間で、貫首禪師が公式に來山寺院や檀信



徒と相見する室である。北野元峰禪師揮毫の「転大法輪」という額が掲げてある。貫首禪師が説法するところから大法輪を転ずるというのである。

この日は参籠の団体が多く、九州は宮崎、佐賀、東北は仙台といったふうで、瑞雲閣泊りの私たちはさすがに一番早く入堂し、他の団体を待つことしばし、全員そろったところで貫首禪師の御名代池田副監院老師の法話が始まった。

法話は道元禪師御一代の御事蹟中、とくに入宋求法までを詳しく述べられた。

法話終つて法堂に登り、ゆるやかに『舍利礼文』が読誦される中、進前して御開山道元禪師、二祖懷奘禪師に御挨拶申し上げる拝登諷経、終つて供養諷経が団体ごとくに次々におこなわれ、全部終了したところで退堂して監院老師拜問。禪師様拜

問と同じメンバーだったが、話はまた禪師様と同様、善光寺さんの素晴らしい活躍が話題となり、方丈さんは（物的整備より）人材養成を優先しなくてはと強調、監院老師が聞き役にまわる一幕もあった。

何しろ時間がなく、諸堂拝観はそこそこにして朝食後下山、時に八時。

バスに乗ってはじめて「信仰から観光へ」と心が切り替わり、「コウはコウでもこうも変わるものか」と、だんだんくつろいだふんいきになってきた。バスは福岡県から石川県に入り、押水町今浜から羽咋市までの八キに亘る「千里浜」として有名な波打際の天然ドライブ・ウェイを走り、その終点で昼食、少憩ののち大本山総持寺祖院に向かう。

道元禪師様は四十四歳の時永平寺をお

開きになり、また『正法眼蔵』という素晴らしいご本を九十五巻お書きになり、すぐれた弟子を養成なさいました。しかしながら残念なことに五十四歳でお亡くなりになりました。さいわいなことに、道元禪師から四代目に瑩山禪師がおでましになりました。

瑩山禪師様は、上下貴賤の別なく、また老若男女を問わず、遠近のわけへだてなく、実に多くの人びとから慕われ、帰依を受けられた、まことに衆生縁の厚いお方で、大勢の信者を教化済度なされ、すぐれた多くの弟子を養成され、また諸処方々にお寺をお開きになり、五十四歳の時総持寺を開かれたのであります。

瑩山禪師に篤く帰依された後醍醐天皇は綸旨を下され、総持寺を勅願所として、「曹洞賜紫出世第一の道場」と定められ

ました。

爾来、寺運益々隆盛をきわめ、全国にその末寺一万六千余を数えるに至りましたが、明治三十一年四月十三日、不幸にして災禍により七堂伽藍の大部分を焼失しました。これを機に、皇居が京都から東京に移った新しい日本に即応して布教伝道の中心を首都圏に移そうということになり、横浜鶴見に本山を建設し、現在地は祖廟として次々に堂宇が再建され、山内二万坪の境内には焼失を免れた伝燈院、慈雲閣、経蔵などのほか七堂伽藍も建立され、山水古木と調和し、風光幽玄な大本山の面影をしのばせております。

生憎監院老師は御不在でしたが茶菓の準備をととのえて待つてくださいました。有難く頂戴して退出、輪島に向かいました。

輪島といえは輪島塗りの本家本元。善光寺さんに数々の逸品を納めている若島宗齊先生が使いの者を派してわざわざ祖院まで出迎えてくださったので若島宅におうかがいしました。広々とした邸宅のところせましと展示された逸品の数々は目をみはるばかりだった。ついでこれまた善光寺さん出入りの輪島屋本店にゆく。ここでは庶民に手ごろな品が多く、一同シヨッピングを楽しんだ。

もう四時も過ぎたので、ここから和倉に直行することになり、両本山の拝登も無事修了したこととて車内はすっかりリラックスした気分になり、今晚の楽しい宴席の下地は充分出来上がったもののようにである。

五時半過ぎ和倉温泉米久旅館に着く。永平寺では時間がなくて入浴出来なかつ

た人も多かったので、ここで二日間のつかれをすっかり洗い落とすことになった。そして生まれ変わったような気分が宴会がはじまる。どこでも主役は方丈さん、歌はうまいし、座持ちはよし、パフォーマンスは独特、それにつられてカラオケで美声を披露する人続出、おひらきまで誰一人席を立つ者がいない。まことにたのしいものだった。

第三日

八時十五分出発、途中で海産品のシヨッピングをたのしみ、一路金沢兼六園へ。兼六園は江戸時代の代表的な林泉回遊式大庭園の特徴をそのまま遺している。日本三大名園の一つであることは周知のことである。ここで一時間、少々あつい日差しの中を散策してのち、料亭「秋月」

で金沢料理を満喫し、バスは米原に直行。このバスの中もいわば方丈さんの独壇場で、一同いくたびか抱腹絶倒、時の経つのも忘れて、三時米原に着き、ここでバスの運転手とガイドさんに三日間の労を謝して別れ、新幹線は所要二時間少々、あつという間に新横浜に着く。「また企画してほしい」声のしきり、楽しく、そしてまた意義深い三日間の旅だった。

XXXXXXXXXX
いただいたお手紙から

心に残る参拝の旅

XXXXXXXXXX

◆ 此の度の永平寺参拝の旅の折には、何から何までの濃やかなご配慮いただきまして、肉親にもまさる程の和やかな日々でございました。日頃はお近づきがたい御老師さま、方丈様の身近での時

間を過させていただきましたことも有難いことでもございました。又とない御本山での一日、貴い時間でもございました。今更ながら仏様の教えの尊さと、歴史を心から思いおこさせていただきました。加えて善光寺様あつての此の旅を心から感謝しております。心に思いますことも、気持ちだけ先走りペンが進みません。厚く厚く御礼申し上げます。どうぞ益々御元気で善光寺さまの御繁栄を祈り上げます。

横浜市緑区 石川多加子

◆ 此の度は永平寺参拝旅行にお供させていただきありがとうございます。方丈様はじめ皆々様に御親切にしていたいただき、厚く御礼申し上げます。秋色深いみ寺に参籠致し結構な御法話に接し先祖の

供養させていただき唯々感激にたえませ
ん。厚く御礼申し上げます。

横浜市保土ヶ谷区 岡島時代

◆ 過日の北陸旅行に際しましては大変
お世話になり心より御礼申し上げます。
おかげ様にて永平寺における立派なご回
向を頂き、又、貴重な体験や数々の楽し
い思い出をつくれました事、ありがとうございました
存じあげます。方丈様始め皆々様のご苦
勞と御志に重ねて厚く御礼申しあげま
す。次回にも許される限り参加させて頂
きたいと今から楽しみに致しております。
ありがとうございます。

横浜市南区 高橋八重子



交流国と留学生の数は十四カ国・四十一人

善光寺海外留学僧派遣育英会の総会

留学僧二人が記念講演

善光寺海外留学僧派遣育英

会（黒田武志理事長）の第七

回総会が十月二十四日午後二

時から、黒田理事長の自坊で

ある横浜市港南区日野町一六

〇四の曹洞宗善光寺で開催さ

れ、留学僧や関係者らが出席

した。

総会に先だって、八月三十

日に遷化した鷲見透玄理事

（前大本山総持寺祖院監院）

の追悼法要が営まれ、また留

学僧二人による記念講演が行

なわれた。

釈迦殿での開会諷経は、本

尊上供に続いて鷲見理事の追

悼会が黒田理事長の導師で厳

修され、黒田理事長は「八十

の生涯石田を耕す。透玄の説

法老婆の禪。乾坤、祖院、遺

徳尊し。活し尽くす山雲海月

の篇」と香語を述べた。

この後、佐藤俊明常任理事

が挨拶し、「昭和五十九年に本

会を設立。翌六十年から留学

僧派遣を開始した。第一回留

学僧の帰国を待つて第一回総

会が開かれ、第七回となった」

と経過を報告。この間、留学

僧をインド、スリランカ、タ

イ、カンボジア、韓国、アメ

リカ、イギリス、フランス、

オランダの各国に派遣。また

中国、韓国、アメリカ、フランスから日本への留学僧を採用し、交流国と留学僧の数は十四カ国・四十一人にのぼると発表した。

佐藤常任理事は、この育英事業が「カ寺の事業としては破天荒の規模であり、高い評価を得ている」と話し、「留学僧の中には、カンボジアで虐殺された人々の慰霊行脚を続け、日本語教育に挺身している僧がいる。カンボジアと日本仏教との橋渡し役として大きな使命を担うだろう」と紹介した。

さらに「初心忘るべからず」との言葉がある。留学僧に応

募した初心を忘れることなく精進していただきたい。今日、英語は盛んだが、漢学に相当する英学というものがない。カルチャーショックを受け、

互いに長を採り、短を補うことによって真の国際理解が生まれる。皆さんの貴重な体験を一過性のものにならないで活用していただきたい」と激励した。

記念講演は、留学僧の中から第六回生（第七回生にも継続採用）の沖田玉英さんと、第七回生（第八回生にも継続採用）の李煥秀さんが登壇。沖田さんはアメリカの禅センターでの修行体験を話し、韓

国から日本の東洋大学に留学中の李さんは「日本の仏教と国民性について」と題して、日本で考えたことの一端を披瀝した。

沖田さんは、日米の修行形態に基本的に大きな違いはないが違うのは、日本の僧が終身僧籍にあるのに対して、アメリカでは一生の間に出家と還俗を往復することは日常的に自由に行けるとし、「僧侶の経済基盤は、日本の場合は檀家制度や托鉢だが、アメリカでは出版物の発行や会員制での基盤づくりが必要で、楽ではない」と話した。

とくに、尼僧の立場から、

女性の地位が日本とアメリカとでは大きく異なっていると指摘。「アメリカでは力があれば、女性でも上位にのぼり、男性を指導する立場にも立つ。

また、日本は一つの形から個性を見いだすが、アメリカは個人尊重の修行であり、どの禅センターも独参を行なっている。仏教を受け入れ、独自に新しく自己流に改革していく力がある」と比較分析した。

『労働』に教訓得る

一方、曹溪宗の僧籍をもつ李さんは、日本留学三年間の経験から学んだ三つのことか

ら話を始めた。第一は、永平寺で日本の修行僧と一緒に修行し、曹洞禅の修行方法を学んだことで、道元が日本民族の魂として尊敬されていることを知り、また韓国仏教が釈迦仏教であるのに対して、日本仏教が祖師仏教であることを理解したと述べた。

また、韓国の僧堂では作務よりも坐禅を重視し、一日のうち十時間以上坐るが、日本の僧堂は坐禅の時間より作務の時間が長く、修行方法に違いがあると指摘した。

第二は、日本の「労働者の世界」を理解するために、建設現場で一週間、共に労働を

したことだ。「六十を超えた白髪の年輩者が、休まず汗を流して一生懸命働く姿を見て、人生はいつもあのよう勤勉に生きていかねばならないとの大きな教訓を得た」と李さん。善財童子が仏法を求めて尋ねる五十三人の善知識は、全てが僧侶ではなかったとし、「これは、この世の中の全ての人生の姿が即ち仏法という意味だと思う。白髪の労働者は私にとって、人生の素晴らしい先生だった」と語った。

最後は少数民族の人権と差別問題を考えるために北海道へ渡り、アイヌ民族が生活する村へ入って十日間、一緒に

生活し、その言語と文化、歴史を学んだことで、その体験を通して、李さんは「日本人は他人より自分の利益を重視する性格が強いため、多くの外国人が、日本人は度量が狭いと考えるのではないか」と思ったという。

そして、「いま日本で行なわれている外国人差別の問題は、日本人より性格が荒い外国人と、その荒い性格が全然理解できず、全ての外国人から指紋をとっている日本人の両方に責任がある。同じ国民であるアイヌ人に対する差別と偏見意識を捨てて、少数民族の人権を尊重しなければな

らない。少数民族は少数民族を尊重することが国際社会の倫理を確立する最も大事なことだと思う。日本国民の意識の中にアイヌ人に対する偏見が残っている限り、外国人差別の問題は解決されないと思う」と訴えた。

宮本延雄理事を議長に選出して議事に入り、昨年度の行事報告に続いて、新年度の行事計画が発表された。人事面では、顧問に新しく鶴見大学学長代行の横尾太寿氏が五月十日付で就任。また驚見理事の遷化に伴う理事の補任については、理事会で検討中であると報告された。

新年度は一月に第九回留学僧の採用者を発表、二月にその伝達式を挙行する。

黒田理事長らは四月上旬に中国取材、十月にはベトナム取材をそれぞれ予定。また機関誌『成寿』は一月発行の二十号でスリランカ特集、七月発行の二十一号で中国特集を組む。さらに、阿部慈園参与が、このほどインドの宗教文化入門書ともいうべき『インド四季暦』（東京書籍刊）を上梓したことや、東隆眞理事が出版予定の『禅の世界』（全五巻）に育英会として全面的に協力することなどが話された。

愛知学院の小出院長が 善光寺育英会の顧問に就任

海外留学僧派遣育英会は顧問に新しく愛知学院大学学長・小出忠孝氏（愛知学院長）の就任を決め、黒田理事長が十一月十八日に名古屋市千種区楠元町の急愛知学院本部を訪問して、小出学長に委嘱状を手渡した。

小出学長への顧問委嘱は、これまでに愛知学院大学の引田弘道助教授や森祖道教授を育英生としてイギリス、スリランカへ派遣、また新年度の育英生としてスリランカから愛知学院大学へ留学中の学生の採用を決定するなど、同大学との縁が深まってきたことなどによる。

小出学長は、善光寺育英会がこれまでに十四カ国・四十一人の育英生を採用してきたとの実績を聞いて、「愛知県で四人の留学生に対し、二年間、全額負担する育英制度がある。県でやって四人だ。一カ寺でこれだけの内容の事業を継続することは大変なこと。宗門にこのような人がいることは素晴らしい」と高く評価した。

また、愛知学院大学は現在、アジア各国からの留学生を約百六十人受け入れていると語り、他の私立大学がおもに中国、韓国、台湾など東アジアからの留学生を対象としているのに対



し、愛知学院大学はインドネシア、タイ、ビルマ（ミャンマー）、マレーシア、バングラデシュ、インド、スリランカなど、広く南アジアにも及んでいると話した。

小出学長は、留学生たちが高度経済社会の日本で下宿し、授業料を払いながら生活することは経済的に相当な困難を伴うと述べ、「アジアの留学生を受け入れて、いい教育をして帰りたい。今日明日のことではない。二十年後、三十年後の種蒔きをやっている。その意味で黒田理事長のお考えに心から敬服する」と善光寺の育英会事業に全面的な賛意を表明した。

これに対し、黒田理事長は「善光寺の育英会は、日本から海外へ、海外から日本への留学生を援助している。留学生が自分の国へ帰ったあと、それぞれの国を通して、世界の平和と人類の発展のために働いてくれると信じている」と所信を語り、事業への理解と協力を求めた。

声



心の垢を洗い流してくれた
ご本と出会う

金沢市 大平れい子

黒田武志ご上人さまのご講演をまとめたご本、『心やわらかに——今を生きる説法』の中の、「明日を生きる」を読ませていただきました。

今、私は二十歳。十七歳のときから信仰し、まだやっと三年目です。ですから、心の修行、成長がまったく足りないのですが、一隅を照らす人、己を忘れて他を利する人になりたくて、弥勒菩薩さまに心を磨いていただきたいと思います。

ています。弥勒菩薩さまは、本当に素晴らしい慈愛のお方です。私が慈愛の人となるようになるまでには、これからたくさん心の宝を積み重ねていかなければなりません。

ご上人さまのご本と出会うことができて、私はとても大きな心の宝ものを得ることができました。嬉しくて、感謝の気持ちでいっぱいです。本当に心の底から「心やわらかに」なれるご本でした。

ご上人さまのご体験談には、驚きと感動でいっぱいにさせていただきました。お寺に逃げてきた、自称「ヤクザ」

間のような気持ちになりました。いろいろな修行がありました。すが、托鉢ほど謙虚な心が必要なものではありません。尊いご上人さまでも、これほどの厳しい修行を積んでこられた。私のような足りないものは、もつともつと一生懸命に、人の二倍も三倍も努力していかなければいけないのだとわかりました。

また、ご上人さまは、生きることの大切さも教えてくださいました。今、生きている、たった一人しかない自分を大切に。そして、自分の人生を真剣に、精いっぱい生きる。生かされていることに感謝し

て生きる。それが、〃本当に生きる〃ということなんだということを、感じさせていただきました。

ご上人さまが私の心の垢を流してくださり、その上、私の心の一隅を明るく温かく照らしてくださいました。本当にありがとうございました。

*

信仰することができる喜びは、お金では買えません。信仰とは何よりの宝であり、たとえ何一つ財産がなくても貧しくても、真剣に信仰する心があるのなら、その人は誰よりも幸せな人なのです。今、私は本当に自分が幸せものだ

としみじみ感じています。

〃身の宝よりも心の財第一なり〃

日蓮上人のお言葉を、私はいつも心にとめています。

私の祖父は、日蓮宗の僧侶でした。とても優しく、私は祖父の怒った顔は見たことがありませんでした。そんな祖父のイメージが強かったからでしょうか、私は幼い頃から、〃お坊さまってすばらしいな〃と思いつけており、その気持ちは成長するにつれますます鮮明になりました。今の私の夢は、できることならば、どのようなお寺さまでもいいから、お嫁に行きたいなあ、

ということなのです。もしもその夢が叶ったなら、私はみなさんのお墓に、たとえ一輪ずつでもお花をお供えしてあげたい…。毎日一生懸命磨きに務めながら、お寺さまにお嫁にいきますようにと、弥勒菩薩さまにお祈りしているのです。

心強い限りの新たな

挑戦

山形県鶴岡市 宝円寺 阿部全也

先日、私は、黒田武志尊師の拝顔の栄を賜うことができました。貴、成寿山善光寺御称名そのままの靈氣に迎え

られ、お導きのまま上香礼拝、拝見した数々の名品・調度、

いただいた香り高い茶菓…。そしてはじめて聴くすばらしいお話やご所見など、今以後、あのひとときを忘れることができません。ありがとうございます。

あのとき頂戴した「善光寺海外留学僧派遣遺育英会」の要項や、輝かしい冊誌『成寿』、さらに貴重な論文集を拝読させていただきました。

読むほどに、今日の宗教の現状を深く考えさせられました。中でも我が仏教、果たしてこれで本当に良いのか：年甲斐もなく（小生、八十三歳

になります）あれこれと思いつけました。

日本の仏教は大乗仏教とは申せ、現状はその名に値するのだから、と。各宗派、宗祖の遺産に箆もり、惰眠をむさぼっているような気がします。言い過ぎでしょうか。自分もその一人に過ぎないのに、口幅つたいことを思わず申し上げてしまいました。お笑いだささい。

しかし、私が思いましたのは、黒田尊師は、そんな現状の殻を打ち破り、誠に精神誠意を以て挑戦を続けていらっしやる。しかも、一步、一步、着実に前進されています。そ

の果実が今、留学僧の中から生まれつつあります。誠に心強い限りです。貴師のたゆまぬ志は、留学僧を通して輪となり、大きく広がって行くこととごぞいましょう。心から、ますますのご活躍をお祈り申しあげております。

一円の

コイン

信州文学人文学部
留学学生

江 林 (中国)

私の引き出しに、一円のコインがある。

一円なんかまったく取るに足りないと思われるのは当然のことだろう。しかし、この

一円のコインは私には何よりも大事なものだ。これを見たら、無邪気でかわいい少年の姿が目の前に浮かんでくる。

日本に来て半年もたっていない六月の、ある日曜日のことだった。その日は、南安曇郡梓川村公民館が主催する「留学生と青少年の集い」という交流会が開かれることになっていた。私は幸いにこの交流会に参加するチャンスを得られたので、留学生一行十六名を迎えに来てくださった梓川の方に導かれ、喜んでバスに乗ったのだった。約十分ほど走って、梓川に着いた。バスを降りると、

同村の公民館の方々が親切にあいさつに出て来て、私たちを館内へと通してくださった。中では、数十人の子どもたちが私たちを待っていてくれており、かなりのにぎわいだった。活発で、元気いっばいの男の子や女の子たち。彼らは六つのテーブルをそれぞれ囲んで座っていたので、私たちも六組に別れ、子どもたちの仲間入りをすることになった。

私はある男の子のそばに腰をかけた。十歳ぐらいに見えるその子は、顔も服装も中国の子どもと何らかわりがない。同じアジア人だからなあ

と思ったとたん、急速な親近感が湧いてきた。

彼は私を見て、くちびるをピクピクさせて、何かを話しかけようとしているようだった。しかし、大人で、しかも見知らぬ外国人の私とどうつき合ったらいいのか、迷っているらしい。ついに彼はうつむき、口をつぐんでしまった。

本当はひとなつっこい子なのだと一目でわかっていた私は、かわいい子に窮屈な思いをさせてはいけないと思い、こちらから話しかけることにした。

「お名前は？」
「上嶋圭介」

「何年生？」

「六年生」

「今年おいくつ？」

「十二歳」

私の質問に、彼は一つ一つきっぱりと答えてくれた。しかしまだ少し、かたくるしさが残っているようだった。私は話を続けた。

「上嶋君は宿題が好き？ きらい？」

「きらい」

彼はきっぱりと答えた。

「それじゃ、なにが好き？」

「スポーツ」

そう答える頃には、もう彼の緊張感はなくなったとみて、口数もずいぶん多くなっ

てきた。来年中学校に進学す

るとか、お母さんからこづかいをもらわないとか、毎日バスで学校に通っていることなどを、彼はだんだんと打ち解けて教えてくれた。

「おにいちゃん、中国は広いね」

「うん、そうだよ」

「中国の小学生も宿題をやるの？」

「もちろん」

好奇心をもって私に中国のことをいろいろ聞いてくるようになった彼に、私は一つ一つまじめに答えた。

ゲームが始まった。うちのグループこそ負けないと、み

んな一生懸命に参加。自分たちのグループを応援する声も響き、公民館の中はたいへんにぎやかになった。

「おにいちちゃん、がんばれよ」

上嶋君は大声で私を応援してくれた。とうとう最後に私たちのグループが優勝するこゝとができ、グループの全員が飛び上がらんばかりに喜んだ。上嶋君はとりわけ興奮して、私の手を引っ張って、

「やった！ やった！」

と叫んだ。

私たち二人はすっかり友達ちになっていた。

時のたつのは楽しいほど早いもので、知らず知らずのう

ちにもう帰る時間が近づいてきた。私は記念として、中国から持ってきた小さなカメラの玩具を上嶋君にプレゼントすることにした。彼は珍しいものをもらって、嬉しくてたまらないように、ありがとうと

何度も礼をいった。

「おにいちちゃん、住所と電話番号教えてよ。今度おにいちやんに電話してもいい？ 年賀状書いてもいい？」

「いいとも！」

「秋にまた交流会があるって聞いたよ。おにいちちゃん、絶対にまた来てね」

何度も繰り返し彼。なんてかわいい子なんだろうと、私

は感動しながら、

「はい、はい、必ず来るよ」

と答えた。

いよいよ出発の時間になった。

バスに乘ろうとしているとき、見送りに来てくれた人の群れの中から、いきなり上嶋君が飛び出してきた。

「おにいちちゃん、これ、日本のお金だ。記念として……」

そういつて私に手渡ししてくれたのが、一円のコインだったのである。

心を打たれ、たとえようもないすがすがしい気持ちがないが、外国のおにいちちゃんにも、記念として何かあ

げなければ、と、彼はきつと
考えたのだろう。

これは一円のコインではな
く、国を越え、年齢を越えた
人間同士の相互理解と、人間
の愛そのものだと私は思っ
た。

バスは梓川を後にした。上
鳴君と村の多くの子ともたち
は、見えなくなるまで手を振
り続けていた。そのときの私
の視界は、あふれる涙でぼや
けてしまっていたが、無邪気
でかわいい少年の姿はいつま
でも、頭の中に焼きつけられ
ている。「留学生の想い・第
四集 留学生から日本のみ
なさんへ」より―

福田智昭さんが得度

平成四年十月十三日に福田
智昭さんが善光寺黒田武志住
職のもとで得度された。これ
からの活躍に期待したい。



月刊『光の泉』で人生を語られた
黒田武志住職

株式会社日本教文社発行の月刊誌『光の泉』十二月号に黒田武志氏（横浜市港南区 曹洞宗善光寺住職）の記事が掲載された。この雑誌は、宗教法人生長の家本部の編集によるもので、黒田武志氏が登場したのは、広く各界で活躍中の著名人に、人生観、人生のターニングポイントをインタビューによって語ってもらう、「じんせい拝見」という欄。この欄にはこれまで、科学者・糸川英夫氏、画家・横尾忠則氏、元巨人軍監督・川上哲治氏、元NHKアナウンサー・鈴木健二氏、歌手・三波春夫氏、作曲家・船村徹氏などが登場している。



宗派を 超えて祈る
世界の平和 黒田武志さん



月刊『光の泉』住職 ● Takashi Kuroda

「宗派を超えて祈る」というテーマで、黒田武志住職が自身の経験と信念を語っています。彼は、異なる宗派や文化を超えて、平和を祈る大切さを説き、現代社会における宗教の役割について考察しています。

「じんせい」の扉を開き、黒田武志住職の言葉が響きます。彼は、祈りを通じて世界を繋ぎ、平和を築く道を探ります。自身の修行と社会への関わりを語り、読者に深い教訓と勇気を与えています。

今回、一年のとりを飾る十二月号で黒田武志氏は、「宗派を越えて祈る世界の平和」と題して、ご自身の人生観を中心に、「海外留学僧派遣育英会」の活動内容と今後の抱負、また、越し方の数々のエピソードについても、一般読者にわかりやすく語られている。また、お話中の表情や、海外研修時の様子も写真で紹介。十一月の中旬に、約四十万部発行されたが、たいへん好評で反響が多く、善光寺の住所の問い合わせ等が光の泉編集室に殺到している。

『善光寺海外留学僧派遣育英会。黒田武志さんが、何年も温め続け実現させたこの制度は、宗派を問わず、国籍、男女を問わず、広く門戸を開き、世界平和に貢献する人材を次々に育てている。』宗祖を通して「積尊に還れ」を信念とし、常にグローバルな視野をもって未来を見つめる黒田さんに、その生き方の土台と

なった数々の貴重な人生体験をうかがった』
（光の泉十二月号「じんせい拝見」のリード文より）

**善光寺護持会会長・越石周平氏四男
越石哲永氏と結婚**

平成四年九月十四日、成寿山善光寺護持会会長・越石周平氏のご子息、哲永氏が、善光寺住職・黒田武志氏夫妻の媒酌によって結婚式をあげられた。場所は「横浜プリンスホテル」

越石哲永氏は昭和三十六年九月三日生まれ。大学在学中は、ニューヨークへ建築研修のため留学。卒業後は善光寺留学僧派遣育英会の派遣により、アメリカ・ニューヨークのグレイストン（社会福祉団体）で三年間勉強し、平成二年にはニューヨークで「K&Mア

ソシエーション」を設立された。帰国後は国内で貿易会社を設立。

すばらしい情熱と才能を持つ、この若きリーダーに嫁がれたのは、安嶋洋子さん（現在は越石洋子さん）。中学時代からテニスを始め、高校時代は関東大会、インターハイにも出場、また、社会人となり銀行に勤めてからも、神奈川県代表として全国大会や国体にも出場するほどの、爽やかで快活なスポーツウーマンである。

ちなみに哲永氏は、越石周平氏の四男にあたるが、長男・光政氏、次男・行政氏、三男・浩司氏とすべて黒田武志氏夫妻が仲人を務めている。それぞれがみな幸せに暮らしているのを見て、哲永氏も安心して、洋子さんとともに温かく明るい家庭を築かれていくことだろう。

どうぞ末永くお幸せに：

遠藤翠水氏、日中の友好深める書道展を 開催

善光寺の書道教室でも指導にあたられている遠藤翠水氏（全日本新芸書道会会長・日中書画連盟会長・国際芸術協会常任理事）が、このたび中国・上海美術館書道展を開かれた。

「上海・横浜友好書画交流展」と題されたこの書道展は、遠藤氏が、姉妹都市でもある横浜と上海との友好関係を、書道を通して深めていきたいと発案したもの。また、「書道が生まれた中国で展示会を開いてみたい」というのが、遠藤氏の長年の願いでもあった。当日は、日中の筆達者による作品百六十七点が、約六百平方メートルのフロアに展示。国境を越えて、観る人の心をふるわせた。

遠藤氏が書の道に入られたのは、故郷（福島）の獣医さんから学んだことがきっかけだった。書くほどに、書の奥の深さに魅かれていつしかプロの道へ。「書を通じて豊かな人生を」という氏の信条が、書画交流展ではよく伝わって、展示会後の揮毫会では、さらに親睦が深まった。

拝するがごとく撮る駒沢探道氏の写真展 開催される

善光寺海外留学僧派遣育英会参与でもある、駒沢探道氏（日本写真家協会会員・本名、駒沢晃氏）が、昨秋、朝日ギャラリー（有楽町マリオン11階）で、「駒沢探道写真展―佛姿写伝・鎌倉「妙道」を開かれた。

京都の大佛師、故松久朋琳氏との運命的な

出会いを経て、仏像写真はお堂で拝するがごとく撮るべきだと気づいた駒沢氏。氏の写真展では、作品を前に思わず手を合やす人がいるというのも、きつとそこに、み仏の奥にある愛そのものが写し出されているのを感じるからだろう。

駒沢氏は昭和十五年長野市生まれ。昭和五十一年、文芸春秋の特派員として一年間渡米、帰国後、銀座、横浜、大阪、札幌等で個展を多数開く。写真集に『風車まわれ―水子地藏に祈る』（春秋社）、『佛姿写伝―鎌倉』（神奈川新聞社）など、エッセイ集に『一隅を照らす玲瓏の人々』（日本教文社）などがある。なお、エッセイ集には、善光寺住職、黒田武志氏のことも紹介されている。

人、皆、仏の子。藤本幸邦氏の教育
精神に黒田住職感動

社会福祉法人 円福会の養護施設・円福寺
愛育園（長野市）を、去る十一月、善光寺の
黒田武志氏が訪ねた。

同園は、理事長である元円福寺住職・藤本
幸邦氏が昭和二十三年に設立したもの。戦争
が残した傷跡の一つであった戦災孤児の窮状
に心を痛めた藤本氏は、昭和二十二年に、自
ら三名の孤児を上野駅からつれて来て、全国
の寺院に一寺院一孤児運動を提唱。昭和二十
三年、児童福祉法施行とともに寺の庫院をそ
のまま活用し、児童たちの親がわり、家庭が
わりの役割を果たす養護施設・園福寺愛育園
をスタートさせたのである。以来、藤本氏の

もとを巢立っていった児童たちは、三百五十
名にのぼる。

愛育園の精神は、人皆 仏の子。児童
の生きていく基本的な権利を守り、幼くして
負った心の傷をいやしつつ、健全な心身の発
達を願う藤本氏のすばらしい活動に、黒田氏
はたいへん感動を受けられたという。

藤本氏は現在、世界法民太陽学園の学園長
も兼任、世界一家を唱導し、アジア難民救援、
途上国学童支援のSABA運動も展開中。著
書に『おっしやんが証明した「実行の哲学」』
（株ぱんたか）他がある。

心もそろろ

はきものをそろえろと心もそろろ

心がそろろとはきものもそろろ

ぬぐとぎにそろえておくと

はくとぎに心がみだれない

だれかがみだしておいたら

だまっておろそかしておいてあげよう
そうすればきこつ

世界中の

人の心もそろそろでしよう

(田福寺愛育園 心のノートより)

田中智誠氏、隠元禪師の研究論文を

発表

第一法規出版株式会社発行の月刊誌『月刊・文化財』の第三四七号に、田中智誠氏が、『隠元禪師生誕四〇〇年と黄檗のいま』と題する研究論文を発表された。

中では、黄檗開山隠元隆琦禪師（大光普照国師。一五九二—一六七三）の生い立ち、中国における事蹟、渡米と開創の過程、また、

伽藍の寺宝、慈悲心についても詳しく述べられている。隠元禪師ゆかりの重要文化財の写真が多く掲載され、読みごたえのある内容。非常に熱心に研究を進められていることがうかがえた。

東隆眞氏の「タイ王国仏教つれづれ」 中外日報に四回連載

駒沢女子短期大学副学長・東隆眞氏（善光寺留学僧派遣育英会役員）の執筆原稿、「タイ王国仏教つれづれ—瞑想のワット・パクナムに詣でて」が、平成四年十月二十日から二十日までの中外日報で四回にわたり掲載された。

タイでは仏教は、国教に近い扱い。国民の約九十五パーセントは仏教徒で、国王も保護

善光寺ニュース

に力を入れているということ。また、ワット（寺院の意）、パクナム（河のほとりの意）、など、たとえば女子学生が読んだとしてもわかるように、やさしくしていねいに解説をしてくれながら書いてくれており、バンコクのワット・パクナムの日本人僧の関係も、興味深く読むことができる。最後にまとめとして、もつとよくタイ仏教を知れば、お互いがお互いの立場を理解し、尊重しつつ、仏陀釈尊を仰ぐことによって、等しく喜びを覚えるはずである。国際化、情報化のなかで、互いに理解し協力することによって新しい仏教のあり方を展望することが、世界平和への貢献につながっていく—ということを教えてくれている、すばらしい記事である。



ご寄付御礼

〈育英会寄付者〉

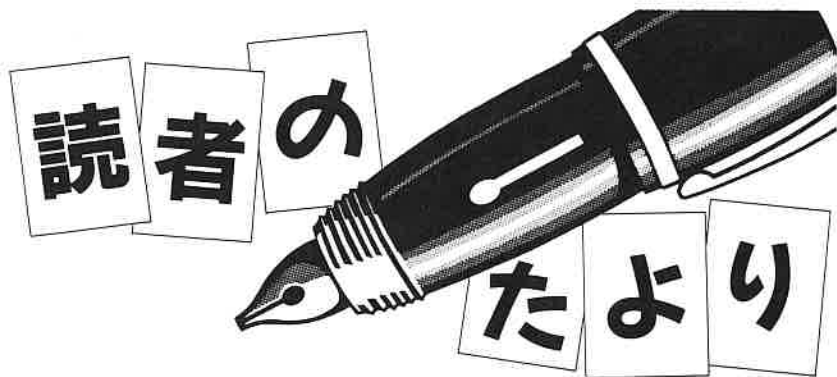
富永 豊重殿	二十万円
遠藤 清男殿	二十万円
小出 忠孝殿	十万円
小川 光生殿	十万円
松田 亮三殿	十万円
金剛 秀房殿	十万円
円 覚 寺殿	十万円
星野 一男殿	五万円
宮田林産(株)殿	五万円
岩波 道俊殿	三万円
村岡 弘義殿	三万円
角田 宗通殿	三万円
小松 スエ殿	三万円
都築 哲信殿	二万円
赫多 正円殿	二万円

匿 名殿	二万円
黒河内貞子殿	二万円
鈴木 たか殿	二万円
瀧澤 武雄殿	二万円
伊藤 幹雄殿	二万円
内海 忠男殿	二万円
山本喜代司殿	二万円
蔵谷 光雄殿	二万円
新木 定夫殿	二万円
飯塚平八郎殿	二万円
渡辺 眞吉殿	二万円
市岡 良治殿	二万円
匿 名殿	八千円
匿 名殿	八千円
越前 竹子殿	五千元
井上 美智殿	五千元

〈成寿賛助〉

島田喜久子殿	三万円
金剛 秀房殿	二万円
宮本 延雄殿	二万円
黒田 トシ殿	二万円
糠信 義男殿	二万円
船附 理人殿	五千元
万 福 寺殿	二千元
滝沢 孝子殿	二千元

「海外留学僧派遣育英会」
 ならびに「成寿」に、上記の方々よりご寄付をいただきました。心からお礼申し上げます。



日本のお坊さまたちとの
すばらしい体験

韓国 龍華寺法賢禅院
徹見

こんにちは。私は韓国の曹溪宗の僧で、法名を徹見と申します。前の冬に、タイのワットパクナムで、落合隆さま等の日本のお坊さまたちと、いっしょに修行生活を送らせていただきました。

私は昔、日本語研修のために東京に二年ほど住んだことがあるのです。少々日本語が話せるようになっていたおかげで、日本のお坊さまからいろいろなことを習うことができ

ました。同じ宗教ですが、国それぞれに特色ある修行生活があることがわかり、本当にすばらしい体験をさせていただきました。

今は帰国し、いつか日本の禅房に行つて、禅修行をしたいと願いながら、日々こちらの禅房で精進修行しております。

通勤電車で成寿を読み
満ち足りた気分

東京都調布市
松井千枝子

先日は『成寿』をご恵送くださり、本当にありがとうございました。私は毎朝、下高

井戸駅から、大好きなチンチン電車（世田谷線）に乗って会社に出勤しています。ほかの路線の混雑とは少し違った混み方で、この電車は車道の信号でも止まるのです。朝のひとときを、座席に座ってぼんやりと無駄に過ごすのが日課の私でしたが、『成寿』を手にしてからは、電車の中でたっぷりと読ませていただくようになりました。以来、毎朝、何かとても満ち足りた気分にならせていただいております。

佐藤俊明老師の「アンコール・ワット」もとても興味深く読ませていただきました。いつかぜひ、お目もじと機会をいただければと思います。善光寺さまのますますのご活躍をお祈り申し上げます。

慌ただししい日々にも、ふとお釈迦さまに思いをはせて

石川 正昭・洋子
東京都杉並区

釈迦さま、また、ご先祖さまへ、ふと心をとめて、感謝し、思いを巡らせる時を持つことができました。どうぞときどきお参りさせてください。ありがとうございます。

靴の間違い
きつと悪意なし

机 須眞子
横浜市

このたびは、ごていねいにも、靴紛失の弁償代金をご送金くださり、ありがとうございます。靴を間違えた方は何処のどなたかは存じませんが、悪意のないことを祈らずにはられません。いえ、そう信じております。

しかし善光寺さまにはずいぶんお手数をおかけいたしました。厚く御礼申し上げます。

“出会い”という宝石箱、
ありがとうございます

山形県
鶴岡市善宝寺

先般はお忙しい中、善宝寺に御来山いただきまして、あ

りがとうございました。大八木師、監寺老師：尊敬できるすばらしい上司に恵まれ、仕事のできる幸せ。また多くの方々との貴重な出会いもいただき、本当に感謝しております。

温厚で率直にものを申される黒田老師のお人柄、謙虚な奥さまの優しさに接し、心温まる出会いを頂戴させていただきました。素敵な宝石箱をありがとうございました。

錦秋の庄内の地を、お二人で楽しまれたことと存じます。またどうぞお立ち寄りください。お体くれぐれもご自愛くださいませ。

宗教的に未来ある
北東アジアの地域

静岡県清水市
池田 憲彦

『成寿』秋季号拝見、カンボジアご苦労さまでした。平成三年から四年にかけて、私は北東アジアと北太平洋に縁が深くなり、今年(平成四年)は春、夏と二回、沿海州からサハリン(旧樺太)に足を延ばしました。この地域は、アジアにありながら、ロシア人をはじめとする白人の多いところですが、しかししたしかにアジア人も棲息しています。とくに—中国風—if いうならば—

朝鮮族がかなり散在しています。とにかく、不思議な世界です。

今後、二十一世紀にかけて、宗教的にも未来のある地域だと私は思います。また今年も行く予定でいます。

留学僧の清純さ
真摯さに感銘

千葉県東葛飾郡龍泉院
権名 宏雄

号毎に中身の濃い『成寿』誌、ありがたく読ませていただきました。中でも生々しいカンボジアの紹介、山主ご母堂さまの追悼記事に心打たれました。故ご母堂さまには、

光真寺さまで一度お目にかかったのですが、白純老師（黒田武志老師ご尊父）と親交させていただいていた私の父のことを、覚えていてくださりお話をしてくださいました。そのときの温容和声が目には浮かび耳に残ります。ご冥福をお祈り申し上げます。さらにまた、留学僧のローフ師、権さんの清純さと真摯さに感銘一入です。ふり返って、我々、日本人僧侶の現状はどうであろう。今、何をなすべきか、まさに原点に帰って考え、行動しなければ、仏教界はますますダメになると反省させられました。ただた

だ、御礼申し上げるのみです。

合掌

生死を越える
ご母堂さまの慈悲

宮城県仙台市
伊藤 道哉

このたびは『成寿』第十九号をご恵送賜り、感激にたえません。ご母堂さまには、衆生のため、なお慈悲をもって教化にあたられ続けていらつしやる：誠に生死を越えて、紅糸線は不断であります。私どもも、老師のお導きがあればこそ、また、ご母堂さまの慈悲に照らされたからこそ今日があるのです。今後とも私

どもをご教導賜りますよう伏してお願い申し上げます。

表紙の仏さまは、
老師のお母さまそっくり

東京都練馬区
大金 義次・きよみ

いつも『成寿』をありがたうございます。お母さまが亡くなられたそうで、おさびしいこととございました。お母さまのお顔が、成寿の表紙の仏さまのお顔とそっくりなことにびっくりいたしました。

黒田さまも、お母さまそっくりですね。お母さまを思う黒田さまのお心、そして、仏の道を立派にやりとげたお子さ

またちに見送られ、お母さまはきっと安心してあの世へ召されていかれたことと思います。

同じ考えを持つ方々の
多さに感激

東京都板橋区
鈴木 善鳳

先日は、善光寺海外留学僧派遣育英会の論文集、資料、そして『成寿』をお贈りいただきましてありがとうございます。

私は、タイへの留学をかねてから希望いたす者で、今回とくに、落合隆さま、品田裕淳さまの論文を興味深く読

ませていただきました。意外と多くの方が私と同じような考え方をお持ちでいらっしやることに、たいへん感激いたしました。本当にありがとうございます。送っていただきました。送っていただきましてお礼に、さいしゅう些少ではございますが同封させていただきます。どうかお納めくださいませ。
おからだ何とぞご自愛くださいませ。
まずはお礼のみ申しあげます。

合掌

住職と教師やりがいのある
仕事の中で

長崎県須坂師安養寺
玉井 広観

私は父が亡くなって以来、安養寺の住職を務めるとともに、公立中学校教諭としても勤務しております。毎日、生徒たちと接していると、ほとほと疲れてしまうこともありませんが、それ以上にやりがいのある仕事です。

先日、『成寿』の中の御母堂さま追悼の記事を読み、あらためて安養寺との関係を知りました。当寺にある大般若経は、明治時代にそろえられた

もので、『朴翁代』と書いてあります。因縁の深さを感じます。心からお悔やみ申し上げます。

平日は学校に出ており忙しい私ですが、折折にいただくご本から、海外派遣留学僧等、善光寺さまの活動の様子がよくわかり、一生懸命読ませていただいております。またお会いできる日を楽しみにしております。

アンコール特集
おもしろかったですね

毎日新聞学芸部
松本 伸夫

先日、アンコール遺跡を守

るコンサベーション・オフィスの座を作りつつ、八日間毎日のように遺跡見学をしてきたばかりなので、成寿秋季号のアンコール特集の写真、紀行文をおもしろく拝見いたしました。

御母堂さま
御逝去のこと

東京都港区天光院
真野 龍海

小生、去る三月、定年の後、自分の記念の各行事に忙殺されて、あつという間に半年が過ぎました。そのような足下の定まらぬ状態でしたが、やつと落ち着いてきました。ア

ンコール・ワットの写真、出不精の私は、とても尊く拝見させていただきますました。貴会のみますますの発展を祈っております。



お便りを募集します

いつも温かいお便りをありがとうございます。成寿では春号から、さらにいつそう読者のページを心ふれ合う豊かなものにしていきたいと考えています。そこで、みなさまからさまざまなテーマのお便りを募集し、掲載させていただこうと思っております。テーマ例「心温まったあの日のできごと」

「私の新発見」「お料理アイディア」

「うちの素敵な家族紹介(おじいちゃん、おばあちゃん紹介等)」

「うちの近所のユニークなお坊さま」

「私の作った詩」「投稿写真」

「成寿のご感想」など何でもけっこうです。

楽しいお便り、ユニークなお便り、ご意見、ご感想をお待ちいたしております。

第十回海外留学僧募集について

目的

大学卒業相当以上の学力を有し、仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして心身堅固なものを海外に派遣し、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る優秀な人材を育成することを目的とする。

派遣先

世界 各地

派遣期間

一年間とするも場合により延長するも可

給 費

派遣先までの往復旅費及び滞在に要する必要経費を支給する

募集人員

2～3名

提出書類

- | | |
|-----------|----------------|
| (1) 論文 | (2) 保証人と連署した願書 |
| (3) 卒業証明書 | (4) 履歴書 |
| (5) 推薦書 | (6) 健康診断書 |

提出レポート

● 禅の国際化と私の役割

● 二一世紀の仏教と私の役割

● タイの仏教に学びたいこと

● 未来社会の仏教と私の役割

いずれか一題を選ぶこと、枚数はいずれも四〇〇字詰原稿用紙五～一〇枚

原稿〆切 平成五年十二月十日

善光寺海外留学僧派遣育英会事務局

FOREWORD

San Francisco Peace Conference to Japan was held 42 years ago. There ex-President Jayawardene (the then Minister of Finance) represented Ceylon (Sri-Lanka), where he cited the Lotus Sutra :

Man can be beyond hatred
only by love,
He, by hatred,
cannot be that.

He emphasized the Allied Powers that they should support Japan by “tolerant love” , and was opposed to the plan of USSR to divide and rule Japan, then he renounced the compensative right.

This is the important thing for today’s prosperity of Japan. As a result, the monument to the national honor was erected left by the statue of Buddha of Kamakura the year before last.

The Zenkoji Scholarship Foundation sent two priests to Sri-Lanka, and recently the Sri-Lanka upper class Buddhist nun was adopted as a student in Japan. Last autumn, I visited Sri-Lanka for our mutual understanding and promotion of friendship.

Fortunately, I had the honor of having the most elder of Buddhists as an adviser, and also of meeting the President, who had a high opinion of our activity of the Scholarship Foundation. This is the really significant result for our expected future development.

Next topics, ex-Sōin Kannin Sumi-Tōgen of Head-quarter temple Sōjiji passed away last summer. I inform of this sorrow with my deepest sympathy.

Lastly, about contents of “Seiju”, we would refer to various advice and make efforts to improve one by one. Please cooperate with us.

編集後記

▼新しい年を迎え、皆様には愈々健勝のことと存じます。『成寿』二十号をお届け致します。

▼本号はスリランカ特集号です。昨年十月、黒田方丈に善光寺海外留学僧派遣育英会理事・佐藤俊明老師と本誌の表紙絵などでおなじみの伊藤三喜庵先生が同行取材しました。スリランカでは各地で歓待をうけ、要人の方々にも親しくお目にかかることができ、感謝に堪えません。スリランカの育英生を採用したことも大変あり、深いご縁ができたことを大変嬉しく思っております。

▼カラーグラビアは写真家・田村仁先生の写真を掲載させていただきました。スリランカ訪問記と合わせてご覧いただければ一層味わい深いこ

とと思います。田村先生に誌上よりお礼申し上げます。

▼前大本山総持寺祖院監院、前北米布教総監、鷺見透玄老師が遷化されました。追悼のことは東隆眞先生より頂きました。黒田方丈が総持寺修行時代に、大変お世話になった方で、ご遺徳をしのび、心からご冥福をお祈り申し上げます。

▼円福寺・藤本幸邦老師からは、昨年他界した黒田方丈の母堂、故黒田嘉さまの、ありし日のエピソードを寄せていただきました。ありがとうございます。

▼第九回育英生が決定しました。檀信徒の皆様の大なるご支援に心から感謝致しますと共に、これからも何卒よろしくお願い申し上げます。

▼黒田方丈の講演が『心やわらかに今を生きる説法』（佼成出版社刊）に

掲載されております。ご一読いただければ幸いです。

▼次号には中国の育英生・李幼鱗氏と共に中国を訪ねてのご報告と、創刊号から二十号までの表紙絵のバックナンバーをそろえて掲載致します。

▼今回は編集の一部をフリーライターの宮川由香様に手伝っていただきました。ありがとうございます。

▼二月三日に節分祈禱会を執り行います。一年間無事でありませうようご祈念申し上げます。どうぞご参拝下さいませようご案内申し上げます。

成寿 第二十号

平成五年一月二十日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野町一六〇四

電話 〇四五（八四五）一三七一

Fax 〇四五（八四六）二〇〇〇

印刷所 神奈川新聞社出版局



三
世
尊





横濱善光寺